

**令和5年度
自己点検・評価「年次報告書」**

**長崎女子短期大学
自己点検評価室**

【目次】

部 署 名	職 名	氏 名	頁
学長	学長	玉島 健二	1
栄養士コース	コース長	太田 美代	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濱口 なぎさ	6
幼児教育学科	学科長	本村 弥寿子	8
学生部	部長	織田 芳人	10
図書館	館長	森 弘行	12
自己点検評価室	室長	武藤 玲路	14
事務局	局長	高井 達司	16
入試広報室	室長	高井 達司	18
キャリア支援センター	センター長	原田 実輝	20
入試委員会	委員長	玉島 健二	22
FD・SD委員会	委員長	武藤 玲路	24
IR推進室	室長	森 弘行	26
教務委員会	委員長	桑原 真美	28
教職課程委員会	委員長	本村 弥寿子	30
教育SS運営委員会	委員長	太田 美代	32
研究倫理委員会	委員長	織田 芳人	34
募集・広報委員会	委員長	森口 和美	36
紀要・図書委員会	委員長	中村 浩美	38
学生指導委員会	委員長	織田 芳人	40
学生支援委員会	委員長	山中 慶子	42
障がい学生支援委員会	委員長	織田 芳人	44
寮務委員会	委員長	宮崎 伸一郎	46
学生相談室	室長	荒木 正平	48
地域連携・子育て支援センター	センター長	古賀 克彦	50

職 名	氏 名	頁
学長	玉島 健二	52
教授	森 弘行	53
	織田 芳人	54
	福井 昭史	55
	武藤 玲路	56
	中澤 伸元	57
	松尾 公則	58
	濱口 なぎさ	59
准教授	本村 弥寿子	60
	中村 浩美	61
	太田 美代	62
	古賀 克彦	63
講師	荒木 正平	64
	船勢 肇	65
	野田 章子	66
	桑原 真美	67
	江頭 万里子	68
	大徳 朋子	69

職 名	氏 名	頁
助教	山中 慶子	70
	太田 智子	71
実習助手	一瀬 優美	72
	石橋 花琳	73
	有得 結	74
事務局長	高井 達司	75
キャリア支援センター長	原田 実輝	76
事務次長	宮崎 伸一郎	77
事務（会計）	中山 敬喜	78
〃（教務）	森口 和美	79
〃（教務）	林田 翔太郎	80
〃（学生）	櫻井 縁	81
〃（入試広報・庶務）	牧島 愛実	82
情報管理センター	山口 洋	83
司書	伊藤 理恵子	84

令和5年度
「部署別報告書」

令和5年度 「学長・運営委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：玉島 健二（学長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学長運営方針の目標達成 令和5年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標について、到達度80%達成を目指し、入試・運営委員会が中心的役割をはたすように、リーダーシップを発揮する。 2. 全学及び学科・コースの特色化の推進 本学全体及び学科・コースの特色化を推進すべく、入試・運営委員会をはじめ、あらゆる機会を捉えて土俵に乗せ、広報等に努める。 3. 学生募集活動への積極的参画及び推進 入試広報室長の事務局長兼任を機に、これまで以上に学生募集活動に積極的に取り組み、定員充足に努める。また、長崎女子高校からの志願者（入学者）は25名以上を目指す。 4. 学生満足度の向上 あらゆる機会を通して、学生の要望や意見に耳を傾け、具体的な改善につなげるとともに、卒業時アンケートにおける「全体的な満足度」について4.0以上を目指す。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. ①学長運営方針を常に意識して業務に当たるとともに、教職員の年次報告書作成では学長運営方針を踏まえた目標設定となるように指導する。 ②学長運営方針の進行管理を定期的に行い、必要に応じて関係教職員との意思疎通を図るため、打ち合わせや協議を行う。 2. 学科会議やコース会議の内容について、学科・コース長より報告を受け、必要に応じてアドバイスを行う。広報については、入試広報室や募集広報委員会と連絡を取り、必要な指示を出す。また、他学の情報収集に努め、学内における情報の共有に努める。 3. ①進学ガイダンスや高校訪問は積極的に参加する。特に前期については、時間の許す限り参加する。 ②長崎女子高校については、短大説明会や入試説明会等は、学長自ら説明する機会を多く設ける。 4. ①学生からの意見や要望については、優先順位を決め、丁寧に対応する。 ②学友自治会役員との意見交換会を1回以上設定し、学内活性化に努める。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ①教職員の年次報告書作成では学長の運営方針を意識した記載が多くなされた。また、事務局からの新規提案や学長裁量経費の申請でも学長運営方針を踏まえたものとなっていた。 ②学長運営方針のうち、あまり取り組めなかった項目としては、「SDGsの取組」、「就職先開拓」、「防犯訓練の実施」、「地域貢献活動」、「ボランティア活動」、「短大コンソーシアムの活動」である。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ・栄養士コースからは毎週コース会議の議事録をもらった。また、教務委員長からは定期的に協議内容の報告をもらった。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ①担当する高校への訪問、離島地区や口加、諫早東、島原農業、大村城南等の進学ガイダンスに参加した。 ②長崎女子高及び長崎明誠高校へは予定どおり入試説明会等に出席した。長崎女子高校からの入学予定者は25名である。 4. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 ①学生からの要望については、要望の内容が細かく、対応できなかった。②意見交換会は夏休み中に幼児教育学科の実習が重なり、結果的にメールのやりとりとなった。卒業時アンケートの満足度はS=4.2、L=4.1、Y=4.2であった。「後輩に入学を勧めたいか」の項目が4.0を下回った。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
令和5年度をもって退職となる。

令和5年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学長運営方針の目標達成
達成度80%を目指し、リーダーシップを発揮
2. 全学及び学科・コースの特色化推進
学科・コース長との打ち合わせ実施
3. 学生募集活動への積極的参画・推進
定員充足及び長崎女子高校からの志願者増員
4. 学生満足度の向上
卒業時アンケートの満足度4.0以上

Do 実行

1. ①年次報告書の作成は運営方針を踏まえる
②運営方針の定期的な進行管理
2. ①学科・コース長との打ち合わせ、助言
②他大学等の情報収集
3. ①進学ガイダンス・高校訪問の積極的参加
②長崎女子・長崎明誠への説明は学長が実施
4. ①学生の要望は優先順位を決め、対応
②学友自治会役員との意見交換会実施

Act 改善

1. 令和5年度をもって退職となる。次期
学長の努力に期待したい。

Check 検証

1. ①教職員の年次報告書作成や事務局からの新規提案は運営方針を踏まえたものであった。
②「SDGsの取組」等、いくつかの項目であまり取り組めなかった。
2. 栄養士コースからは毎週会議の議事録をもらい、教務委員長からは適宜報告を受けた。
3. ①担当高校への訪問及び離島地区や諫早東、島麓、大村城南の進学ガイダンスに参加。
②長崎女子、長崎明誠の入試説明会に自ら出向いた。長崎女子からの入学予定者は25名。
4. ①学生からの要望は内容が細かく、また予算の関係で対応できなかった。
②対面での意見交換はできず、メールで実施。

令和5年度 「栄養士コース」 年次報告書	
区分：	学科コース ・委員会等・事務局等・教職員個人・その他（ ）
氏名：	太田 美代（コース長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. コース職員が協働し、4項目の努力目標にチームとして取り組む。 ①選ばれる短期大学づくりの推進 ②満足度の高い短期大学づくりの推進 ③地域の発展に貢献する短期大学づくりの推進 ④更なる教育の質向上を目指した短期大学づくりの推進 2. 食を通じた地域貢献につながる取組を充実させ、一人一人の自己肯定感を高めて社会性を涵養する。 3. 専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者60%以上、及びA認定50%以上を目指す。 4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的な評価の合計)を目指す。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 定期的なコース会議の開催を継続して実施するとともに、ICTの活用を図り、目標達成に向けて円滑な意思疎通や協働体制の維持に努める。 2. 「長崎食育学」公開講座やゼミナール活動等で社会貢献活動に取り組み、「ゼミナール活動発表会」を実施して活動のまとめを行う。 3. eラーニングを導入し、個別の反復学習を可能にして自ら学ぶ姿勢を支援する。チャレンジタイムとスタートアップセミナーの時間をゼミ・プレゼミに組み入れ、計画的に学力向上を図る。教育サポートスタッフの活用を図りながらコース職員の協働で目標達成を目指す。 4. 一人一人を大切にしたいきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、中高生を対象とした料理教室などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。	
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にすることができたが、ICTの活用には至らなかった。対面での会議を密に行うとともに、日頃の伝達はメール等を活用して、意思の疎通を図ることは円滑にできた。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 恒例の卓袱料理試食会を2年生が協力して実施し、当日の様子は8月2日付け長崎新聞に掲載された。公開講座では、幼稚園児、小学生、一般の方に食の大切さを伝え、学生が調理補助や説明に活躍し、学んだことを実践する場とすることができた。また、ゼミナール活動を中心に、子ども食堂へのボランティア活動や、長崎の郷土料理のアレンジレシピ、食品ロス削減に向けたメニューの考案等に取り組んだ。総菜アレンジレシピ、ヴィーガン・アレルギー対応レシピの動画は、食品スーパーマーケットとタイアップしてSNSに公開している。古賀ゼミが取り組んだご当地タニタごはんコンテストでは、みごと全国大会への出場を果たし、テレビや新聞の取材を受けた。 さらに、夏にはNIBから「ながさき食改革～スマ塩減塩ライフ～」の番組制作への協力依頼を受け、郷土料理の減塩レシピを作成して、学生が番組内で調理を行った。番組担当者に、県庁レストランの坂本シェフが本学を紹介してくださったとのことで、日ごろの活動を評価して推薦いただいたものと考えている。 卒業時調査の学修成果の自己評価では、全ての項目において1年次よりも自己評価が高くなっているところから、目標は達成できたと考える。	
3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 栄養士実力認定試験の結果、短大平均の得点を上回る者が23名中10名で43.5%。目標の60%には届かなかった。A判定の学生も同じく10名で43.5%であった。あと1～3点でA判定となる学生が2名いた一方でC判定の学生が4名で17.4%おり、前年度に比べ成績上位者が減って成績下位の者が増え、全体の平均点を押し下げた結果となった。次年度は、さらに成績不振の学生が多いため、栄養士実力認定試験対策と併せて、学修支援への取組も継続する必要がある。いかに学修への意欲を持たせるかが課題となっている。	

4. 自己評価「S・**A**・B・C・D」

卒業時調査の「本学に入学して学んだことをどう思うか」という項目における肯定的評価は 83.3%で残り 16.7%はどちらでもないと回答していた。目標の 90%には届かなかったが、否定的な回答は無く、自由記述では、ほとんどの学生が短大生活を有意義なものとしてとらえる意見だった。「本学で学んだことが将来に生きる」と考えている学生は 100%だったので、本学での学びの有用性に対する評価は高かったものとする。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 就職先に求められる「社会性」と「実践力」の向上を図るために、
 - ①「卓袱料理試食会」、ゼミや公開講座の活動等で食を通じた地域貢献につながる取組を充実させる中で一人一人の自己肯定感を高め、社会性を涵養する。
 - ②プレゼミナールで「料理コンクール」を実施し、専門的な学びへの意欲を喚起して実践力を養う。
 - ③学外実習を2回実施し、栄養士としての素養を深める。
2. 学力向上対策として
 - ①新設の教養科目「基礎数理」と「国語表現法」で基礎学力の底上げを図る。
 - ②e ラーニングを活用し、個別の反復学習を可能にして自ら学ぶ姿勢を支援する。
 - ③チャレンジタイムとスタートアップセミナーの時間をゼミ・プレゼミに組み入れ、計画的に学力向上を図る。
 - ④学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会として自己肯定感を高め、学習意欲を喚起する。
3. 社会人を含め、いろいろな背景をもつ学生が入学してくることを踏まえ
 - ①早期に個人面談を行い、コース内で対応を検討する。
 - ②チューターを中心に対応を行うが、情報共有をして教職員全体で支援を行う体制を作る。
教職員も、課題を1人で抱え込まないように心掛ける。
 - ③特別支援教育に対する教職員の学びを深める。できれば専門家の相談先を持ちたい。

令和5年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1. コース職員が協働し、4項目の努力目標にチームとして取り組む。
2. 食を通して地域貢献につながる取組を充実させ、一人一人の自己肯定感を高めて社会性を涵養する。
3. 専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者60%以上、及びA認定50%以上を目指す。
4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的な評価の合計)を目指す。

Do 実行

1. 定期的なコース会議の開催を継続して実施するとともに、ICTの活用を図り、目標達成に向けて円滑な意思の疎通や協働体制の維持に努める。
2. 「長崎食育学」公開講座やゼミナール活動等で社会貢献活動に取り組む。「ゼミナール活動発表会」を実施して活動のまとめを行う。
3. eラーニングを導入し、個別の反復学習を可能にして自ら学ぶ姿勢を支援する。チャレンジタイムとスタートアップゼミナールの時間をゼミ・ブレゼミに組み入れ、計画的に学力向上を図る。教育サポートスタッフの活用を図りながらコース職員の協働で目標達成を目指す。
4. 一人一人を大切にしたいきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、中高生を対象とした料理教室などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

Act 改善

1. プレゼミナールで「料理コンクール」を実施し、専門的な学びへの意欲を喚起して実践力を養う。
2. 学力向上対策として
 - ①新設の教養科目「基礎数理」と「国語表現法」で基礎学力の底上げを図る。
 - ②eラーニングを活用し、個別の反復学習を可能にして自ら学ぶ姿勢を支援する。
3. 社会人を含め、いろいろな背景をもつ学生が入学してくることを踏まえ
 - ①早期に個人面談を行い、コース内で対応を検討する。情報共有をして教職員全体で支援を行う体制を作る。
 - ②特別支援教育に対する教職員の学びを深める。できれば専門家の相談先を持ちたい。

Check 検証

1. ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にすることができた。ICTの活用は次年度への継続課題として取り組む。
2. 公開講座やゼミナール活動等を通して、学生の活躍の場を設けた。古賀ゼミは、料理コンクールで全国大会出場を果たした。卒業時調査の学修成果の自己評価では、全ての項目において1年次よりも自己評価が高くなっているところから、目標は達成できたと考える。
3. 栄養士実力認定試験の結果、短大平均の得点を上回る者が23名中10名で43.5%。A判定の学生も同じく10名で43.5%であった。前年度に比べ成績上位者が減って成績下位の者が増え、全体の平均点を押し下げた結果となり目標に届かなかった。
4. 卒業時調査の「本学に入學して学んだことをどう思うか」という項目における肯定的評価は83.3%で残り16.7%はどちらでもないかと回答していた。目標の90%には届かなかったが、否定的な回答は無く、自由記述では、ほとんどの学生が短大生活を有意義なものとしてとらえる意見だった。

令和5年度 「ビジネス・医療秘書コース」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	濱口 なぎさ（コース長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	1. 学長裁量経費を活用し、コースの特色化に繋げる。 2. 実践型教育プログラムの充実を図り、卒業時の満足度向上を図る。 3. 学生のプレゼンテーション能力向上を図る。 4. 公開講座を企画し、教員・学生と地域の方々との交流の機会を設け、地域の発展に貢献する。
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	1. 2 年前期（22L）の「ゼミナール」にて、学長裁量経費を活用し本学オリジナル・ノベルティグッズを作成し、オープンキャンパスで配布する。商品開発をコースの特色としてアピールする。 2. 令和5年度から「学習ポートフォリオ」を導入し、1 年次からの自らの活動に対する目標設定と振り返りを習慣化して記録し、就職活動への早期の意識づけと検定への積極的な取り組みを促し、2 年後期の実践型教育プログラムの充実を図る。 3. 前後期 1 回ずつ計 2 回 1・2 年合同の発表会を開催し、緊張する場面での発表経験の場を複数回設ける。また、中小企業家同友会による模擬面接を行い、就活の場での自己表現の参考にする。コース教員の担当科目でアクティブラーニングを実施する。 3. 令和5年度は 2 つの公開講座を企画する。県内企業と連携し、近隣の学童保育の児童を対象にした講座と、SDGs に関連した講座を実施する。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 前期の「ゼミナール」で作成したオリジナルのトートバッグをオープンキャンパス参加者に配布し、好評を博した。後期の「ビジネスプランニング」では、昨年に引き続きアロマ商品の開発と、マスキングテープ、シールの作成を行った。産学連携による商品開発はコースの特色となりつつあるが、広報不足により学生募集に繋がっていない。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 「学習ポートフォリオ」を導入したが、学生の目標設定・振り返りが習慣化しているかの確認ができなかった。一方で 22L の就職活動は例年以上に順調に進み、12 月末時点で就職率 100% を達成し、卒業時調査でも高い満足度を示している。「学習ポートフォリオ」の活用を促し、学生の活動状況を教員が把握できるシステム構築が必要である。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 1・2 年合同の発表会を 2 回行った。実施後のレポートから、2 年生は在学中に 4 回の発表会を経験したことで、人前での発表に対する抵抗感が薄れ、中には発表を楽しむ余裕が出たとの感想も得られた。中小企業家同友会による模擬面接は、就職活動において自己表現する際に役立つ経験となっている。コース教員の担当科目でアクティブラーニングを実施し、学生が発表する場を設けた。 4. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 昨年度はできなかった公開講座を 2 つ実施できた。南島原市の企業と連携し、学童クラブの児童を対象に行った公開講座は定員充足率 100% となり、参加者の満足度も高かった。一方で一般市民を対象に開催した公開講座では、十分な広報活動ができず定員充足率 27% にとどまった。また、両講座とも学生スタッフが参加しなかったため、学生と地域の方々との交流の場とはならなかった
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	1. 令和7年度のコース再編に向けて 3 つのポリシー、カリキュラム等の具体化を図る。 2. コースの特色としての産学連携による商品開発を定着させ、学生のプレゼンテーション能力の向上を図るとともに学生募集にもつながるような効果的な広報活動を行う。 3. 実践型教育プログラムを充実させるためには、学生たちが 1 年次から意識できるよう「学習ポートフォリオ」を活用し、PDCA サイクルに沿った目標達成を支援するシステム構築を行う。 4. 課題を抱えた学生への対応はコース教員全員で協力して行う。学生の受講態度等に目を配り、些細なことでもコース内で情報を共有し、無事に卒業するまできめ細かく支援する。 5. 外部人材や事業所を活用した公開講座を企画し、教員・学生と地域の方々との交流の機会を設け、地域の発展に貢献する。

令和5年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 学長裁量経費を活用し、コースの特色化に繋げる。
2. 実践型教育プログラムの充実を図り、卒業時の満足度向上を図る。
3. 学生のプレゼンテーション能力向上を図る。
4. 公開講座を企画し、教員・学生と地域の方々の交流の機会を設け、地域の発展に貢献する。

Do 実行

1. 2年前期(22L)の「ゼミナール」にて、学長裁量経費を活用し本学オリジナル・ノベルティグッズを作成し、オープンキャンパスで配布する。商品開発をコースの特色としてアピールする。
2. 令和5年度から「学習ポートフォリオ」を導入し、1年次からの自らの活動に対する目標設定と振り返りを習慣化して記録し、就職活動への早期の意識づけと検定への積極的な取り組みを促し、2年後期の実践型教育プログラムの充実を図る。
3. 前後期1回ずつ計2回1・2年合同の発表会を開催し、緊張する場面での発表経験の場を複数回設ける。また、中小企業家同友会による模擬面接を行い、就活の場での自己表現の参考にする。コース教員の担当科目でアクティブラーニングを実施する。
3. 令和5年度は2つの公開講座を企画する。県内企業と連携し、近隣の学童保育の児童を対象にした講座と、SDGsに関連した講座を実施する。

Act 改善

1. 令和7年度のコース再編に向けて3つのポリシー、カリキュラム等の具現化を図る。
2. コースの特色としての産学連携による商品開発を定着させ、学生のプレゼンテーション能力の向上を図るとともに学生募集にもつながるような効果的な広報活動を行う。
3. 実践型教育プログラムを充実させるためには、学生たちが1年次から意識できるように「学習ポートフォリオ」を活用し、PDCAサイクルに沿った目標達成を支援するシステム構築を行う。
4. 課題を抱えた学生への対応はコース教員全員で協力して行う。学生の受講態度等に目を配り、些細なことでもコース内で情報を共有し、無事に卒業するまできめ細かく支援する。
5. 外部人材や事業所を活用した公開講座を企画し、教員・学生と地域の方々の交流の機会を設け、地域の発展に貢献する。

Check 検証

1. 前期の「ゼミナール」で作成したオリジナルのトートバッグをオープンキャンパス参加者に配布し、好評を博した。後期の「ビジネスプランニング」では、昨年(引)は続きアロマ商品の開発と、マスキングテープ、シールの作成を行った。産学連携による商品開発はコースの特色となりつつあるが、広報不足により学生募集に繋がっていない。
2. 「学習ポートフォリオ」を導入したが、学生の目標設定・振り返りが習慣化しているか確認ができなかった。一方で22Lの就職活動は例年以上に順調に進み、12月末時点で就職率100%を達成し、卒業時調査でも高い満足度を示している。「学習ポートフォリオ」の活用と、学生の活動状況を教員が把握できるシステム構築が必要である。
3. 1・2年合同の発表会を2回行った。実施後のレポートから、2年生は在学中に4回の発表会を経験したこと、人前で発表に対する抵抗感が薄れ、中には発表を楽しみ、余格が出たとの感想も漏れた。中小企業家同友会による模擬面接は、就職活動において自己表現する際に役立つ経験となっている。コース教員の担当科目でアクティブラーニングを実施し、学生が発表する場を設けた。
4. 昨年度はできなかった公開講座を2つ実施できた。南鳥原市の企業と連携し、学童クラブの児童を対象に行なった公開講座は定員充足率100%となり、参加者の満足度も高かった。一方で一般市民を対象に開催した公開講座では、十分な広報活動ができず定員充足率27%にとどまった。また、同講座でも学生スタッフが参加しなかったため、学生と地域の方々の交流の場とばならなかった。

令和5年度 「幼児教育学科」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：本村 弥寿子（学科長）	
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 保育実践力育成及び向上のための取り組みのさらなる充実を図る。 2. 本学科の専門性を活かした地域貢献活動に大いに取り組み、地域に信頼される学科を目指す。 3. 特別な配慮が必要であったり学習意欲が低下していたりなど課題を抱える学生への対応を丁寧に行い、学科全体での支援体制を強化する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 「保育実習指導」での取り組みである附属幼稚園での体験学習や、現役保育者の講演、その他の演習を、「実践力育成のための教育プログラム」とし、これまで以上に実習及び現場で活かせる充実したものとする。 2. ゼミナールや各教員の専門性を活かし、公開講座及びボランティア活動等への積極的な参加を試みる。 3. 月2回の学科会議に加え必要に応じて臨時の会議を設けることにより、課題を抱えた学生の早期発見と課題解決を目指す。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 「保育実習指導」の授業内容の精選及び体験学習の見直し等を行った。その結果、各教員の担当科目の授業内容と必要以上に重複することがなくなり、実習やゼミナール活動に即生かせる内容を取り入れることが可能になった。このような取り組みが、「本学で学んだことが将来に活きるか」「そう思う」「ややそう思う」が93.3%の結果につながった。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 公開講座を2件実施した。定員充足率はそれぞれ142%と50%の結果であった。ゼミナールにおいては、特別支援学校での授業や発達支援センターでの音楽遊び、商業施設での絵本の読み聞かせなどのボランティア活動、また、学生の学びを深めるために外部の関連施設を訪問するなどし、教員の専門性を生かした活動が積極的になされた。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 月2回の学科会議において、欠席が多かったり提出物が期限内に提出されなかったり等、学修意欲が低下気味と思われる学生について情報共有を徹底した。また、学修の理解が十分でないと思われる学生についても情報共有を行い、必要に応じてチューター面談などをこまめに行った。その結果、退学者5名、休学者5名であった。他にも、相談や見守りが必要な学生の情報共有が行われたケースがあり、教員の陰ながらの学生支援が速やかに行われる結果となった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 現在進行中の「保育実習指導」の授業内容見直しをさらに進めていく。その中で、体験学習等附属幼稚園との幼大連携の活性化を図り、共に学生の保育実践力を高める取り組みを模索して「保育実習指導」の授業計画に取りこんでいく。 2. さらに外部とのつながりを積極的に行い、学生の学びの充実につなげる。 3. 月2回の学科会議を継続し、特別な配慮が必要であったり学習意欲の低下が見られたりなど支援や見守りが必要な学生の早期発見や教員の対応方法などの情報共有を徹底する。	

令和5年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1. 保育実践力育成及び向上のための取り組みのさらなる充実を図る。
2. 本学科の専門性を活かした地域貢献活動に大いに取り組み、地域に信頼される学科を目指す。
3. 特別な配慮が必要であったり学習意欲が低下していたりなど課題を抱える学生への対応を丁寧に行い、学科全体での支援体制を強化する。

Do 実行

1. 「保育実習指導」での取り組みである附属幼稚園での体験学習や、現役保育者の講演、その他の演習を、「実践力育成のための教育プログラム」とし、これまでに以上に実習及び現場で活かせる充実したものとす。
2. ゼミナールや各教員の専門性を活かし、公開講座及びボランティア活動等への積極的な参加を試みる。
3. 月2回の学科会議に加え必要に応じて臨時の会議を設けることにより、課題を抱えた学生の早期発見と課題解決を目指す。

Act 改善

1. 現在進行中の「保育実習指導」の授業内容の見直しをさらに進めていく。その中で、附属幼稚園との幼大連携の活性化を図り、共に学生の保育実践力を高める取り組みに携わる形を作り、「保育実習指導」の授業計画に取りこんでいく。
2. 学内にとどまらず、さらに外部とのつながりを積極的にに行い、学生の学びの充実につなげる。
3. 月2回の学科会議を継続し、特別な配慮が必要であったり学習意欲の低下が見られたりなど支援や見守りが必要な学生の早期発見や教員の対応方法などの情報共有を徹底する。

Check 検証

1. 「保育実習指導」の授業内容の精選及び体験学習の見直し等を行った。その結果、各教員の担当科目の授業内容と必要以上に重複することがなくなり、実習やゼミナール活動に即生かせる内容を取り入れることが可能になった。このような取り組みが「本学で学んだことが将来に活きるか」"と思う"や"やそう思う"が93.3%の結果につながった。
2. 公開講座を2件実施した。定員充足率はそれぞれ142%と50%の結果であった。ゼミナールにおいては、特別支援学校での授業や発達支援センターでの音楽遊び、商業施設での絵本の読み聞かせなどのボランティア活動、また、学生の学びを深めるために外部の関連施設を訪問するなどし、教員の専門性を生かした活動が積極的になされた。
3. 月2回の学科会議において、欠席が多かったり提出物が期限内に提出されなかったり等、学習意欲が低下気味と思われる学生について情報共有を徹底した。また、学修の理解が十分でないと思われる学生についても情報共有を行い、必要に応じてチューター面談などをこまめに行った。その結果、退学者5名、休学者5名であった。他にも、相談や見守りが必要な学生の情報共有が行われたケースがあり、教員の学生支援が速やかに行われる結果となった。

令和5年度 「学生部」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：織田 芳人（学生部長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。 2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。 3. 学生指導員委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学生支援委員会と緊密に情報共有を図り、スポーツフェスタや弥生祭等の円滑な運営に協力していく。 2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしていく。 3. 学生指導員委員会と情報共有をしていく。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 学生支援委員会と情報共有しながら、可能な範囲で円滑な運営に協力したが、学生部として関わる案件は特になかった。 2. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 障がい学生支援委員会の円滑な運営に努めた。 3. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 学生部として関わる案件が特になかった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。 2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。 3. 学生指導員委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。

令和5年度 学生部 年次報告

Plan 計画

1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。
2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。
3. 学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。

Do 実行

1. 学生支援委員会と緊密に情報共有を図り、スポーツフェスタや弥生祭等の円滑な運営に協力していく。
2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしていく。
3. 学生指導委員会と情報共有をしていく。

Act 改善

1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。
2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。
3. 学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
学生支援委員会と情報共有しながら、可能な範囲で円滑な運営に協力したが、学生部として関わる案件は特になかった。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
障がい学生支援委員会の円滑な運営に努めた。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
学生部として関わる案件が特になかった。

令和5年度 「図書館」 年次報告書	
区分：	学科専攻 ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	森 弘行（図書館長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭隘化対策に努める。 2. 学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していく。図書館でできる新しい企画を考え、図書館利用の促進・活性化につなげる。 3. 機関リポジトリの導入に取り組む。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 経年劣化蔵書および未利用蔵書の除籍を行う。また、来館者に楽しんでもらうため 幼児教育学科に協力をお願いし、ライブラリーギャラリーとして学生の製作物の展示を行う。 2. 学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントなど例年通り行う。図書館閉館時にも返却できるよう返却ボックスを設置する。 3. 機関リポジトリの導入に向け、調査・研究を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 10年経年した消耗図書30冊と、可動書架内の未利用寄贈本の処分を行った。ライブラリーギャラリーとして、5/M～5/E まで2Yの授業での製作物（粘土の和菓子）の展示を行った。それに伴い、和菓子やお茶・和の関連書籍を展示した。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 返却ボックスを設置、蔵書検索及び館内でのd-マガジン購読用としてタブレット端末を2台導入。図書館前ロッカー使用の際、今までは手書きでの手続きが必要だったが、学生証の提示⇒バーコードスキャンの手続きができるようにして、学生の利便性を図った。 例年通り、学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントに参加した。今年度から月に1回絵本のおはなし会を開催した（6回開催、延べ20人） 3. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）からの機関リポジトリに関する情報を十分収集できていない。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭隘化対策に努める。書庫内にある経年劣化の洋書や高齢者福祉に関する図書など動きのない図書を除籍・移動するなどして、貸借の動きのある図書のためのスペース活用を行っていく。ライブラリーギャラリーでは、学生が製作した物の展示が1度だけだったため、教員に働きかけて 授業での図書館利用・ライブラリーギャラリーの活用をお願いする。 2. 図書館を利用する学生や教職員の目線になって、図書館の情報提供や利用の際のサービスを改善していく。メールやGoogle フォーム、動画なども必要に応じて活用する。 3. オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）からの情報収集に努め、WEKO3の導入を目指す。	

令和5年度図書館年次報告

Plan 計画

1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭陰化対策に努める。
2. 学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していく。図書館でできる新しい企画を考え、図書館利用の促進・活性化につなげる。
3. 機関リポジトリの導入に取り組む。

Do 実行

1. 経年劣化蔵書および未利用蔵書の除籍を行う。また、来館者に楽しんでもらうため 幼児教育学科に協力ををお願いし、ライブラリーギャラリとして学生の製作物の展示を行う。
2. 学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントなど例年通り行う。図書館閉館時にも返却できるよう返却ボックスを設置する。
3. 機関リポジトリの導入に向け、調査・研究を行う。

Act 改善

1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭陰化対策に努める。書庫内にある経年劣化の洋書や高齢者福祉に関する図書など動きのない図書を除籍・移動するなどして、貸借の動きのある図書のためのスペース活用を行っていく。ライブラリーギャラリでは、学生が製作した物の展示が1度だけだったため、教員に働きかけて授業での図書館利用・ライブラリーギャラリーの活用をお願いする。
2. 図書館を利用する学生や教職員の目線になって、図書館の情報提供や利用の際のサービスを改善していく。
メールやGoogleフォーム、動画などにも必要に応じて活用する。
3. オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）からの情報収集に努め、WEKO3の導入を目指す。

Check 検証

1. 10年経年した消耗図書30冊と、可動書架内の未利用寄贈本の処分を行った。ライブラリーギャラリとして、5/M~5/Eまで2Yの授業での製作物（粘土の和菓子）の展示を行った。それに伴い、和菓子やお茶・和の関連書籍を展示した。
2. 返却ボックスを設置、蔵書検索及び館内でのd-マガジン購読用としてタブレット端末を2台導入。
図書館前ロッカー使用の際、今までは手書きでの手続きが必要だったが、学生証の提示⇨バーコードスキャンの手続きができるようにして、学生の利便性を図った。
例年通り、学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントに参加した。今年度から月に1回絵本のおはなし会を開催した（6回開催、延べ20人）
3. オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）からの機関リポジトリに関する情報を十分収集できていない。

令和5年度 「自己点検評価室」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	武藤 玲路（室長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教学マネジメント体制の構築について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 教学マネジメント体制の構築について ①学修成果の評価項目（10の力）、評価基準（ルーブリック）、教育システム総覧の再検討 ②アセスメントプランの再構築、およびIRデータの体系化、可視化、解釈、活用法の手引き書の検討 ③学務システムの修正（成績の入力画面・到達度の表示画面、ディプロマサプリメントなど） ④教務委員会、IR推進室、FD・SD委員会と連携した活動（学修成果と満足度を向上させるための検討） ⑤教学マネジメント体制（内部質保証）、エンロールメントマネジメント体制の構築とフローチャートの作成 2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について ⑥私立大学等改革総合支援事業タイプ1の根拠資料の作成 ⑦認証評価勉強会の実施（8月と3月の定例SD研修会にて） ⑧令和5年度自己点検・評価の外部評価委員会の開催 3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について ⑨令和5年度自己点検・評価年次報告書の作成 ⑩自己点検・評価の簡易報告書の作成 ※従来の「部署別」年次報告書の必要性の検討 ⑪第4期認証評価に向けた根拠資料の作成、および学外のFD・SDへの参加による先進事例の情報収集	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ <u>B</u> ・C・D」 ①の学修成果の評価項目、評価基準、教育システム総覧については、見直しと修正ができたが、②のアセスメントプラン、IRデータの体系化、可視化、解釈、活用法の手引き書は、完成にいたらなかった。また、③の学務システムの修正、④のIR推進室との連携、⑤の教学マネジメント体制の構築については、今後の課題である。 2. 自己評価「S・A・ <u>B</u> ・C・D」 ⑥の私立大学等改革総合支援事業タイプ1の根拠資料の作成と、⑧の自己点検・評価の外部評価委員会の開催は、ある程度達成できたが、⑦の認証評価勉強会（8月と3月のSD研修会）は、あまり達成できなかった。 3. 自己評価「S・A・ <u>B</u> ・C・D」 ⑨の5年度自己点検・評価年次報告書の作成と、⑪の第4期認証評価に向けた根拠資料の作成は、ある程度達成できたが、⑩の自己点検・評価の簡易報告書の作成と、⑪の学外のFD・SDへの参加による先進事例の情報収集は、今後の課題となった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 次年度は、各種成果検証のための可視化グラフを活用した改善計画とその実践に取り組む必要がある。 2. 次年度は、全教職員による8月と3月の定例SD研修会で、認証評価勉強会を実施する必要がある。 3. 自己点検・評価の簡易報告書の作成と、学外のFD・SDへの参加による情報収集は、今後の課題となった。	

令和5年度自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

1. 教学マネジメント体制の構築について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。
2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。
3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ①の学修成果の評価項目、評価基準、教育システム総覧については、見直しと修正ができたが、②のアセスメントプラン、IRデータの体系化、可視化、解釈、活用方法の手引き書は、完成にいたらなかった。また、③の学修システムの修正、④のIR推進室との連携、⑤の教学マネジメント体制の構築については、今後の課題である。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ⑥の私立大学等改革総合支援事業タイプ1の根拠資料の作成と、⑧の自己点検・評価の外部評価委員会の開催は、ある程度達成できたが、⑦の認証評価勉強会（8月と3月のSD研修会）は、あまり達成できなかった。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
 - ⑨の5年度自己点検・評価年次報告書の作成と、⑩の第4期認証評価に向けた根拠資料の作成は、ある程度達成できたが、⑩の自己点検・評価の簡易報告書の作成と、⑪の学外のFD・SDへの参加による先進事例の情報収集は、今後の課題となった。

Do 実行

1. 教学マネジメント体制の構築について
 - ①学修成果の評価項目（10の力）、評価基準（ルーブリック）、教育システム総覧の再検討
 - ②アセスメントプランの再構築、およびIRデータの体系化、可視化、解釈、活用方法の手引き書の検討
 - ③学修システムの修正（成績の入力画面・到達度の表示画面、ディプロマサブリメントなど）
 - ④教務委員会、IR推進室、FD・SD委員会と連携した活動（学修成果と満足度を向上させるための検討）
 - ⑤教学マネジメント体制（内部質保証）、エンローラルメントマネジメント体制の構築とフローチャートの作成
2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について
 - ⑥私立大学等改革総合支援事業タイプ1の根拠資料の作成
 - ⑦認証評価勉強会の実施（8月と3月の定例SD研修会にて）
 - ⑧令和5年度自己点検・評価の外部評価委員会の開催
3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について
 - ⑨令和5年度自己点検・評価年次報告書の作成
 - ⑩自己点検・評価の簡易報告書の作成 ※従来の「部署別」年次報告書の必要性の検討
 - ⑪第4期認証評価に向けた根拠資料の作成、および学外のFD・SDへの参加による先進事例の情報収集

Act 改善

1. 次年度は、各種成果検証のための可視化グラフを活用した改善計画とその実践に取り組む必要がある。
2. 次年度は、全教職員による8月と3月の定例SD研修会で、認証評価勉強会を実施する必要がある。
3. 自己点検・評価の簡易報告書の作成と、学外のFD・SDへの参加による情報収集は、今後の課題となった。

令和5年度 「事務局」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	高井 達司（事務局長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 事務局体制の再構築に取り組む。 2. 学長運営方針を常に意識させ、その実行を最優先させる。 3. きめ細やかな学生支援活動に努めることで、満足度の高い短大作りの一翼を担う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 潜在的能力の高い事務職員にも関わらず、これまでその能力を引き出す機会がなかった。これまで開催されなかった事務局会議を定期的に行うことで、事務局職員一人ひとりが学校改革に向けたその当事者であることを再認識させたい。 2. 本年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標達成には、何れも高い提案力と職場へのロイヤリティが求められる。自身も含めその体現者となる。 3. 学生が相談しやすい事務局の雰囲気作りを常に意識することで、事務職員に対する高い信頼関係を醸成する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ □B ・C・D」 2回とは言え定例の事務局会議を実行することが出来た。これにより事務職員が日頃有している思いを、垣間見る子ことが出来た。予想通り短大改革のための大小様々な意見が出され、幾つかは成案に繋がった。 2. 自己評価「S・A・B・ □C ・D」 多忙を理由に時間を掛けこれに取り組む余裕がなかった。 3. 自己評価「S・A・ □B ・C・D」 学生に対し寄り添った対応力を概観することが出来、概ね良好に感じる。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 一年を経験したことで、次年度の業務計画に見通しが立ったが、学長交代に伴い次年度は更に業務量増大の可能性はある。計画的に実行したい。また次年度は産休・育休に伴う人事異動（役割変更）があるので、事務の停滞が無いよう常に各人の業務状況を注目していきたい。 2. 次年度も継続してこの会を充実したものとしたい。 3. 新学長の運営方針を行動規範とし、これを全ての教職員が共有するよう心掛けていきたい。	

令和5年度事務局 年次報告

Plan 計画

1. 事務局体制の再構築に取り組む。
2. 学長運営方針を常に意識させ、その実行を最優先させる。
3. きめ細やかな学生支援活動に努めることで、満足度の高い短大作りの一翼を担う。

Do 実行

1. 潜在的能力の高い事務職員にも関わらず、これまで開でその能力を引き出す機会がなかった。これまで開催されなかった事務局会議を定期的に行うことで、事務局職員一人ひとりが学校改革に向けたその当事者であることを再認識させたい。
2. 本年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標達成には、何れも高い提案力と職場へのロイヤリティーが求められる。自身も含めその体現者となる。
3. 学生が相談しやすい事務局の雰囲気作りを常に意識すること、事務局員に対する高い信頼関係を醸成する。

Act 改善

1. 一年を経験したことで、次年度の業務計画に見通しが立ったが、学長交代に伴い次年度は更に業務量増大の可能性がある。計画的に実行したい。また次年度は産休・育休に伴う人事異動（役割変更）があるので、事務の停滞が無いよう常に各人の業務状況を注目していきたい。
2. 次年度も継続してこの会を充実したものとしたい。
3. 新学長の運営方針を行動規範とし、これを全ての教職員が共有するよう心掛けていきたい。

Check 検証

1. 2回とは言え定例の事務局会議を実行することが出来た。これにより事務職員が日頃有している思いを、垣間見る子ことが出来た。予想通り短大改革のための大小様々な意見が出され、幾つかは成案に繋がった。
2. 多忙を理由に時間を掛けこれに取組む余裕がなかった。
3. 学生に対し寄り添った対応力を概観することが出来、概ね良好に感じる。

令和5年度 「入試広報室」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：高井 達司（室長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 昨年度に引き続き「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（20名目標）及び歩留り3割を目標とする。 2. 今年度は本県18歳人口が最も減少するため、短大・専門学校と同様に、四年制大学においても志願者囲い込みに追随していくことが予想される。早期入試における志願者の囲い込みに最大限の対策を講じる。 3. 進学説明会を介した志願動機が低下しないよう、誰が対応しても本学の強みを訴求できるよう共有したい。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 本年度入試より Web 出願を導入したことで、これまでよりも比較的に出願しやすい環境を整備した。また入学動機を促すため、合格者に対し小島奨学金C免除採択を明確に示すものとする。 2. 長崎女子高校の3年生本学志願希望者は、本年度入学37名をはるかに下回る23名に終わった。この減少分を補填するためにも総合型選抜1期の出願増を目指す。 3. 本学の募集活動上、本説明会の影響は想像を越えて大きい。特に長崎短大、長崎こども医療専門学校のプレゼン力は非常に高い。これに負けないような、きめの細かいプレゼン能力を共有したい。対面接触した3年生徒の志願率は比較的高いので、これまで以上に生徒との信頼関係を深めるよう努めたい。本学志願への一歩となる面談者や資料請求者への対応を、より丁寧なものにする。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 志願者目標値に遠く及ばず5名に終わったが、歩留まりは比較的高く6割に上昇した。 また選抜1期の手続き締切日の設定が早過ぎたとの意見もあった。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 総合型選抜1期の出願は昨年比3名増の9名。全体でも11名の出願を数えるなど例年になく早期入試への対応は良好であった。個別進学相談会からの出願誘導までのプロセスを大事にしてきたものと評価する。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 多忙を理由に説明会への参加を大幅に減少させた（52→14回）。年間を通し一貫した説明と、踏み込んだ話が出来なかったことも若干の減少要因となった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 一般選抜の入学者が3年連続皆無である現実を見れば、共通テストが果たす役割は大きい。本年度の取組みを継続したいが、入試スケジュールについては、他学の状況を参考にしながら慎重に設定することとしたい。 2. 大幅減少を続けた本県18歳人口の動態も、次年度は回復し、若干の増加に期待が持てる。専門学校との競争に負けないよう早期入学者の確保に全力を傾注したい。具体的には総合型選抜にエントリー制度を導入することで、より早期の囲い込みを行いたい。加えて長崎女子高校との連携を確固なものとするべく、高校側の信頼を得たい。 3. 可能な限りこれへの出席を増やしたい。

令和5年度 入試広報室 年次報告

Plan 計画

1. 昨年度に引き続き「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（20名目標）及び歩留り3割を目標とする。
2. 今年度は本県18歳人口が大きく減少していくため、短大・専門学校と同様に、四年制大学においても志願者囲い込みに追隨していくことが予想される。早期入試における志願者の囲い込みに最大限の対策を講じる。
3. 進学説明会を紹介した志願動機が低下しないよう、誰が対応しても本学の強みを訴求できるよう共有したい。

Do 実行

1. 本年度入試よりWeb出願を導入したことで、これまでよりも比較的出願しやすい環境を整備した。また入学動機を促すため、合格者に対し小島奨学金C免除採択を明確に示すものとする。
2. 長崎女子高校の3年生本学志願希望者は、本年度入試37名をはるかに下回る20数名に終わることが予想される。この減少分を補填するためにも総合型選抜1期の出願増を目指す。
3. 本学の募集活動上、本説明会の影響は想像を越えて大きい。特に長崎短大、長崎こども医療専門学校学校の募集力が高い。これに負けないような、きめの細かいプレゼン能力を共有したい。対面接触した3年生徒の志願率は比較的高いので、これまでに以上と生徒との信頼関係を深めるよう努めたい。本学志願への一歩となる面談者や資料請求者への対応を、より丁寧なものにする。

Act 改善

1. 一般選抜の入学者が3年連続皆無である現実を見れば、共通テストが果たす役割は大きい。本年度の取組みを継続したいが、入試スケジュールについては、他学の状況を参考にしながら慎重に設定することとしたい。
2. 大幅減少を続けた本県18歳人口の動態も、次年度は回復し、若干の増加に期待が持てる。専門学校との競合に負けないよう早期入学者の確保に全力を傾注したい。具体的には総合型選抜にエントリー制度を導入することで、より早期の囲い込みを行いたい。加えて長崎女子高校との連携を確固なものとするべく、高校側の信頼を得たい。
3. 可能な限りこれへの出席を増やしたい。

Check 検証

1. 志願者目標値に遠く及ばず5名に終わったが、歩留まりは比較的高く6割に上昇した。また選抜1期の手続き締切日の設定が早過ぎたとの意見もあった。
2. 総合型選抜1期の出願は昨年比3名増の9名。全体でも11名の出願を数えるなど例年になく早期入試への対応は良好であった。個別進学相談会からの出願誘導までのプロセスを大事にしてきたものと評価する。
3. 多忙を理由に説明会への参加を大幅に減少させた（52→14回）。年間を通し一貫した説明と、踏み込んだ話が出来なかったことも若干の減少要因となった。

令和5年度 「キャリア支援センター」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：原田 実輝（センター長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 就職率100%を目指して進路支援を行う。 2. キャリア支援体制の見直しを図り、組織的な進路支援体制を構築する。 3. 学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度の向上に努める。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 令和4年度卒業生の就職状況の総括を基に、成果と課題を検証する。 2. キャリア支援委員会を活性化し、定期的に問題点の把握、情報共有を行う。 3. チューター、キャリア委員、キャリア支援センターで学生の情報をきちんと共有できるように努める。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 今年度は各学科・コースのガイダンスを通じて、就活への意識づけ、早めの行動を促すことができた。 3月15日現在の全体の内定率は98.4%で、昨年同期比6.2ポイント増と好調である。未内定者はSとLに1名ずつの2名で、希望の職場に内定できるよう支援していく。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 特に全体で話し合うべき問題もなく、SとLがかなり早い段階から順調に昨年同期比をかなり上回るペースで内定していたこともあり、キャリア支援委員会は1回しか行えなかった。次年度は就職先調査の年でもあるので、定期的なキャリア支援委員会の開催し、情報共有を活発に行っていきたい。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 学務システムの面談記録が全く入力されていないケースも多く、また入力できない内容もあり、学生の情報を集約することに時間を要した。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 最終就職率100%を目指した就職支援を行う。 2. 学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度向上に努める。 3. キャリア支援体制を見直し、次年度の就職先調査に向けてキャリア支援委員会の活性化を図る。

令和5年度キャリア支援年次報告

Plan 計画

- ①就職率100%を目指して進路支援を行う。
- ②キャリア支援体制の見直しを図り、組織的な支援体制を構築する。
- ③学生一人一人に寄り添った支援を行い、学生の満足度の向上に努める。

Do 実行

- ①令和4年度卒業生の就職状況の総括を基に成果と課題を検証する。
- ②キャリア支援委員会を活性化させ、定期的に情報共有、問題把握を行う。
- ③チューター、キャリア委員、キャリア支援センターで学生情報をきちんと共有できるように努める。

Act 改善

- ①最終就職率100%を目指して就職支援を行う。
- ②学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度の向上に努める。
- ③次年度の就職先調査に向けて、キャリア支援委員会の活性化を図る。

Check 検証

- ①ガイダンスを通じて早めに就職活動への意識づけを行った。
3月15日現在の内定率は98.4%（昨年同期比6.2ポイント増）。未内定者は2名。
- ②話し合うべき大きな課題がなかった事もあり、キャリア委員会は1回しか開けなかった。
- ③学生情報の共有に関してあまり進展はなかった。卒業時調査にする学生の満足度は4.1ポイントで、昨年比0.2ポイント増であった。

令和5年度 「入試委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	玉島 健二（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 令和6年度募集要項作成に当たり、事務局入試広報室と連携を取りながら、遺漏のないようにして、5月末完成を目指す。 2. 新たな出願方法として導入する「WEB出願」について、事務局入試広報室に対応を一任し、学内外への周知を図る。 3. 面接質問事項等、入学者選抜に必要な事項について、本委員会及び教授会で共通理解を図る。 4. 募集広報委員会と連携を密に図り、令和6年度の入学者について、定員確保を目指す。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 募集要項の原稿を入試広報室に作成させ、学長自らチェックを行う。また、必要に応じて、募集要項の内容やレイアウト等に関して提案する。並行して、本委員会及び教授会での承認を得る。 2. 「WEB出願」については、関係業者からの情報提供を受けるとともに、本委員会及び教授会や6月実施予定の関係高校連絡協議会において、しっかり説明する。高校生に対しては、オープンキャンパスや進学ガイダンスにおいて説明する。 3. 年間を通じて、必要な情報を適宜提示し、承認を得るように努力する。 4. 募集広報委員会で協議された内容・事項について、本委員会として適宜対応する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 募集要項に関する協議は、4月20日及び4月27日の入試委員会、5月18日の教授会において説明し、5月末には完成した。令和6年度の募集要項は、大きくページ構成を変更した。具体的には、1ページに入学者受け入れの方針、1・2ページに入学者選抜の基本方針と各入試区分ごとの説明を入れた。また、10・11ページにWEB出願のページを設けた。 2. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 WEB出願についての学内向けの説明は、4月27日・9月7日の入試委員会及び5月18日の教授会で実施した。また、学外向けは、6月の関係高校連絡協議会及び進学ガイダンスやオープンキャンパスの際に行った。 3. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 9月19日の本委員会で入学者選抜基本方針・実施要領、面接設問の検討（第1回目）を行った。9月26日には前週の積み残しの協議を行った。10月3日と10日には総合型選抜1期入試について協議した。それ以降、適宜必要に応じて、入学者選抜に関する協議及び入試判定を遺漏なく行った。 4. 自己評価「S・A・B・ <u>C</u> ・D」 募集広報委員会で協議された内容や必要な情報を本委員会に提示し、学生募集活動への協力を依頼した。ただし、令和6年度の入学予定者は109名に止まった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 募集要項は大きく変更する必要はないが、次年度の高校3年生から新学習指導要領の学年となるので、募集要項に記載する科目名等に留意する必要がある。また、ビジネス・医療秘書コースの名称変更及び検定料の変更に伴い、表記の内容に間違いがないようにしっかりチェックする必要がある。 2. WEB出願は1度経験しているので、変更の余地がないかどうかを学外で協議する必要がある。 3. 学習成果の到達目標が10項目となるので、面接質問等も検討した方が良い。	

令和5年度入試委員会 年次報告

Plan 計画

1. 令和6年度の募集要項作成を遺漏のないように行う。
2. WEB出願に関する学内外への周知を図る。
3. 入学者選抜に必要な事項について、学内会議において共通理解を図る。
4. 募集広報委員会と連携を密にし、令和6年度入学生の定員確保を目指す。

Do 実行

1. 原稿は入試広報室に作成させ、学長自らチェックする。レイアウトの提案も行う。
2. 本委員会や教授会、関係高校連絡協議会等を通じて、しっかり説明を行う。
3. 年間を通じて、本委員会及び教授会での協議し、承認を得るように努力する。
4. 募集広報委員会で協議された内容・事項について、本委員会として適宜対応する。

Act 改善

1. 新高校3年生から新学習指導要領の学年となり、またビジネス・医療秘書コースのコース名や検定料の変更があるので、次年度の募集要項作成に当たっては、間違いないように留意する必要がある。
2. WEB出願について、変更の余地がないかどうかの確認は必要である。
3. 学習成果の到達目標が10項目となるので、面接設問等も検討した方がよい。
以上

Check 検証

1. 4月20日の本委員会を皮切りに適宜協議し、5月末に募集要項は完成した。要項の内容は一部レイアウトも含め変更した。
2. 学内外向けに、適宜説明する時間を確保した。
3. 9月19日の本委員会で入学者選抜基本方針及び実施要領、面接設問の検討を行ったのをはじめとして、その後必要に応じて協議した。
4. 必要に応じて、募集広報委員会で協議された内容を本委員会で情報提供し、学生募集活動への協力を求めた。ただし、令和6年度入学予定者は109名に止まった。

令和5年度 「FD・SD委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：武藤 玲路（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 第1回定例FD・SD研修会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 2. 第2回定例FD・SD研修会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 3. その他のFD・SD活動について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 第1回定例FD・SD研修会の実施について： 8月29日（火）10:00～12:00、13:00～15:30、221教室 ①対象： 短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員（任意） ②内容： <u>【FD研修会】：「学修成果の評価項目と評価基準に関する成果と課題と改善策について」</u> <u>【SD研修会】：「第4期認証評価に向けた学修成果等の改善計画について」</u> 2. 第2回定例FD・SD研修会の実施について： 3月19日（火）10:00～12:00、13:00～15:15、221教室 ①対象： 短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員（任意） ②内容： <u>【FD研修会】：「学修成果・教育成果の把握・可視化から改善、そして改善の成果検証へ」</u> <u>【SD研修会】：「令和5年度 部署別年次報告 ～根拠に基づく成果と課題と改善策～」</u> 3. その他のFD・SD活動の実施について 1) 各部署のFD・SD活動（意見交換・勉強会・研究会等）の実施について ○可能な限り各部署内での独自のFD・SD活動を定期的に実施するように努めた。 2) 学外のFD・SD研修会への参加について ○多くの教職員が学外のFD・SD研修会に積極的に参加し、高等教育の教職員としての資質の向上を図った。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 FD・SD研修会ともに、全教職員の8割以上が参加し、FD研修会では「学修成果の評価項目と評価基準に関する成果と課題と改善策」について、SD研修会では「第4期認証評価に向けた学修成果等の改善計画」について、説明・提案とグループディスカッションが予定通り行われた。
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 FD・SD研修会ともに、全教職員の8割以上が参加し、FD研修会では「学修成果・教育成果の把握・可視化、改善と改善の成果検証」について、SD研修会では「部署別年次報告、根拠に基づく成果と課題と改善策」について、説明・提案とグループディスカッションが予定通り行われた。
3. 自己評価「S・A・B・C・ D 」 各部署のFD・SD活動については、実施の有無を明確に把握していないが、あまり行われていないようである。学外のFD・SD研修会への参加については、調査の結果殆どの教職員が参加していないようである。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 学修成果の評価指標と評価基準については、継続的に自己点検・評価を行い、向上充実を図る必要がある。 2. 各種成果の可視化と改善策については、先進事例と学生の意見を参考にして、進化させていく必要がある。 3. 各部署のFD・SD活動を促進し、学外のFD・SD研修会に全教職員が積極的に参加するように促したい。

令和5年度FD・SD委員会 年次報告

Plan 計画

1. 第1回定例FD・SD研修会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。
2. 第2回定例FD・SD研修会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。
3. その他のFD・SD活動について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
FD・SD研修会とともに、全教職員の8割以上が参加し、FD研修会では「学修成果の評価項目と評価基準に関する成果と課題と改善策」について、SD研修会では「第4期認証評価に向けた学修成果等の改善計画」について、説明・提案とグループディスカッションが予定通り行われた。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
FD・SD研修会とともに、全教職員の8割以上が参加し、FD研修会では「学修成果・教育成果の把握・可視化、改善と改善の成果検証」について、SD研修会では「部署別年次報告、根拠に基づく成果と課題と改善策」について、説明・提案とグループディスカッションが予定通り行われた。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
各部署のFD・SD活動については、実施の有無を明確に把握していないが、あまり行われていないようである。学外のFD・SD研修会への参加については、調査の結果殆どの教職員が参加していないようである。

Do 実行

1. 第1回定例FD・SD研修会の実施について：8月29日（火）10:00～12:00、13:00～15:30、221教室
①対象：短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員（任意）
②内容：【FD研修会】：「学修成果の評価項目と評価基準に関する成果と課題と改善策について」、【SD研修会】：「第4期認証評価に向けた学修成果等の改善計画について」
2. 第2回定例FD・SD研修会の実施について：8月19日（火）10:00～12:00、13:00～15:15、221教室
①対象：短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員（任意）
②内容：【FD研修会】：「学修成果・教育成果の把握・可視化から改善、そして改善の成果検証へ」、【SD研修会】：「令和5年度 部署別年次報告 ～根拠に基づく成果と課題と改善策～」
3. その他のFD・SD活動の実施について
1) 各部署のFD・SD活動（意見交換・勉強会・研究会等）の実施について
○可能な限り各部署内での独自のFD・SD活動を定期的の実施するよう努めた。
2) 学外のFD・SD研修会への参加について
○多くの教職員が学外のFD・SD研修会に積極的に参加し、高等教育の教職員としての資質の向上を図った。

Act 改善

1. 学修成果の評価指標と評価基準については、継続的に自己点検・評価を行い、向上充実を図る必要がある。
2. 各種成果の可視化と改善策については、先進事例と学生の意見を参考にして、進化させていく必要がある。
3. 各部署のFD・SD活動を促進し、学外のFD・SD研修会に全教職員が積極的に参加するように促したい。

令和5年度 「IR推進室」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ IR 推進室 ）
氏名：	森 弘行（室長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 令和5年度の成績評価のルーブリックについて、運用初年度の成果と課題を検討し、令和6年度入学生用シラバスの作成を実施する。 2. 学務システムのバージョンアップ 3. アセスメント BOOK の導入	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 令和5年度シラバスの掲載内容および成績評価のルーブリックについて、教務委員会と連携し、運用初年度の成果と課題を検証する。 2. 学務システムの成績入力画面改修、未入力・誤入力チェック機能など。 3. アセスメント BOOK の導入に向け、事例調査を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 学修成果の観点の分類を6項目から10項目に変更し、評価の配点および尺度を示したルーブリックを含むシラバスを導入した。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 学務システムを学内サーバーへの移管を検討するため、テスト用の環境を構築した。現行のシステムはかなり古いバージョンで稼働しており、移行作業の難しさが懸念されたが、情報管理センターの移行テストにより目処がたちつつある。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 データの可視化についての調査、提案を行った。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ルーブリックを含むシラバスの運用についての課題や改善策を検討する。 2. 学務システムを学内サーバーへの移管することにより、セキュリティ対策および機能の強化を図る。 3. アセスメント BOOK の導入に向け、調査・検討を継続。	

令和5年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

1. 成績評価のルーブリックについて
運用初年度の成果と課題を検討し、令和6年度入学生用シラバスの作成
2. 学務システムのバージョンアップ
3. アセスメントBOOKの導入

Do 実行

1. 令和5年度シラバスの掲載内容および成績評価のルーブリックについて、教務委員会と連携し、運用初年度の成果と課題を検証する。
2. 学務システムの成績入力画面改修、未入力・誤入力チェック機能など。
3. アセスメントBOOKの導入に向け、事例調査を行う。

Act 改善

1. ルーブリックを含むシラバスの運用についての課題や改善策を検討する。
2. 学務システムを学内サーバーへの移管することにより、セキュリティ対策および機能の強化を図る。
3. アセスメントBOOKの導入に向け、調査・検討を継続。

Check 検証

1. 学修成果の観点の分類を6項目から10項目に変更し、評価の観点および尺度を示したルーブリックを含むシラバスを導入した。
2. 学務システムを学内サーバーへの移管を検討するため、テスト用の環境を構築した。
現行のシステムはかなり古いバージョンで稼働しており、移行作業の難しさが懸念されたが、情報管理センターの移行テストにより目処がたちつつある。
3. データの可視化についての調査、提案を行った。

令和5年度 「教務委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	桑原 真美（委員長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	1. 令和5年度シラバスの掲載内容および成績評価のルーブリックについて、運用初年度の成果と課題を明らかにし、令和6年度入学生用シラバスの作成を実施する。 2. 教養科目の見直しと時間割の整備を行う。 3. 成績評価に関する異議申し立て制度の新設について検討する。
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	1. IR 推進室と連携し、FD・SD 研修会等において学修成果の10項目を用いた成績評価およびルーブリックの内容について、実際に運用してみたい課題や改善策を検討し、令和6年度入学生シラバスの作成に活かす。 2. 令和5年度より教養科目の単位数および時間数の変更等を行っている。科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。また、中国語ⅠⅡについては令和5年度の受講者数を踏まえて見直しを行う。また、新設の教養科目についても検討を行う。 3. 成績評価に関する異議申し立て制度の必要性の検討を行う。また、制度新設に関して制度内容および運用方法の検討を行う。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	1.自己評価「S・ A ・B・C・D」 令和5年度第1回FD研修会において『学修成果の評価項目と評価基準に関する成果と課題と改善策について』をテーマに協議が行われた。10項目の項目名の変更案や、令和5年度前期の成績評価の際に生じた問題点とその改善策等の意見が出された。その結果、令和6年度入学生の学習成果の評価項目が一部改訂され、それをもとにシラバスおよび成績評価のルーブリックを作成した。 2.自己評価「S・ A ・B・C・D」 教養科目の単位数および時間数の変更に伴う時間割への影響は特にみられなかった。中国語Ⅰ・Ⅱについては履修者が若干名(Ⅰ：5名、Ⅱ：4名)であったことから次年度以降も継続する。また、令和6年度入学生より基礎学力の向上を目的とした「基礎数理」および「国語表現法」、履修科目の選択肢の幅を広げることを目的として「平和学」、「デモクラシーと現代史」を教養科目として新設する。 3.自己評価「 S ・A・B・C・D」 令和5年7月28日に「成績評価に対する異議申し立てに関する規程」が制定され、令和5年度前期履修科目の成績評価より適用されている。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	1.令和6年度入学生対象の学修成果の評価項目が一部改訂されたことから、引き続きその成果および課題について検討する。 2. 令和6年度は新たに4科目の教養科目が追加されるため、今年度同様に科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。 3. 今後も必要に応じて、規程等の改訂を検討する。また、次年度は認証評価の対象年度であるため、自己点検評価室およびIR推進室と協力して根拠資料等の整備を行う。

令和5年度教務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 令和5年度シラバスの掲載内容および成績評価のルールブックについて、運用初年度の成果と課題を明らかにし、令和6年度入学生用シラバスの作成を実施する。
2. 教養科目の見直しと時間割の整備を行う。
3. 成績評価に関する異議申し立て制度の新設について検討する。

Do 実行

1. IR推進室と連携し、FD・SD研修会等において学修成果の10項目を用いた成績評価およびルールブックの内容について、実際に運用してみてもの課題や改善策を検討し、令和6年度入学生シラバスの作成に活かす。
2. 令和5年度より教養科目の単位数および時間数の変更等を行っている。科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。また、中国語Ⅰ・Ⅱについては令和5年度の受講者数を踏まえて見直しを行う。また、新設の教養科目についても検討を行う。
3. 成績評価に関する異議申し立て制度の必要性の検討を行う。また、制度新設に関して制度内容および運用方法の検討を行う。

Act 改善

1. 令和6年度入学生対象の学修成果の評価項目が一部改訂されたことから、引き続きその成果および課題について検討する。
2. 令和6年度は新たに4科目の教養科目が追加されるため、今年度同様科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。
3. 今後必要に応じて、規程等の改訂を検討する。また、次年度は認証評価の対象年度であるため、自己点検評価室およびIR推進室と協力して根拠資料等の整備を行う。

Check 検証

1. 令和5年度第1回FD研修会において『学修成果の評価項目と評価基準に関する成果と課題と改善策について』をテーマに協議が行われた。令和6年度入学生の学習成果の評価項目が一部改訂され、それをもとにシラバスおよび成績評価のルールブックを作成した。
2. 教養科目の単位数および時間数の変更に伴う時間割への影響は特にみられなかった。中国語Ⅰ・Ⅱについては履修者が若干名であったことから次年度以降も継続する。また、令和6年度入学生より基礎学力の向上を目的とした「基礎数理」および「国語表現法」、履修科目の選択肢の幅を広げることを目的として「平和学」、「デモクラシーと現代史」を教養科目として新設した。
3. 令和5年7月28日に「成績評価に対する異議申し立てに関する規程」が制定され、令和5年度前期履修科目の成績評価より運用されている。

令和5年度 「教職課程委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	本村 弥寿子（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 次回課程認定申請に向けて準備を進める。 2. 関係省庁等からの通知・連絡への対応を速やかに行う。 3. 関係省庁等が主催する説明会や研修会へ積極的に参加する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学科にて課程認定についての理解を進め、課程認定に係る授業担当者及び学科にて今後の段取りを明確にする。 2. 関係省庁や県のホームページ・通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。 3. 保育者養成に係る研修会や学会等に参加し情報収集に努め、得た情報を教職員間で共有する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 幼児教育学科学科会議において次回課程認定についての情報を共有し、各自業績作りへの意識を高めるよう促しを行った。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 文科省ホームページ・通知等により「保育方法論」他、領域や各領域の指導法の科目の見直しを行った。 また、保育士養成課程に係る協議も本委員会で行えるよう、本学の「教職課程委員会規定」の見直しを行った。	
3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 保育者養成に係る研修会や学会等への参加が十分にできず、保育者養成の現状の把握に遅れが見られた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 見直し後の科目及び科目の開講方法について、学生の成績や受講状況から成果を検証する。 2. 教職課程の自己点検・評価について理解を進め、令和3年度及び4年度入学生について、教職課程の自己点検・評価を行いまとめる。 3. 次回課程認定に向けての見通しを持ち、各自で業績作り等の準備を進める。	

令和5年度教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

1. 次回課程認定申請に向けて準備を進める。
2. 関係省庁等からの通知・連絡への対応を速やかに行う。
3. 関係省庁等が主催する説明会や研修会へ積極的に参加する。

Do 実行

1. 学科にて課程認定についての理解を進め、課程認定に係る授業担当者及び学科にて今後の段取りを明確にする。
2. 関係省庁や県のホームページ・通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。
3. 保育者養成に係る研修会や学会等に参加し情報収集に努め、得た情報を教職員間で共有する。

Act 改善

1. 見直し後の科目及び科目の開講方法について、学生の成績や受講状況から成果を検証する。
2. 教職課程の自己点検・評価について理解を進め、令和3年度及び4年度入学生について、教職課程の自己点検・評価を行いまとめる。
3. 次回課程認定に向けての見直しを持ち各自で業績作り等の準備を進める。

Check 検証

1. 幼児教育学科学科会議において次回課程認定についての情報を共有し、各自業績作りへの意識を高めるよう促しを行った。
2. 文科省ホームページ・通知等により「保育方法論」他、領域や各領域の指導法の科目の見直しを行った。また、保育士養成課程に係る協議も本委員会で行えるよう、大学の「教職課程委員会規定」の見直しを行った。
3. 保育者養成に係る研修会や学会等への参加が十分にできず、保育者養成の現状の把握に遅れが見られた。

令和5年度 「教育SS運営委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	太田 美代（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教育サポートスタッフを適切に任命する。 2. TA・PSの活動を計画的に行い、1年生の学習支援を円滑に進める。 3. TA・PSが事故無く支援活動を実践できるよう教職員が適切にサポートする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. TA2名、PS2名をコース教職員の推薦により人選し、活動の様子や実施報告書の記録から適性を判断して課題がみつければ指導を行う。 2. TAは前期「食品学基礎実験」後期「食品衛生学実験」で補助業務を行う。PSは「履修登録補助」「1年生の懇親会運営補助」「定期試験対策支援」を行う。 3. 実験補助では、とくに安全に業務が遂行できるよう留意してTAと事前の打ち合わせを実施する。PSの業務に関しても安心して当たることができるよう事前に計画の相談をし、打ち合わせを行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 TAとPSの4名は責任感を持って業務を全うした。中でもTAの二人は、毎週の授業で1年生と関わり、1年生の信頼を得て活躍することができた。特に指導を要する問題は無かった。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 PSは、1年生入学直後の履修登録の支援や懇親会の運営、定期試験前の対策講座、その他1年生の学生生活に関する相談に応じた。1年生は円滑に学生生活をスタートさせることができた。 TAは前期「食品学基礎実験」、後期「食品衛生学実験」のサポートを行った。授業評価アンケートで、「2年生のティーチングアシスタントの方もいて質問しやすく実験への意欲が高められた」「実験で分からないことがあったら分かりやすく教えてくださってよかった」というコメントが寄せられた。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 1年間の活動を事故やトラブルなく終えることができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. TAとPSの人選は、引き続きコース内教職員で協議の上決定する。 2. 次年度は、時間割の都合上、TAの実験授業サポートが後期のみとなるため、前期に基礎数理後半の授業など、実験以外の授業で活用できないか検討する。PSに関しては、今年度補助として関わった1年生の入学当初の懇親会を、学友自治会役員と協力して主体的に運営できるようサポートする。 3. 栄養士コース内では教育サポートスタッフの活動が定着してきたが、他の学科コースでも取り組む意向があれば、運営について支援を行う。	

令和5年度 教育SS運営委員会 年次報告

Plan 計画

1. 教育サポートスタッフを適切に任命する。
2. TA・PSの活動を計画的に行い、1年生の学習支援を円滑に進める。
3. TA・PSが事故無く支援活動を実践できるよう教職員が適切にサポートする。

Do 実行

1. TA2名、PS2名をコース教職員の推薦により人選し、活動の様子や実施報告書の記録から適性を判断して課題がみつければ指導を行う。
2. TAは前期「食品学基礎実験」後期「食品衛生学実験」で補助業務を行う。PSは「履修登録補助」「1年生の懇親会運営補助」「定期試験対策支援」を行う。
3. 実験補助では、とくに安全に業務が遂行できるよう留意してTAと事前の打ち合わせを実施する。PSの業務に関してTAと安心して当たることができるよう事前に計画の相談をし、打ち合わせを行う。

Act 改善

1. TAとPSの人選は、引き続きコース内教職員で協議の上決定する。
2. 次年度は、時間割の都合上、TAの実験授業サポートが後期のみとなるため、前期に基礎数理後半の授業など、実験以外の授業で活用できないか検討する。PSに関しては、今年度補助として関わった1年生の入学当初の懇親会を、学友自治会役員と協力して主体的に運営できるようサポートする。
3. 栄養士コース内では教育サポートスタッフの活動が定着してきたが、他の学科コースでも取り組み意向があれば、運営について支援を行う。

Check 検証

1. TAとPSの4名は責任感を持って業務を全うした。中でもTAの二人は、毎週の授業で1年生と関わり、1年生の信頼を得て活躍することができた。特に指導を要する問題は無かった。
2. PSは、履修登録の支援や懇親会の運営、定期試験前の対策講座、その他1年生の学生生活に関する相談に応じ、1年生は円滑に学生生活をスタートさせることができた。TAは前期「食品学基礎実験」、後期「食品衛生学実験」のサポートを行った。授業評価アンケートで、「2年生のTAの方もいて質問しやすいことで実験への意欲が高められた」「実験で分からないことがあったら分かりやすく教えてくださってよかった」というコメントが寄せられた。
3. 1年間の活動を事故やトラブルなく終えることができた。

令和5年度 「研究倫理委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：織田 芳人（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集に努める。 2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等を確認し、委員会活動を改善する。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 日本学術振興会が提供する倫理指針等に関する情報収集に努める。 2. 教員の研究活動における倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討し、研究の速やかな進展を支援する。 3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等を確認して、必要に応じて審査方法等の委員会活動を改善していく。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・A・B・ □C ・D 」 日本保育学会における倫理指針を収集した。 2. 自己評価「 S・ □A ・B・C・D 」 教員の研究活動における倫理審査が必要になったので、速やかに委員会を開いて検討し、研究の速やかな進展に寄与した。 3. 自己評価「 S・ □A ・B・C・D 」 申請のあった教員から、研究活動に不具合等が生じたとの報告はなかった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集の継続に努める。 2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等の報告があれば、速やかに、速やかに委員会を開いて検討する。

令和5年度研究倫理委員会 年次報告

Plan 計画

1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集に努める。
2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等を確認し、委員会活動を改善する。

Do 実行

1. 日本学術振興会が提供する倫理指針等に関する情報収集に努める。
2. 教員の研究活動における倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討し、研究の速やかな進展を支援する。
3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等を確認して、必要に応じて審査方法等の委員会活動を改善していく。

Act 改善

1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集の継続に努める。
2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等の報告があれば、速やかに、速やかに委員会を開いて検討する。

Check 検証

1. 日本保育学会における倫理指針を収集した。
2. 教員の研究活動における倫理審査が必要になったので、速やかに委員会を開いて検討し、研究の速やかな進展に寄与した。
3. 申請のあった教員から、研究活動に不具合等が生じたとの報告はなかった。

令和5年度 「募集・広報委員会」 年次報告書
区分： 学科専攻 ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：森口 和美（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. オープンキャンパスの在り方について再考する。長崎女子短ならではのオープンキャンパスの実施。 2. アンバサダーの前年度以上の活躍かつさらなる仕事内容の充実。 3. 個別進学相談会をさらに充実させ、一人でも多くの総合型選抜出願者の獲得。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 教職員を中心に行っていたオープンキャンパスを学生スタッフに中心となってもらうことで、他にはない魅力的な本学独自のオープンキャンパスを再考していく。例えば、最初の全体オリエンテーションの進行、歓迎の挨拶等を学生スタッフに一任する。 2. 次期アンバサダーの候補を早めに決め、1年生のうちからオープンキャンパスの学生スタッフとして運営に携わり、先輩アンバサダーと共に仕事をし、意識を高める。アンバサダーを中心に SNS の活用を勧める。 3. 年々課題を抱えた生徒も多くなり、本学は毎週土曜日に実施している個別進学相談会を経由した受験生も多くいることから、さらなる充実を図り、一人でも多くの受験生の獲得に努める。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 夏のオープンキャンパスより、学生主導型で行った。オリエンテーション冒頭の挨拶、司会進行等学生が前面に立つことで、参加者からも好評な意見をいただいた。春のオープンキャンパスも含め次年度以降も同様な形で実施したい。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 新アンバサダーの候補を早めに選んでおくことで、夏のオープンキャンパスで1年次から参加することでアンバサダーの仕事を理解し、意識付けをすることができた。例年よりは、SNS を活用できたが、こちらからの声掛けがないと、自ら進んで投稿しようとはしなかった。次年度は積極的な SNS の活用を勧めたい。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 室長に対応していただいた土曜日に実施している個別進学相談会は例年通りの参加者数であった。個別進学相談会を経由した入学予定者は7名を数えた。特に課題を抱えた生徒も多く、これを解消させる支援や助言に努めた。次年度以降も継続を希望する。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 引き続きオープンキャンパスや関係高校連絡協議会の在り方を再考したい。教員による模擬授業と入試説明会だけではなく、女子短ならではの新しいプログラムの可否を委員会で検討したい。 2. SNS の活用について、検討を行う。アルバイトのような扱いにし、謝礼を出す等。 3. ビジネスのコース改編について、情報把握及び共有し、ガイダンス等での周知を行い受験生の獲得。個別進学相談会をさらに充実させ、これを総合型選抜出願への動機付けとしたい。

令和5年度募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1. オープンキャンパスの在り方について再考する。長崎女子短ならではのオープンキャンパスの実施。
2. アンバサダーの前年度以上の活躍かつさらなる仕事内容の充実。
3. 個別進学相談会をさらに充実させ、一人でも多くの総合型選抜出願者の獲得。

Do 実行

1. オープンキャンパスを学生スタッフを中心となってもらうことで、他にはない魅力的な本学独自のオープンキャンパスを再考していく。
2. 次期アンバサダーの候補を早めに決め、1年生のうちからオープンキャンパスの学生スタッフとして運営に携わり、先輩アンバサダーと共に仕事をし、意欲を高める。アンバサダーを中心にSNSの活用を勧める。
3. 年々課題を抱えた生徒も多くなり、本学は毎週土曜日を実施している個別進学相談会を経由した受験生も多くいることから、さらなる充実を図り、一人でも多くの受験生の獲得に努める。

Act 改善

1. 引き続きオープンキャンパスや関係高校連絡協議会の在り方を再考したい。教員による模擬授業と入試説明会だけではなく、女子短ならではの新しいプログラムの可否を委員会で検討したい。
2. SNSの活用について、検討を行う。アルバイトのような扱いにし、謝礼を出す等。
3. ビジネスのコース改編について、情報把握及び共有し、ガイダンス等での周知を行い受験生の獲得。個別進学相談会をさらに充実させ、これを総合型選抜出願への動機付けとしたい。

Check 検証

1. 夏のオープンキャンパスより、学生主導型で行った。オリエンテーション冒頭の挨拶、司会進行等学生が前面に立つことで、参加者からも好評であった。春のオープンキャンパスも含め次年度以降も同様な形で実施したい。
2. 新アンバサダーの候補を早めに選んでおくことで、夏のオープンキャンパスで1年次から参加することによってアンバサダーの仕事を理解し、意欲付けをすることができた。例年よりは、SNSを活用できたが、こちらからの声掛けがないと、自ら進んで投稿しようとはしなかった。次年度は積極的なSNSの活用を勧めたい。
3. 室長に対応していただいた土曜日に実施している個別進学相談会は例年通りの参加者数であった。個別進学相談会を経由した入学予定者は7名を数えた。

令和5年度 「紀要・図書委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：中村 浩美（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 引き続き感染症対策を行いながら利用しやすい図書館の環境づくりに努め、図書館利用の活性化も検討する。 2. 紀要論文における倫理規定案を検討する。 3. 紀要論文の向上と学術リポジトリの導入を目指す。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 入館者の手指のアルコール消毒やマスク着用、また観覧者同士の間隔を取り私語を慎むこと、利用後は使用した机等のアルコール消毒の徹底をおこなう。 2. 他大学の倫理規定等を収集し検討する。 3. 本学紀要への積極的な投稿を呼び掛ける。投稿にあたっては、規定順守のチェックシートを作成する。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・B・C・D」 前年度同様コロナやインフルエンザ感染による注意を促し入館者も利用規則を守って使用していた。 2. 自己評価「S・A・B・C・D」 紀要発行の内規と編集規定を改訂し、紀要投稿時に倫理規定遵守の確認書を求めることにした。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 紀要原稿を紀要論文、研究ノート、研究報告に分類し、チェックシートを作成し確認整理を行った。研究活動報告は削除した。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. コロナやインフルエンザ感染症の拡大対して予防策を常に徹底しながら授業内での利用や、レポート作成実習等の研究材料ネットのみに頼らず本を借りての活動行えるように指導したい。 2. 紀要論文の投稿数を増やすためにも区分の目安は各々の研究に基づいて提出する。 3. 紀要論文提出時期について、1月は教員が多忙なため4月1日締めとして発行時期を遅らせることを検討する。

令和5年度紀要・図書委員会年次報告

Plan 計画

1. 引き続き感染症対策を行いながら利用しやすい図書館の環境づくりに努め、図書館利用の活性化も検討する。
2. 紀要論文における倫理規定案を検討する。
3. 紀要論文の向上と学術リポジトリの導入を目指す。

Do 実行

1. 入館者の手指のアルコール消毒やマスク着用、また観覧者同士の間隔を取り私語を慎むこと、利用後は使用した机等のアルコール消毒の徹底をおこなう。
2. 他大学の倫理規定等を収集し検討する。
3. 本学紀要への積極的な投稿を呼び掛ける。投稿にあたっては、規定順守のチェックシートを作成する。

Act 改善

1. コロナやインフルエンザ感染症の拡大対し、予防策を常に徹底しながら授業内での利用や、レポート作成実習等の研究材料ネットのみに頼らず本を借りての活動行えるよう指導したい。
2. 紀要論文の投稿数を増やすためにも区分の目安は各々の研究に基づいて提出する。
3. 紀要論文提出時期について、1月は教員が多忙なため4月1日締めとして発行時期を遅らせることを検討する。

Check 検証

1. 前年度同様コロナやインフルエンザ感染による注意を促し入館者も利用規則を守って使用していた。
2. 紀要発行の内規と編集規定を改訂し、紀要投稿時に倫理規定遵守の確認書を求めることにした。
3. 紀要原稿を紀要論文、研究ノート、研究報告に分類し、チェックシートを作成し確認整理を行った。研究活動報告は削除した。

令和5年度 「学生指導委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：織田 芳人（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。 2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存する。
DO(実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と情報共有していく。 2. 学生の生活指導が必要な場合、速やかに委員会を開く。 3. 学生の生活指導に関する事例をまとめる。
CHECK(検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。
1. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ ☐ ・ D 」 学生を指導する案件が特になかった。 2. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ ☐ ・ D 」 学生を指導する案件が特になかったため、委員会を開く必要がなかった。 3. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ ☐ ・ D 」 学生を指導する案件が特になかったため、学生の生活指導に関する事例を得られなかった。
ACT(改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。 2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 学生を指導する案件が生じた場合、生活指導に関する事例をまとめて保存する。

令和5年度学生指導委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。
2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存する。

Do 実行

1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と情報共有していく。
2. 学生の生活指導が必要な場合、速やかに委員会を開く。
3. 学生の生活指導に関する事例をまとめる。

Act 改善

1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。
2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 学生を指導する案件が生じた場合、生活指導に関する事例をまとめて保存する。

Check 検証

1. 学生を指導する案件が特になかった。
2. 学生を指導する案件が特になかったため、委員会を開く必要がなかった。
3. 学生を指導する案件が特になかったため、学生の生活指導に関する事例を得られなかった。

令和5年度 「学生支援委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	山中 慶子（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生生活全般、並びに学友自治会活動に関する事項について、 <u>学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。</u> 2. 学友自治会の活動に関しては、 <u>担当教職員を中心にして連絡をとりつつ、学生の主体性を養い学友自治会役員・実行委員の運営能力向上が図られるような支援を行う。</u> 3. 既存の枠にとらわれず、在学生の要望を参考にした、 <u>新しいアイデアを取り入れた行事運営を行う。</u>	
DO(実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わる。教職員のさせたいことではなく、 <u>学生の「やってみよう」を支援する。</u> 学生・教職員の行事参加は(定期総会・選挙を除き)任意とする。 2. 自治会役員から各担当教職員への報告・連絡・相談を徹底させ、社会人となる準備として <u>メールを活用するよう指導する。</u> 学生が主体的に年間・月間の流れを構築し、 <u>効率よく魅力的な活動を行うための能力を身に付けられるよう支援する。</u> また、 <u>選挙時期を 1 か月早めることにより、次期学友自治会への交代がスムーズに行われるようにする。</u> 3. 新型コロナウイルスによって縮小・中止されていた学友自治会行事を再開するにあたり、 <u>効率を考えた取り組みや、新しいアイデアを積極的に取り入れる。</u>	
CHECK(検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。	
4. 自己評価「 S ・ <u>A</u> ・ B ・ C ・ D 」 スポーツフェスタ・弥生祭など、実行委員会を中心に企画をたてて実施することが出来た。当日、上手いかわないこともあったが、行事後には学生側から次年度に向けての提案などがあり、有意義な総括が行われた。 5. 自己評価「 S ・ <u>A</u> ・ B ・ C ・ D 」 5月～11月まで自治会で実施すべきことが多々あり、教員がスケジュールを把握し声掛けを行う必要があった。学生が年間、月間の流れを把握し、先取りして準備を行うことはレベルの高い要求だと考えられた。選挙に関しては、時期を 1 か月早めたことにより役職決めがスムーズに行われ、新役員の仕事内容の把握が例年よりできたのではないかと考える。 6. 自己評価「 S ・ <u>A</u> ・ B ・ C ・ D 」 コロナ禍後のイベント再開であったが、感染拡大防止を念頭に置きつつ、学生のやりたいことを実現できたのではないかと考える。	
ACT(改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 今年度の総括を資料として提示し、より良く改善していけるような具体案を共に考える。 2. 担当教員と学生との連携を図る必要がある。役職の引継ぎについては、研修会の日程調整が難しいため、次年度はアッセンブリに組み込んでいる。 3. これまでのやり方にとらわれず、新規のアイデアを募り、実施できるよう支援する。	

令和5年度 学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生生活全般、並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。
2. 学友自治会の活動に関しては、担当教職員を中心にして連絡をとりつつ、学生の主体性を養い学友自治会役員・実行委員の運営能力向上が図られるような支援を行う。
3. 既存の枠にとらわれず、在学生の要望を参考にした、新しいアイデアを取り入れた行事運営を行う。

Do 実行

1. 学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わる。教職員がのさざんざいことではなく、学生の「やってみよう」を支援する。学生・教職員の行事参加は（定期総会・選挙を除き）任意とする。
2. 自治会役員から各担当教職員への報告・連絡・相談を徹底させ、社会人となる準備としてメールを活用するよう指導する。学生が主体的に年間・月間の流れを構築し、効率よく魅力的な活動を行うための能力を身に付けられるよう支援する。また、選挙時期を1か月早めることにより、次期学友自治会への交代がスムーズに行われるようにする。
3. 新型コロナウイルスによって縮小・中止されていた学友自治会行事を再開するにあたり、効率を考えたり取り組みや、新しいアイデアを積極的に取り入れる。

Act 改善

1. 今年度の総括を資料として提示し、より良く改善していくけるような具体案を共に考える。
2. 担当教員と学生との連携を図る必要がある。役職の引継ぎについては、研修会の日程調整が難しいため、次年度はアッセンブリに組み込んでいく。
3. これまでのやり方にとらわれず、新規のアイデアを募り、実施できるような支援する。

Check 検証

1. 自己評価「A」
スポーツフェスタ・弥生祭など、実行委員会を中心に企画をたてて実施することが出来た。当日、上手くいかなかったこともあったが、行事後は学生側から次年度に向けての提案などがあり、有意義な総括が行われた。
2. 自己評価「A」
5月～11月まで自治会で実施すべきことが多々あり、教員がスケジュールを把握し声掛けを行う必要があった。学生が年間、月間の流れを把握し、先取りして準備を行うことはレベルの高い要求だと考えられた。選挙に関しては、時期を1か月早めたことにより役職決めがスムーズに行われ、新役員の仕事内容の把握が列年よりできたのではないかと考える。
3. 自己評価「A」
コロナ禍後のイベント再開であったが、感染拡大防止を念頭に置きつつ、学生のやりたいことを実現できたのではないかと考える。

令和5年度 「障がい学生支援委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	織田 芳人（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 新様式の「合理的配慮調査書」の不都合や不便等を確認し、もしあれば即時修正して、次年度に反映させる。 2. 年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、前年度末にまとめた合理的配慮に関する情報を提供する。 3. 2年生に対しても、従来の「合理的配慮申請書」に適宜書き加えてもらい、合理的配慮の確認に努める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 新様式の「合理的配慮調査書」の不都合や不便等は確認されていない。半期毎に、調査書を再配布して、学生全体の情報収集に努める。 2. 年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、前年度末にまとめた合理的配慮に関する情報を提供できた。ただし、専任教員と非常勤講師の中間に属する特別専任教員に対する情報提供ができていなかったため、後期から改める。 3. 2年生に対して、従来の「合理的配慮申請書」に適宜書き加えてもらうようにしたが、合理的配慮を必要とする学生は確認されていない。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 後期開始直後に調査書配布が実施できなかったため、情報収集が遅れたが、前期からの変更事例がなかったため、結果的に特に問題はなかった。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 教務課・学生課の尽力で適宜対応がなされたので、特に問題はなかった。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 前期からの変更事例はなく、特に問題はなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 年度末に次年度入学予定者の「調査書」について検討する委員会に、心理関連及び看護関連の知見がある教職員にも参加してもらい、専門的知識に基づくより適切な対応を実施していく。 2. 各学期始めに専任教員及び非常勤講師に必要な情報を提供する。 3. 「障がいではないが、大学へ通知しておきたいこと」の記述が年々増えていると思われることから、調査書の表と裏の項目について見直すかどうかを検討する。	

令和5年度障がい学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1. 新様式の「合理的配慮調査書」の不都合や不便等を確認し、もしあれば随時修正して、次年度に反映させる。
2. 年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、前年度末にまとめた合理的配慮に関する情報を提供する。
3. 2年生に対して、従来の「合理的配慮申請書」に適宜書き加えてもらい、合理的配慮の確認に努める。

Do 実行

1. 新様式の「合理的配慮調査書」の不都合や不便等は確認されていない。半期毎に、調査書を再配布して、学生全体の情報収集に努める。
2. 年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、前年度末にまとめた合理的配慮に関する情報を提供できた。ただし、専任教員と非常勤講師の中間に属する特別専任教員に対する情報提供ができていなかったもので、後期から改める。
3. 2年生に対して、従来の「合理的配慮申請書」に適宜書き加えてもらうようにしたが、合理的配慮を必要とする学生は確認されていない。

Act 改善

1. 年度末に次年度入学予定者の「調査書」について検討する委員会に、心理関連及び看護関連の知見がある教職員にも参加してもらい、専門的知識に基づくより適切な対応を実施していく。
2. 各学期始めに専任教員及び非常勤講師に必要な情報を提供する。
3. 「障がいではないが、大学へ通知しておきたい」との記述が年々増えていると思われることから、調査書の表と裏の項目について見直すかどうかを検討する。

Check 検証

1. 後期開始直後に調査書配布が実施できなかったため、情報収集が遅れたが、前期からの変更事例がなかったため、結果的に特に問題はなかった。
2. 教務課・学生課の尽力で適宜対応がなされたので、特に問題はなかった。
3. 前期からの変更事例はなく、特に問題はなかった。

令和5年度 「寮務委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：宮崎 伸一郎（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 寮監業務をシダックスの方々をお願いしているので、その円滑な業務遂行に向けて連絡相談体制を構築していく。 2. 寮務委員会は前後期最低各2回ずつ行い、短大生や高校生の日頃抱えている問題点や悩みなどを共有できるようにしていく。 3. 若竹寮施設設備の改修、整備
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 寮監との面談を通して問題が生じていないか確認を行うとともに、寮務日誌のチェックを細かく行い不測の事態に備える。 2. 寮務委員会の計画的な実施と長崎女子高校担当者との連絡を密に行い、それぞれの立場からの問題点の提示と対策を協議していく。 3. 寮生集会や寮長・副寮長との協議を通して意見の収集を行う。また、省エネルギーに取り組む姿勢を育てていく。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
1. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 問題が生じていないかの確認については寮務日誌および口頭での確認を通して行うことができた。寮務日誌について高校分特記事項があれば高校へのFAX及び電話で情報の共有はできたと思う。 2. 自己評価「S・A・ <u>B</u> ・C・D」 寮務委員会については5・10・2月に委員を招集して実施した。他に寮監より「振り返り」ということで短大生・高校生それぞれの生活状況を把握することができた。特に大きな問題もなく順調に生活を送ることができたと思う。 3. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 今年度寮棟廊下、洗面室他共用部の清掃を業者をお願いしたことで通常では清掃できなかったところがきれいになり寮監、寮生ともに喜んでいる。また、今後年数が経過して空調設備の更新が徐々に出てくるので計画的な取替のお願いをしたいと思う。省エネルギーに関しては空調の使用について、もう少し寮生の意識を高めなければならぬと感じる。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 今年度初めに寮監の入れ替わりがあり、寮監業務に支障をきたした時期があったと思うが、現在の寮監5名の方は、寮生に対して丁寧に対応していただき、快適に過ごせていると感じている。今後も今年度と変わりなく寮監5名と協力しながら対応に当たりたい。 2. 寮務委員会を少なくとも今年度と同様の回数開催し、また現場の寮監と報・連・相をしつかりとれるよう努める 3. 寮生が快適に過ごせるよう、また寮監が不具合なく勤務ができるよう改善が必要な個所は対応していく。

令和5年度寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 寮監業務をシダックスの方々をお願いしている中で、その円滑な業務遂行に向けて連絡相談体制を構築していく。
2. 寮務委員会は前後期最低各2回ずつ行い、短大生や高校生の日頃抱えている問題点や悩みなどを共有できるようにしていく。
3. 若竹寮施設設備の改修、整備

Do 実行

1. 寮監との面談を通して問題が生じていないか確認を行うとともに、寮務日誌のチェックを細かく行い不測の事態に備える。
2. 寮務委員会の計画的な実施と長崎女子高校担当者との連絡を密に行い、それぞれの立場からの問題点の提示と対策を協議していく。
3. 寮生集会や寮長・副寮長との協議を通して意見の収集を行う。また、省エネルギーに取り組む姿勢を育てていく。

Act 改善

1. 問題が生じていないかの確認については、寮務日誌を通して行うことができた。寮務日誌について高校分特記事項があれば高校へのFAX及び電話で情報の共有は、できたと思う。
2. 寮務委員会については5・10・2月に委員を招集して実施した。他に寮監より「振り返り」ということで短大生・高校生それぞれの生活状況を把握することができた。特に大きな問題もなく順調に生活を送ることができたと思う。
3. 今年度寮棟廊下、洗面室他共用部の清掃を業者をお願いしたことで通常では清掃できなかったところがきれいになり寮監、寮生ともに喜んでいる。また、今後年数が経過して空調設備が徐々に出てくるので計画敵の取替をお願いをしたいと思う。省エネルギーに関しては、もう少し寮生の意識を高めなければならないと思われる。

Check 検証

1. 今年度初めに寮監の入れ替わりがあり、寮監業務に支障をきたした時期があったと思われるが、現在の寮監5名の方々は、寮生に対して丁寧に対応していただき、快適に過ごせていると感じている。今後も今年度と変わりなく寮監5名と協力しながら対応に当たりたい。
2. 寮務委員会を少なくとも今年度と同様の回数開催し、また現場の寮監と報・連・相をしっかりとれるよう努める。
3. 寮生が快適に過ごせるよう、また寮監が不具合なく勤務できるよう改善が必要な個所は対応していく。

令和5年度 「学生相談室」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：荒木 正平（室長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 各学科コースとの情報共有を充実させる。 2. 学生相談室の広報活動を行う。 3. 学生に対する支援を充実させる。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 必要に応じ、各学科コースの長や担当教員と情報を共有する。 2. ポスター掲示内容の改善のほか、全体説明内容をより分かりやすいものとなるよう工夫する。 3. 相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨む。また、相談内容に応じて心理担当教員（カウンセラー）との連携を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 学生からの相談を受けた際は、各学科コースの担当者がそれぞれの長やチューターと連絡を取り、学生の情報を共有し、相談室会議でも検討した。 2. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 広報活動については、ポスター掲示やガイダンス等でのアナウンスなどをわかりやすくし、利用しやすい相談室の雰囲気を伝えるよう努めた。 3. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨み、特に問題はなかった。心理担当教員（カウンセラー）との連携を心掛け、支援体制の充実をはかることができた。あわせて、相談対応記録の整備も実施することができた。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 相談室メンバーの変更にともない、各学科コースとの情報共有をさらに充実させる。 2. 新年度からの相談室メンバーの変更にあわせて、学生相談室の広報活動もより丁寧に行う。 3. 学生に対する支援を充実させる。

令和5年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

1. 各学科コースとの情報共有を充実させる。
2. 学生相談室の広報活動を行う。
3. 学生に対する支援を充実させる。

Do 実行

1. 必要に応じ、各学科コースの長や担当教員と情報を共有する。
2. ポスター掲示内容の改善のほか、全体説明内容をより分かりやすいものとなるように工夫する。
3. 相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨む。また、相談内容に応じて心理担当教員（カウンセラー）との連携を行う。

Act 改善

1. 相談室メンバーの変更にともない、各学科コースとの情報共有をさらに充実させる。
2. 相談室メンバーの変更にあわせて、学生相談室の広報活動もより丁寧に行う。
3. 学生に対する支援を充実させる。

Check 検証

1. 学生からの相談を受けた際は、各学科コースの担当者がそれぞれの長やチャーターと連絡を取り、学生の情報を共有し、相談室会議でも検討した。
2. 広報活動については、ポスター掲示やガイダンス等でのアナウンスなどをわかりやすくし、利用しやすい相談室の雰囲気伝えるよう努めた。
3. 相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨み、特に問題はなかった。心理担当教員（カウンセラー）との連携を心掛け、支援体制の充実をはかることができた。あわせて、相談対応記録の整備も実施することができた。

令和5年度 「地域連携・子育て支援センター」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：古賀 克彦（センター長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、参加人数の増加や満足度向上につなげる。 2. 子育て支援（親育ち講座）、高大連携を含む地域連携活動については、学内全体として取組む意識の共有をさらに高める。そのために、各学科・コースの特色を生かした事業の実施のみならず、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。 3. ボランティア担当委員の配置を今年度も継続し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、活動の充実を図る。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 公開講座の参加者数増加および満足度向上 - 各学科コースへの公開講座実施依頼（幼教2～3講座、食物2～3講座、情報1～2講座） - 参加人数の増加や満足度向上への取り組み実施 2. 親育ち講座の実施と高大連携の強化 - 親育ち講座の円滑な実施 - 県内3高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との連携体制の強化 - 長崎女子高との連携と情報共有体制の構築 3. ボランティア活動の実施 - 担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等のスムーズな実施
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ ④ ・B・C・D」 令和5年度の公開講座は幼児教育学科とビジネス医療秘書コースが2講座ずつ、栄養士コースが3講座開催し、下表に示した合計7講座が開講された。参加率に関しては、新型コロナの影響が今年度も見られ、当日キャンセル等も複数の講座で見られた。昨年度は開講された5講座の中で参加率が100%以上の講座は2講座であったが、今年度は開講された7講座中3講座が定員に対して100%以上の参加者があり、昨年度より参加率は改善した。 2. 自己評価「S・ ④ ・B・C・D」 南島原市親育ち講座については7月から12月にかけて講座を6日間(12回)実施し、参加者はのべ47名であった。なお、この親育ち講座は新型コロナウイルス感染に配慮しながら対面で実施した。高大連携に関しては、県内3高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との間での連携体制をさらに強化することができた。 3. 自己評価「S・ ④ ・B・C・D」 令和5年度のボランティア活動は、愛宕小学校での学習支援（5～12月、S3名参加）、日見こども食堂の調理手伝い（6月S6名参加）、長崎ひまわりプロジェクト5周年記念フォーラムでの手伝い（11月、S5名参加）、竹松ゆかた祭り手伝い（7月L1名参加）、西山台学童イベント手伝い（8月L1名参加）、やってみゅーで学生自主企画参加（8月L1名参加）、保育園の「秋祭り」手伝い（9月L2名参加）、愛宕小学校見守り（10月L4名参加）、長崎ひまわりプロジェクト会場設営（12月L3名参加）、育児支援センタースタッフ手伝い（12月L1名参加）、沿岸漂流漂着ごみ拾い手伝い（7～12月L3名参加）、児童デイサービス手伝い（8月、10月月L1名参加）、成人式の企画運営委員会参加（11～1月L1名参加）、ながさきしごとみらい博実行委員参加（6～12月L1名参加）、愛宕小学校パワーアップ教室（5～12月Y6名参加）、ココウォークでの絵本の読み聞かせイベント（10月Y7名参加）、長崎ひまわりプロジェクト会場設営他（12月Y10名参加）、放課後等デイサービス施設での音楽ボランティア（12月Y11名参加）が行われ、多くの学生が参加した。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 公開講座は地域ニーズの把握・精緻化を行い、参加者の満足度の高い企画の立案・実施する。 2. 親育ち講座については、引き続き参加者の満足が得られ、安心して参加できる講座の企画立案および実施を進める。高大連携に関しては、更なる連携体制強化を目指す。 3. 引き続き、ボランティア参加希望学生が安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい

令和5年度 地域連携・子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

1. 公開講座については地域ニーズの把握・精緻化をすめるとともに、参加人数の増加や満足度向上につなげる。
2. 子育て支援、高大連携を含む地域連携活動については、各学科・コースの特色を生かした事業の実施や情報共有・公開体制の整備を進める。
3. ボランティア担当委員の配置を今年度も継続し、スムーズな受付や活動支援の実施が可能な体制を定着させ活動の充実を図る

Do 実行

1. 公開講座の参加者数増加および満足度向上のため、各学科コースへの公開講座実施依頼や参加人数の増加や満足度向上への取り組み実施する親育ち講座の円滑な実施と高大連携の強化をおこなう。特に県内3高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との連携体制の強化を行う
3. ボランティア活動に関しては担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等のスムーズな実施を行う。

Act 改善

1. 公開講座は地域ニーズの把握・精緻化を行い、参加者の満足度の高い企画の立案・実施する。
2. 親育ち講座については、引き続き参加者の満足が得られ、安心して参加できる講座の企画立案および実施を進める。高大連携に関しては、更なる連携体制強化を目指す。
3. 引き続き、ボランティア参加希望学生が安心して参加できるように支援体制の整備・連携強化を進めたい

Check 検証

1. 1. 自己評価「S・A・B・C・D」
令和5年度の公開講座は合計7講座が開講された。開講された7講座中3講座が定員に対して100%以上の参加者があり、昨年度より参加率は改善した。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
南島原市親育ち講座については7月から12月にかけて講座を6日間(12回)実施し、参加者はのべ47名であった。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
令和5年度のボランティア活動は、栄養士コースが3件で延べ14名学生、ビジネス医療秘書コースが11件で延べ19名の学生、幼児教育学科が4件で延べ34名の学生が参加した。昨年度より多くの学生が参加した。

令和5年度
「個人別報告書」

令和5年度 「玉島 健二」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：大学運営	職名：学長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 授業運営 「初年次セミナー」、「長崎観光入門」等の授業において、学生の知識・技能及び社会人基礎力の向上を目指すとともに、授業評価アンケートの「全体的な満足度」において4.3以上を目指す。 2. 大学運営 学長運営方針で掲げた4つの努力目標及びその取組について、実現に向けた取組を推進する。 3. 学生募集 学生募集に繋がる取組（進学ガイダンスや高校訪問等）に積極的にに関わり、令和6年度入学生170名の定員確保を目指す。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業運営 ①「初年次セミナー」は、学科・コースの担当教員の協力を得ながら、講師との打ち合わせを綿密に行うとともに、受講後の満足度向上と実践力に繋がるような運営とする。 ②「長崎観光入門」・「長崎観光概論」は、授業内容の工夫と教材の充実を図るとともに、学生自らが調べたり、まとめたりする授業構成とする。 2. 大学運営 ①入試・運営委員会での協議を充実させるとともに、必要に応じて情報提供に努める。 ②各学科・コース長及び学長が会議に出席しない委員会（教務委員会）の長に対し、会議開催後の報告を求め、必要に応じて指示を出す。 ③私立大学等改革総合支援事業については、設問ごとに担当部署を決め、当事者意識を持って対応させる。 3. 学生募集 ①進学ガイダンス、高校訪問、短大見学会に積極的にに関わり、本学の良さを高校生等にアピールする。 ②募集広報委員会に必ず出席し、必要に応じて、学長としての意見表明や提案を行う。 ③入試広報室が作成するパンフレット等には必ず目を通し、必要な指導・助言を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・B・C・D」 ①「初年次セミナー」では、SDGsに関する課題を課し、評価の対象とした。②「長崎観光入門」では学生自らが調べ、まとめ、報告書として提出する作業を、「長崎観光概論」では学生自らが考えた「長崎さるくコース」を実際に歩いて回った。各科目の「全体的な満足度」は、長崎観光入門が4.6、長崎観光概論が4.9、初年次セミナーが4.3であった。初年次セミナーについては、学科・コースにより、満足度の評価にばらつきが見られたので、改善・工夫の余地がある。 2. 自己評価「S・A・B・C・D」 ①運営委員会で提供した情報は、「入学生の自己紹介シート内容」、「修学支援制度機関要件の見直し概要」、「入学生の基礎学力確認テスト正答率の状況」、「生成AIの取扱いについて」、「短大地元進学率の状況」、「オープンキャンパス参加者数等の状況」、「私立大学等改革総合支援事業関連資料」等である。 ③担当部署が運営委員会であった項目については、学長が資料を作成した。 3. 自己評価「S・A・B・C・D」 ①・②・③ともに良く努力したと思うが、残念ながら入学予定者数は残念ながら109名（64.1％）にとどまった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
令和5年度をもって退職となる。	

令和5年度 「森 弘行」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 情報管理センターとともに学内情報システムの安定稼働に努めるとともに、業務の引継ぎを進める。 2. 統計処理に関する学外との共同研究に参加する。 3. 新規開講科目「データサイエンス基礎」の教材開発。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. Windows Server のサーバーコンピュータ更新に伴う移行作業、学内 PC のセキュリティ状況の監視、サービス提供など。 2. 大阪大学他との研究グループに参加し、Fine-Gray モデルに関するシミュレーションなどを分担する。 3. 「統計処理」の教材を見直し、「データサイエンス基礎」用に新しく教材を作成する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 Windows サーバーの更新など、情報管理センターへの業務引継ぎを順調に進めることができた。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 5月、6月、12月に研究会を行い、成果発表につながった。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 データサイエンス基礎はビジネス・医療秘書コース以外の学生も履修する予定であることから、PC の操作に慣れていない学生に配慮した教材作成に努めた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 情報管理委員会において今後の学内情報システムの整備計画、情報セキュリティポリシーの策定を行う。 2. 統計処理に関する学外との共同研究の継続。 3. 授業評価アンケートの結果、「数的理解」の理解度が前年度より有意に低下しており、小学生レベルの算数ができないといった基礎学力の低い学生に対応し、SPI 対策を考慮した授業となるよう改善する。	

令和5年度 「織田 芳人」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. ①1 年次必修科目「情報科学」と連続性を図ることで、2 年次必修科目「保育方法論」の一部としての ICT 活用に関する授業内容をより充実させる。 ②2 年次選択科目「生活とアート」の授業内容を8 回実施へ向けて見直す。 2. 障がい学生支援委員会、学生指導委員会、研究倫理委員会の業務を遂行する。 3. ①保育方法論における ICT 活用について資料を収集し、概要をまとめる ②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けについて検討する。 ③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査をまとめる。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ①1 年次必修科目「情報科学」における基本的な Word 文書作成を活かして、2 年次必修科目「保育方法論」において「実習日誌」及び「保育指導案」の作成を行う。 ②2 年次選択科目「生活とアート」の授業内容を8 回分へ精選する。 2. 障がい学生支援委員会における合理的配慮事項について調査書として回収し、新規申請を追加した。学生指導委員会におけるスポーツフェスタ及び弥生祭の実施に協力していく。学生指導委員会及び研究倫理委員会について必要が生じた場合に早急に対応していく。 3. ①保育方法論における ICT 活用に関する情報を授業で取り上げる。 ②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けを検討するためのアンケート調査を行う。 ③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査をまとめる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S ・ A ・ □ ・ C ・ D 」 ①1 年次必修科目「情報科学」における基本的な Word 文書作成を活かして、2 年次必修科目「保育方法論」において「実習日誌」及び「保育指導案」の作成を実施した ②2 年次選択科目「生活とアート」の授業内容を8 回分とすることを念頭に置いて、15 回をした。 2. 自己評価「 S ・ A ・ □ ・ C ・ D 」 障がい学生支援委員会として調査書を回収し、必要な対応を実施した。学生指導委員会を開く必要がある案件は特になかった。年度当初に研究倫理委員会を開く必要が生じたので、計 3 回、委員会を開いて、申請者の研究に支障が出ないように対応した。 3. 自己評価「 S ・ A ・ □ ・ C ・ D 」 ①保育方法論における ICT 活用に関する情報を授業で取り上げた。 ②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けを検討するためのアンケート調査を実施した。 ③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査の結果を集計するに止まった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ①1 年次必修科目「情報科学」の前半で、保育の 5 領域における指導案作成に活用できるように、「実習日誌」及び「保育指導案」の作成に基本的な Word の学修を実施する。次年度から 2 年次必修科目「保育方法論」における ICT 活用の部分を切り分けて必修科目「保育と ICT 活用」とし、1 年次後期開講に変更する。したがって移行措置として、次年度では 2 年次前期及び 1 年次後期で同様の内容の授業を実施する。 ②2 年次後期選択科目「生活とアート」の授業内容を精選して 8 回分とする。 2. 研究倫理委員会について必要が生じた場合に早急に対応していく。 3. ①Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査をまとめる。 ②ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査をまとめる。 ③保育の表現活動における ICT の活用に関する情報を収集する。	

令和5年度 「福井 昭史」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 授業時数の削減、必修科目から選択科目への変更等に対応した授業計画の作成と授業運営を行う。 2. 音楽の実技指導における学生の実態に合った指導方法、教材の開発を行う。 3. 音楽教育の実態に沿った指導方法と評価、教材の研究を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業内容の精選と焦点化、指導方法の改善等により、カリキュラム変更に伴う課題の解決に取り組む。 2. ピアノ初心者に対する実技の指導計画作成と実践、教材の開発に取り組む。 3. 各種学校園における音楽教育の実態を踏まえ、それに合った教育の在り方を研究する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 授業時数が半減した「子どもと音楽表現」では昨年度と同様に、音楽の基礎的な理論、音楽の感受と表出、それによる教育の在り方、創造的な表現活動とその教育効果に内容を精選するとともに、体験を通して知識を身に付けることができるような指導計画を作成し授業にあたった。 音楽の表現技能に関する授業科目の「子どもの歌と伴奏法」（2年）が選択教科となったことから、1年次の「保育と音楽表現」で基礎的な技能の定着が課題となった。そこで、担当する学生の能力や技能に合った教材の開発し使用するとともに、学生個々の技能の向上を主として評価する縦断的な個人内評価の視点で学習を展開し、学生が意欲をもって学習に取り組めるように努めた。その結果、学生の授業評価では概ね好評であった。	
2. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 音楽の表現技能向上を目指す1年生の授業科目「保育と音楽表現」のピアノ授業では、昨年度と同様に能力別のクラス分けによる指導体制とし、その中の未経験者を担当した。授業で使用する初心者用のピアノテキストは本校独自のもので、それを活用しての指導の結果、学生は技能の向上を自覚でき、授業評価では概ね好評であった。	
3. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 2年生を対象とする「子どもの歌と伴奏法」では、幼稚園等で歌われている歌を教材としてピアノの演奏技能の向上に努めている。ところが現在用いている教材曲が幼稚園等の実態に即しているかは明らかでなかった。そこで実習後の学生アンケートの集計と分析を実施し、それを基に教材の開発を行った。この結果は次年度の指導計画に反映させる予定である。この授業の後期にはピアノ連弾を課しているが、学生の好みとする楽曲で技能のレベルに合ったものが少ないことから、昨年度に引き続き教材の開発を行った。これらの結果、授業評価では概ね好評であった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 授業時数の削減、必修科目から選択科目への変更がある科目の教育内容や方法、教材の検討を行う。 2. ピアノ授業の教材開発とその活用方法を研究する。 3. 学生の技能や能力の実態に即した教育の在り方について研究する。	

令和5年度 「武藤 玲路」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 授業について ①講義科目の社会心理学と臨床心理学について、成績評価のSとAの評価が70%以上になるようにする。 また、授業評価アンケートで全項目が4の評価以上になるようにする。 ②演習科目のビジネスデータ活用1・2・3、ライフプランニング、プレゼミナール、ゼミナール、ビジネスプランニング、キャリアアップセミナー、インターンシップ、病院実習、フィールドワークも同様である。 2. 学務について ①学外実習（インターンシップと病院実習）について、3割以上の学生を参加させて就業体験をさせる。 ②就職支援では、就職に関する交流会と実践型教育プログラムを実施して、就職率95%以上を達成する。 3. 研究活動について 「短期大学のアセスメントプランの構築」について、調査研究の成果を紀要等で3本以上発表する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業について ①心理学の講義科目では、授業の冒頭に前回の授業のポイントを質問し、中盤にはアクティブラーニングで学生に考えさせる時間を設けた。授業の最後には理解度と感想を確認するリアクションペーパーを提出させた。 ②表計算ソフト・エクセルの演習科目では、前半の授業でテキストに沿った基本的操作法を修得させ、後半の授業で応用問題と自由課題を与え、問題解決能力と論理的思考、主体性と学習意欲の育成に努めた。 2. 学務について ①学外実習のインターンシップと病院実習の体験が就職活動や就職後の業務に役立つことを数回説明した。 ②就職支援では、2年前後期のキャリアアップセミナー2の全体的な支援と面談による個別支援に加え、2年後期に実施する実践型教育プログラムにおいて、就職活動の具体的な行動計画と経過報告会を随時実施し、クラス全体が就活に真剣に取り組む雰囲気を作り、早期に内定を勝ち取る意識づけを高めた。 3. 研究活動について 「短期大学のアセスメントプランの構築」をテーマとして、教学マネジメント体制とアセスメントプラン、学修成果の可視化について、本学の紀要に投稿や短期大学コンソーシアム九州（JCK）の紀要に投稿した。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・B・C・D」 心理学の講義科目とエクセルの演習科目ともに、学生の授業評価では殆ど4.0以上の高い満足度だった。しかし、特にエクセルの関数の操作では、約2割以上の学生が授業内容の難しさや進行の速さに戸惑っていた。 2. 自己評価「S・A・B・C・D」 就職支援では、12月までに初めて100%の内定率となり、年内に17名全員の進路が確定した。一方、インターンシップの参加者は1名、ボランティア活動は3名だけであり、学外や地域での活動が不振だった。 3. 自己評価「S・A・B・C・D」 自己点検・評価室としての学修成果の到達度や学生支援の満足度の可視化について取り組んだが、専門分野である心理学会での発表はできなかった。次年度は、心理学的要素を取り入れた自己点検・評価を試みたい。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. エクセルの理解度の二極分化に対して、定期的な小テストの結果に応じて、個別支援をする必要がある。 2. インターンシップの参加者が1名であったことから、1年次の夏季休暇中から積極的な参加を促したい。 3. 2年後の第4期認証評価に向けて、成果検証の根拠データの可視化と活用法に資する研究活動に努めたい。	

令和5年度 「中澤 伸元」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授 中澤 伸元
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 歌詞の世界に自分が存在しているかのように詩を読めるよう学生に指導する。 2. 無限能力の出し方を理解しやすく実践を含め指導する。 3. 喜怒哀楽の表現練習の徹底、リアルな表現方法。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 歌詞の世界に意識を切り替えて、その世界に自分も存在しているように身口意一体化する訓練をする。 2. 顕在意識の判断力、知識、思考、理性と、潜在意識の感情、感覚、直観、記憶の役割を実践によって、願いが叶う仕組みをしっかりと理解、納得させる。 3. 喜怒哀楽の表現の表現訓練。 感情表現の意識の作り方を身に着ける。潜在意識が喜怒哀楽を実現させていることをミュージカルを通して身に付けさせる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 楽しい感じ、歌の世界を五感感情を使いイメージを高めることを課題とした。慣れていないので前半はなかなか好奇心が持てなかったが、後半は挽回した。繰り返しの訓練しかない。	
2. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 脳を快にしてから潜在意識とつながることが学生には難しいようだ。自分を信じ、決意集中し、自信を持つ日々の訓練が必要であった。	
3. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 喜怒哀楽の表現についてはある程度台本を覚ええ来ると全員が乗り出した。ワクワク楽しい状態で感覚も身に付き始め本気になり成果が出てきた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 歌の世界を五感感情を使い妄想して、その場の存在として表現できるよう徹底する。 2. 脳を「快」にして自分の無限の可能性を信じ、好奇心を持って決意し、集中し、自信を持たせる。 3. 五感である視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚を使い感情表現の訓練をし、学生の無限の可能性を引き出す。	

令和5年度 「松尾 公則」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授 特専教授 松尾公則
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 「栄養士の科学」は、化学の基礎を理解させる。 「ヒトと生物」は、生物への関心を高めることで地球上の生態系について考えさせる。 2. ゼミナールでは、就職先において環境教育の指導ができる人材の育成を目指す。 3. 講演活動を通じて生態系の保全について啓蒙する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 化学式やモル濃度を理解させることを目的とし、丁寧に解説し復習等も徹底する。 学生に興味がある動物の話題を中心として講義を展開する。講義一辺倒にならないように、動画や標本・実物を使つての90分とする。 2. 今年は、第一希望で入ってきたゼミ生なので生き物に対する興味関心が高い。人数が14名と少し多いが、多くのことにチャレンジしていきたい。 3. 幼稚園や保育園の講演を重視し、園児にとって原体験となるよう努力する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 栄養士の科学では、基礎的な学力をつけさせることができたと思うが、欠席者が多く、学習の雰囲気づくりに苦労した。ヒトと生物は、生活創造学科は多くの受講生が集まったが、幼児教育学科は受講生が一人しか集まらず、開講できなかった。 2. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 第一希望の学生14名であったが、生き物好きという学生は数名であった。それでも、積極的に取り組む学生が多く、多くの自然体験や特別支援学校での授業などを経験させることができた。 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 今年も多く幼稚園や学童、学校関係や地域で自然環境の講演を実施した。特に、保全活動をしている相川湿地という場所での野外観察会は充実していた。時津幼稚園、創成館高校、長崎大学、長崎総合科学大学、一般市民など100名前後に自然を学びながらの観察会を楽しんでいただいた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 栄養士の科学では、基礎的なことに重点を置きながらも役に立つ講義を実施していきたい。 欠席の多い学生に対しては呼び出し面談を実施していきたい。 2. 今年度は14名という多人数だったので、来年度は、人数を絞ってきめ細かい活動をしていきたい。 3. 幼稚園や学童、特別支援学校などだけでなく、多くの県民のみなさまに長崎県の自然のすばらしさを伝えていきたい。	

令和5年度 「濱口 なぎさ」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 演習系の科目では、丁寧な提出物チェックと学生の理解度把握に努める。講義系の科目では、双方向の授業になるよう心掛け、学生の理解度を把握するためにも意見収集の方法を工夫する。 2. 課題のある学生・配慮が必要な学生については、コース内での情報共有を行い、必要に応じて学生相談室や外部機関との連携を図り、問題の早期発見と解決を図る。 3. 学生たちが2年後期の実践型教育プログラム期間を有効に活用し、卒業までに希望する検定に合格でき、さらに上位級にも挑戦するような意欲の継続を促す指導を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 演習系科目の提出物はWordのコメント機能を活用し、個別に修正点等を明記し指導している。講義系科目では、定期的に提出物を提出させて理解度を確認するとともに、返却時に全体的なフォローを行っている。 2. 課題のある・配慮が必要な学生については、2週間に1回のコース会議やメールなどで情報共有を密に行っている。状況次第では保護者にも連絡している。 3. 実践型教育プログラムを有効に活用するために、学習ポートフォリオを学生に配布し、記録と振り返りを定期的に行うように計画している。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 担当科目の課題等については演習系科目でサーバーに提出されたものについては、コメント機能を活用してきめ細かく指導した。また、授業中は机間巡視を行って学生の画面をチェックし、つまづいている学生には個別に指導するよう心がけた。講義系科目では定期的に学生が発表する場を設け、一方通行の授業にならないように心がけた。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 事前に配慮事項申請書が出された学生はもちろんのこと、授業などで学生から申告があった情報等をコース内で共有することができた。必要に応じてチューター生以外の学生とも面談などを行い、保護者とも連絡を取った。メンタルに不調を抱える学生については対応が難しく、学内の相談体制のさらなる充実が必要だと感じている。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 「学習ポートフォリオ」を導入したが、学生の目標設定・振り返りが習慣化しているかの確認ができなかった。学生が定期的に「学習ポートフォリオ」に活動状況を記録するように促すとともに、学生の活動状況を教員が把握できるシステム構築が必要である。PC検定2級を実践型教育プログラムの活動目標とした学生が2人いたため、必要に応じて個別指導を行い合格へと導くことができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生が基本的な知識と技能を身に付けた上で、応用力を育むような教材の開発を行う。 2. 課題のある学生・配慮が必要な学生については、コース内での情報共有を行い、必要に応じて学生相談室や外部機関との連携を図り、問題の早期発見と解決を図る。 3. 実践型教育プログラム期間に学生が行う活動をサポートするための体制を強化する。	

令和5年度 「本村 弥寿子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. ＜授業＞ ・「保育内容総論」「保育方法論」の成績でC評価が30%未満になるようにする。 ・授業評価アンケートにおいて、すべての科目で満足度80%以上を目指す。 2. ＜学務＞ ・学生満足度80%以上、就職率100%を目指し、“保育を学ぶなら女子短”を浸透させる。 ・専任教員の確保に努め、安定した教育体制の構築を目指す。 3. ＜研究＞ ・「カリキュラム論」での学習内容の検証を行い、授業内容改善に向けて研究を進める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ＜授業＞ ・レジュメの工夫、DVDの活用等により一層理解が進む授業方法を模索する。 ・「カリキュラム論」指導案作成の際、2年生からTAを募り、指導案作成のサポートを充実させる。 ・「保育実習指導」の内容の見直しを行い、学習したことが実習で活用できるようにする。 ・公開講座、地域での講演及び実践に積極的に取り組む。その際、学生の力を活かす内容で構成し、学生の学びが広がる機会となるようにする。 2. ＜学務＞ ・学生との面談や学科会議において、授業や学校生活に対する学生の思いを探り、学習及び生活支援に活かす。また、就職に対する考えを探り、キャリア支援センターをはじめた教員と連携し、適切な支援を行う。 ・学長、事務局長との連携を密にし、本学科が必要とする教員の募集に早めに取り組む。さらに、各教員の専門性を尊重しながら、互いに連携しながら学務を遂行できるよう連絡や相談しやすい状況づくりに配慮する。 3. ＜研究＞ ・実習における指導案作成に関するアンケートを実施し、「カリキュラム論」で力を入れるべき内容についての洗い出しを行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 すべての授業に関してレジュメは高評価であった。また、保育方法論において実習前にDVD視聴を行ったところ、実習のイメージが湧いたとの意見があり好評であった。しかし授業者が求める理解につながっておらず、保育方法論、保育内容総論のC評価は共に52.3%・56.9%と目標にほど遠かった。満足度に関してはすべての科目で85%以上であった。カリキュラム論ではTAによる学修の具体的な方法を構築できなかった。保育実習指導に関して改善を進めているところである。今年度の評価がそろそろ5月に改善の効果の検証を行いたい。公開講座は、附属幼稚園の子育て支援活動と連携し、ゼミ生の活動の場も設けることができた。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 学科会議を月2回行うことで教員間の情報共有を確実に行うようにした。また、学生からの要望に応じて面談を丁寧に行うことができた。その効果か、学生の満足度は80%越えの結果となった。さらに3月半ばに就職率が100%に達した。さらに、心理学、保健分野の教員の募集を年度初めからかけ、秋には採用が決まった。 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 22Y生へのアンケートの結果、カリキュラム論での学びは学外実習で大いに役立っていると捉えられた。課題の数についても適切だと考える学生が98.7%であった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 授業内容の理解のための方策を考え、B以上の評価が70%以上となるようにする。 2. 教員間の連携を密にとり、学科教員全体で学生を支える体制を強化する。 3. 降園前の保育と子どもの育ちについて実践記録から関連性を探る。	

令和5年度 「中村 浩美」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. ①マスク着用の際にも表情豊かに明瞭な発音と歌唱指導、またイメージ力を持った音楽表現指導を強化する。 ②人前で歌う羞恥心を軽減しながら保育現場で子どもと歌う喜び楽しさを感じ取れる指導に取り組む。 2. 学生行事でのアドバイスや指導には学生自身が責任を持った取り組みになるよう試みる。また相談悩みを持った学生への対応には状況を見極めながら話をきくようにする。 3. ①2点G・Aまでを息の流れによって無理なく出し、言葉を重んじる楽曲を奏でられるようにする。 ②学生が子どもの大好きな手遊びうたや子どもの歌に積極的に取り組める独自の教材を研究する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ①歌詞の理解やイメージ力を重んじる事から歌唱法に繋がる事を確認する。 ②歌唱法のために体幹を意識した姿勢やスクワットで使いやすくなる腹筋と腰筋、背筋の使い方、口角や表情筋アップによって出しにくかった声、出せた事のない初めての声を発見できるレッスンの積み重ねで、学生に歌唱への興味や喜びをコンプレックスなく自信を持ってたくさんの曲に触れられるよう曲の提供にも工夫をする。 2. 学生が他人事ではなく、常に協力体制を持てるための指導に取り組む。 3. ①息の流れを掴める体幹を鍛えながらスクワットで丹田や腹筋を強化し、上半身自身の力を抜いて声質の自然さと歌唱法に繋がれる演奏を目指す。 ②学生の子どもに向ける表情豊かさと、子どもの声を拾えるための声掛けから手遊びや歌唱に移行を考察しトライしてみる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 ①歌詞読みからその意味を読み取りイメージに繋げて楽曲が何を伝えているのか、何を重んじているのかを学生からの意見や思いを引き出しながら時代背景や言葉の意味も大切である事を指導し、学生も歌詞の理解とイメージで楽曲が歌いやすく音楽的になってきた事を確認できた。 ②任意であったが殆どの学生がマスクを着用していたため、今年度もコロナ感染以前の授業形態にはなりにくかったがマスクをしていても口角アップでの表情筋が明るい声、楽しめる歌になる事、腹筋、腰筋、背筋はスクワットを始めとした独自の体の使い方が出にくかった音域に変化が見えた。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 グループ活動でのコミュニケーションからお互いに自身の事を話す事で、人間関係の構築に値する人を受け入れながら協力体制を取れる事を指導したが、学生によるリーダー的存在によつての成果が大きかった。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 ①ブレスは息を吸うだけではなく、次のフレーズに移行するための大切な音楽要素であり、上半身と下半身の引き合い方で声の伸びを出しながら息の流れに沿った自然な声を出せる方法を模索しながら指導できた。 ②表情豊かな歌唱は子どもへの大きな影響を与えイメージ力を養う事になる歌唱法を指導し、子ども独自の音楽への感情を否定せず、その子が感じた声を拾いながら固定観念をもたずに進めていけるよう受講者が先生役と子ども役に分かれての授業進行は学生達の意識に変化をもたらす事ができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 前年度同様コロナ過での音楽授業はとても取り組みにくくはあるが、マスクをしていても口を大きく開けて口角をアップさせながら表情豊かな音楽授業、特に子どもの歌を子どもが楽しく興味を持って歌えるための基礎、羞恥心を少しずつ軽減できるよう工夫する。何より学生自身歌が好き、好きになったと言う声を聞けるような授業展開をする。 2. 予習・復習・調べると言った取り組みがない学生に於いて、何故それが必要であり保育現場に生きるかを意識できる授業内容の工夫をする。 3. 自身の声質、音域などにコンプレックスを持たせないための成長に繋がる歌唱レッスンを行う。	

令和5年度 「太田 美代」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 栄養士コース	職名： 准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率60%以上を目指す。 2. (学務) 栄養士コースの職員が一丸となって短大の目標達成に努めることができるよう支援して、食を通して社会に貢献し、自らも夢の実現に向けて前向きに努力することのできる学生を育てる。(就職率並びに学生アンケート等を指標とする) 3. (研究)「子ども食堂」の実態を調べ、「食育」の視点からのアプローチの方法を探る。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 1年生の授業ではスライドとワークシートを活用し、まとめて過去問にもあたらせて知識の定着を図る。またリアクションペーパーを使って個別対応を行い、学習への意欲を喚起する。2年生は「チャレンジタイム」での修得度別グループ学習に加え、eラーニングを実施するための環境整備を行い、主体的な学習を促す。学力に関して心配な学生も多いので、可能な限り個別にきめ細かな対応で支援する。 2. 定期的な会議で報告・連絡・相談を密にし、職員の同僚性を育成する。TS、PSの円滑な運用に努め、学生の主体的な学びを支援するとともに、学生の活躍の場を設けて自己肯定感を高め、本学での学びが将来に活きると考える学生90%以上を目指す。 3. ゼミナール活動と連携して「子ども食堂」への聞き取り調査を行ったうえで、「食育」の視点でどのような働きかけを行うことができるか方策を考える。小学生の子どもを対象に「子ども料理教室」を実施し、調理体験を通して食への関心を高める取組を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。	
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率は53.42%で目標の60%には届かなかった。ただし、給食調理を扱った総合問題の正答率は67.83%と高く、全国平均を3.29ポイント、短大平均を5.22ポイント超えたことは成果であった。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 就職は1名を除いて内定し、就職率は95.8%。卒業時アンケートで「本学での学びが将来に活きると思うか」という設問では、全ての学生が肯定的な回答をしていた。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 小学生を対象とした料理教室は実施できたが、残念ながら参加者が少なかった。お宮日のお下りの日という日程がまずかったと思われる。アンケートの結果では、参加者の満足度は高かった。調理に関する説明を学生に行わせることで、学生の達成感も高かった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. KENSへの問題登録数を増やし、可能であれば普段の授業でも復習に活用してKENSの使用に対する意欲を持たせる。 2. 次年度の学務では、新たに学生指導と障がい学生支援の業務にあたる。コース内にも支援を要する多くの学生が入学する予定であるため、大学における特別支援教育について学び、学内の支援体制づくりに生かしたい。 3. 子どもを対象とした食育に関する取組は次年度も継続して実施したい。ゼミの学生の希望とすり合わせをしながら活動方針を立てる。	

令和5年度 「古賀 克彦」 年次報告書																							
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）																							
部署名： 栄養士コース		職名： 講師																					
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。																							
1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】。 2. 学外実習の円滑な運営（実習先評価が A 評価の学生が 80%以上）【学務】 3. 紀要の執筆【研究】																							
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。																							
1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】 ・ 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し解説を実施。また、授業において頻出分野の解説強化 ・ 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用 ・ スキルアップ特講の内容充実 2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上【学務】 ・ 学外実習総合演習での指導強化 ・ 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化 3. 紀要執筆【研究】 ・ 計画的に準備を行い執筆する。																							
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。																							
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 令和5年度栄養士実力認定試験の正答率は昨年より上昇したが、平均点は短大平均を下回る結果となった。臨床栄養学も昨年より正答率は上昇したが、得点は短大平均を下回る結果、栄養指導論は正答率は昨年を上回り、得点は全国平均を上回る結果となった。今年度は全体の点数が短大平均をわずかに下回っており成績は低下傾向にあると思われた。次年度は全国平均を超える成績を目指し、過去問を繰り返し説くだけでなく、内容を正確に理解できるように、栄養士実力認定試験対策講座の内容をさらに充実させていきたい。 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>科目名</th> <th>全国平均(正答率)</th> <th>短大平均(正答率)</th> <th>本学(正答率)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>臨床栄養学 (6 点満点)</td> <td>4.47 点 (78.3%)</td> <td>4.14 点 (69.0%)</td> <td>3.78 点 (63.0%)</td> </tr> <tr> <td>栄養指導論 (6 点満点)</td> <td>4.08 点 (78.7%)</td> <td>3.83 点 (58.3%)</td> <td>4.13 点 (63.3%)</td> </tr> <tr> <td>全体 (85 点満点)</td> <td>53.43 点 (62.9%)</td> <td>49.84 点 (58.6%)</td> <td>49.09 点 (57.8%)</td> </tr> </tbody> </table>				科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)	臨床栄養学 (6 点満点)	4.47 点 (78.3%)	4.14 点 (69.0%)	3.78 点 (63.0%)	栄養指導論 (6 点満点)	4.08 点 (78.7%)	3.83 点 (58.3%)	4.13 点 (63.3%)	全体 (85 点満点)	53.43 点 (62.9%)	49.84 点 (58.6%)	49.09 点 (57.8%)				
科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)																				
臨床栄養学 (6 点満点)	4.47 点 (78.3%)	4.14 点 (69.0%)	3.78 点 (63.0%)																				
栄養指導論 (6 点満点)	4.08 点 (78.7%)	3.83 点 (58.3%)	4.13 点 (63.3%)																				
全体 (85 点満点)	53.43 点 (62.9%)	49.84 点 (58.6%)	49.09 点 (57.8%)																				
2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 令和5年度の学外実習Ⅰ・Ⅱの評価は以下のとおりとなった。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響の為学外実習Ⅰは令和5年9月に学外で実施し、そのうち4名は学内で実施した学外実習Ⅱは全て学外で実施した。受講態度は昨年度と比較し二極化しており、SやAの成績のものも増加したが、Cの成績の学生も増加した。来年度はS・Aの成績の学生の割合は維持しつつ、C評価の学生が減るように、低評価になりそうな学生の指導にも注力していきたい。 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>S</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>学外実習総合演習</td> <td>6 名(18.18%)</td> <td>9 名(39.13%)</td> <td>7 名(30.43%)</td> <td>1 名(4.35%)</td> </tr> <tr> <td>学外実習Ⅰ</td> <td>1 名(4.35%)</td> <td>8 名(34.78%)</td> <td>6 名(26.09%)</td> <td>8 名(34.78%)</td> </tr> <tr> <td>学外実習Ⅱ</td> <td>4 名(17.39%)</td> <td>8 名(34.78%)</td> <td>6 名(26.09%)</td> <td>5 名(21.74%)</td> </tr> </tbody> </table>					S	A	B	C	学外実習総合演習	6 名(18.18%)	9 名(39.13%)	7 名(30.43%)	1 名(4.35%)	学外実習Ⅰ	1 名(4.35%)	8 名(34.78%)	6 名(26.09%)	8 名(34.78%)	学外実習Ⅱ	4 名(17.39%)	8 名(34.78%)	6 名(26.09%)	5 名(21.74%)
	S	A	B	C																			
学外実習総合演習	6 名(18.18%)	9 名(39.13%)	7 名(30.43%)	1 名(4.35%)																			
学外実習Ⅰ	1 名(4.35%)	8 名(34.78%)	6 名(26.09%)	8 名(34.78%)																			
学外実習Ⅱ	4 名(17.39%)	8 名(34.78%)	6 名(26.09%)	5 名(21.74%)																			
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 令和5年度の紀要は必ずしも計画的に執筆されたとは言えない状況であった。令和6年度は改善したい。																							
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。																							
1. 令和6年度の栄養士実力認定試験に関しては、担当科目の得点が全国平均上回るために、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取舍選択を行い、重要な部分は確実に修得させていきたい。また過去問を用いた試験対策に合わせて、内容を理解できるように授業内容の見直しを行っていききたい。 2. 学外実習に関しては、まず C 評価の学生が減少するように、低評価になりそうな学生の支援を重点的に行っていききたい。また S・A 評価の学生の割合も増加できるように支援を行っていききたい。 3. 令和6年度の紀要執筆は計画的に準備し、執筆を行いたい。																							

令和5年度 「荒木 正平」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 担当授業の内容充実と、学習成果の向上。保育実習Ⅲの実施体制の強化。 2. 「学生相談室」に関する連携体制の確立と、「キャリア支援」における業務の充実化。 3. 学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 講義形式の科目では、教科書を中心に知識の定着を図る。あわせて、学生が興味を持って取り組めるよう保育現場での支援を具体的に想定した資料の配付のほか、DVDなどの教材も活用する。保育実習Ⅲについては、学生の卒後のキャリアも見据えつつ、意向をよく確認しながら実施を進める。 2. 「学生相談室」については、担当教職員や心理担当教員（カウンセラー）等との連携体制を強化し、より適切な支援を実施できるよう努める。「キャリア支援」については、支援センター長とも連携し、より充実した体制整備を進める。 3. テーマごとにデータ収集を早期から計画的に進め、研究成果報告につなげる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 本年度は個人演習・グループ演習形式での実践ともに完全に再開できた。幼児教育学科だけでなく、生活創造学科においても、テーマを設定してのレポート学習を導入し、学生の意欲を引き出す取り組みが実施出来た。また、保育実習Ⅲについても3名の選択があり、施設との連携、学生指導含めて円滑に実施できた。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 「学生相談室」業務においては、各担当教職員と心理担当教員（カウンセラー）との連携を心掛け、相談対応記録簿の整備も含めて、支援体制の充実をはかることができた。「キャリア支援」についても、これまで実施してきた支援のほか、県子ども未来課と協力してのオンライン面談会や、諫早市保育会による学内説明会など、新たな試みも実施することができ、学生支援の充実につなげることができた。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 紀要論文1本の執筆・掲載のほか、学会発表を1件行った。ほかに、依頼を受けた雑誌原稿の執筆・掲載が1件となっている。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 担当授業の内容充実と、学習成果の向上。保育実習Ⅲの実施体制の強化（担当教員変更に伴う情報共有等も）。 2. 「学生相談室」に関する連携体制の確立と、「キャリア支援」における業務の充実化（いずれも、担当教員変更に伴う情報共有等も）。 3. 学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）	

令和5年度 「船勢 肇」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 講義では、学生が考える機会を用意する。原理の講義では、学生が苦手とする抽象的かつ高尚なテーマについても避けることなくあつかう。そのために映像資料の分析をおこなう。ゼミナールでは学生が自らの力で高度な理解に到達できるよう取り組む。 2. 学生支援委員会では、学生が主体性を生成できるよう関わる。 3. 科学には人類全体への奉仕が課せられていることを念頭におき、単著出版の足がかりを構築する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 発問・自由記述・グループディスカッションを取り入れる。高尚なテーマについては、学生からの質問に対応する機会をつくることで理解の定着を図る。ゼミナールでは、個人面談を重視しながら、適宜助言を与えていく。 2. 学生には、問いかけのスタイルをとりながら、プロセスを把握し、他の委員と連携を深めつつおこなっていく。 3. 南原繁・蓑田胸喜について論文の投稿を目指す。理論書を精読し、論点の整理をおこなう。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 保育をめぐる社会状況について、やや専門的な論文を配付し、グループディスカッションの機会を与えた。講義形式よりは意欲的に取り組んでくれたようだった。ゼミナールは優秀で意欲ある学生がいた。また、報告集とは別に独自に卒業論文を課したが、よく頑張ってくれた。 2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 昨年よりは、学生の中に入って支援したが、学生には事実上困難な作業とも感じられた。ただ、それぞれの学生は熱心に取り組んでいた。 3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 教務に時間を取られ、ほとんど手を付けられなかった。研究者人生を考えると危機的な状況である。そのなかで、教育原理の教科書執筆を依頼され、完成させた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 専門的な論文を読む機会を与えることについては、より内容・計画を精査し、それぞれの学生がより主体的に取り組めるように改善する。 2. 学生自治の実質化を目指し、もっと学生だけで動かせるように、たとえ小規模でもそれが本学の個性と考えて、タスクの削減をおこなうことが有効だと思われる。 3. 時間管理を見直す必要がある。学会への論文投稿を目指す。	

令和5年度 「野田 章子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学内業務を把握し、積極的に活動する。 2. 授業の質を高め、学生の満足度を向上させる。 3. 論文や学会発表で研究成果を発表する	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. いろいろな行事や業務に積極的に参加する。 2. アクティブラーニングやICT、グループ活動などを取り入れ、学生の満足する授業づくりに挑戦する。 3. 研究保育を軸に、実践的に研究する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 学内業務は、学生支援委員会でのスポーツフェスタや弥生祭の担当をはじめ、積極的に取り組んだ。	
2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 授業は、グループ活動やディベート、ICT などを取り入れたので比較的学生の評価も良く達成感があった。学生の理解については、配布プリントなどで改善できる点があるので、来年度の課題としたい。	
3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 研究は、本学の紀要に「研究ノート」を投稿し、3月には国内の学会で発表をおこなった。来年度は、論文を投稿したい。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生支援委員長としての責務を果たす。 2. 授業形態、配布資料などを工夫し、学生の理解を助長する。 3. 学会発表および論文の投稿をする。	

令和5年度 「桑原 真美」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 栄養士コース	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 募集広報委員として、栄養士コース定員充足率 80%以上を目指す。 2. 栄養士実力認定試験の対策担当として、コース目標に掲げた「短大得点平均を上回る者 60%以上、A 認定の学生の割合 50%以上を目指す」を達成するための取り組みを実施する。 3. 栄養士コースの学生のための e-ラーニングシステムの実装と評価を実施。「栄養士コース 2 年生のうち、システムを利用して栄養士実力認定試験のための学習を行った者の割合」の目標値を 80%以上とする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ガイダンスへの積極的な参加や、満足度の高いオープンキャンパス体験学習の計画など、栄養士コースの魅力が伝わる広報活動を積極的に実施する。 2. 昨年度同様、ゼミナールの時間にチャレンジタイムと称した学習の時間を設け、学習習慣の定着及び、自身の実力把握の機会を多数設ける。また、e-ラーニングシステムを実装することで場所や時間に制限されない新たな学習方法の提案と反復学習により成績 up を目指す。 3. e-ラーニングシステムの実装に伴い、学生およびコース教員へのシステム使用方法のレクチャーを実施する。また、問題登録数の目標を 1 科目 200 問以上(出題数の少ない社会福祉概論を除く)とし、学生の使用頻度を上げる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 令和 6 年度入学予定者は定員 40 名に対して 32 名と 80%を達成した。進路ガイダンスへは業務上の都合もあるが 3 回のみの参加にとどまった。オープンキャンパスに関しては、参加者アンケートにて栄養士コースの体験授業に「満足」と答えた参加者は 90%以上であった。 2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 今年度の短大平均の得点を上回る者が 23 名中 10 名で 43.5%。A 認定の学生も 10 名で 43.5%であった。前年度に比べ成績上位者が減少し、成績下位の者が増加した。e-ラーニングシステム「KENS」は 7 月に実装、8 月から 2 年生の利用を開始した。 3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 e-ラーニングシステム「KENS」については 8 月から学生の利用を開始。同時期に栄養士コース教職員への利用方法のレクチャーを実施した。科目別の登録問題数は平均 200 問以上、計 2800 問が登録され(R6 年 3 月現在)、学生が時間や場所を選ばずに学習できる体制が整っている。栄養士実力認定試験後の KENS 利用者アンケートにおいては、KENS を利用して栄養士実力認定試験のための学習を行った者の割合は 80%であった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 令和 6 年度のコースの定員の充足率は 80%を維持することができるとの見込みである。次年度も募集広報委員として、定員の 40 名に近い入学生の確保へ向けて努力していく。 2.引き続き、チャレンジタイムや KENS にて支援を行っていく。また、学生の栄養士実力認定試験へのモチベーションを向上させる方法をコース教員で協議し、取り組んでいく必要がある。 3. KENS を利用して栄養士実力認定試験のための学習を行った者の割合は 80%であったが、それが栄養士実力認定試験の成績へと結びついていないことが反省点である。本格的に KENS の利用を始めた時期がかなり遅い、利用したとはいえ解答した問題数が数十問と少ないといった学生が多数見られたため、その点へのアプローチをしていく必要がある。	

令和5年度 「江頭 万里子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：特別基幹講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 授業：授業法の改善を図り、学生の満足度を上げる。 2. 研究：演習科目における効果的な授業法を検討する。 3. 学生支援（検定）：秘書検定合格のための支援を行う。 4. その他：マナー指導を徹底し、日常生活における実践化を図る。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業：反転授業の回数を増やす。 2. 研究：演習科目において、反転授業の回数を増やし、その結果を検証する。 3. 学生支援：時間割にある検定対策講座の他に、希望者には個別指導を行う。 4. その他：授業時の出席確認の時間に、学生に自信のマナーについて実践目標を設定させ、実践後の振り返りを行わせる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 秘書実務2の授業評価では、「総合評価」「教員の教え方」「理解度」、「学生の取り組み」の項目において、評価5の割合が3年間（20L～22L）で年々増加した。また、授業外学修時間は、1時間未満の割合が、20Lは26.4%、21Lは45.9%だったが、22Lは、全員が1時間以上であり、授業外学修時間が増加した。事前学習の動画の視聴は1回を義務付けたが、自主的に複数回視聴しており主体的な学びにも繋がった。反転授業の回数を増やしたことが、学生の満足度を向上させ、授業内容の定着にも一定の有効があったものと思われる。	
2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 研究の結果を、紀要等で報告できなかった。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 前期には、2級受験者1人に90分6回個別指導を、後期には2級受験者5人に90分8回の対策講座（時間割外）を実施し、支援を希望する学生には十分対応できたと考える。22Lは、2年間で準1級に2人合格し、準1級または2級の合格者は94.4%となり、よい結果であったと考える。しかし、23Lは、受験者の合格率は、76.9%であり、1年生時の2級合格率は昨年より低下した。卒業までに、希望者の合格率が100%になるように、できる限り支援を続けたい。23Lの35%は、受験を希望しなかった。	
4. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生の振り返りから、バスの乗車マナーについては、多くの学生が周りに目を向け、他の乗客、特に高齢者や妊婦の方、子どもへの配慮ある行動を意識するようになったことが分かった。また、振り返りには、他者への配慮ある行動が「当たり前になってきた」という記述が複数あり、マナーの基本である他者への思いやりの心が育った証しであると考えている。また席を譲り感謝の言葉をもらったときに、嬉しさを感じたという感想が多く、他者の喜びが自身の喜びに繋がるホスピタリティマインドが育ったことも示唆された。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. パワーポイント教材の改善を図る。 2. 学生の主体的な学びを支援する。 3. 秘書検定合格のために可能な限り支援する。 4. マナーの目標設定、実践後の振り返りを次年度も実施する。	

令和5年度 「大徳 朋子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 担当科目において学生が習得しやすい授業内容や進め方の検討をする 2. 配布資料等で研究、検討をし、学生による知識の理解、授業参加意欲を高め、復習のし易さにつなげる 3. 個人研究を充実させる	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. リアクションペーパーを利用し、学生の習熟度を図り、講義目標への理解促進を進める 2. 具体性のある講義を心がけ、現場にいる自分を想像しながら主体的に授業に参加できるような資料の提供を行う 3. 研究を進め、現場の保育士へフォードバックすることで子どもの理解に利用していただく	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 学生のリアクションペーパーより、習熟度を図った上で、講義を進めることができた。成績より大半の学生は、理解が進んだと思われたが、理解が乏しい学生が一定数いた。興味関心の持てる講義を心がけ、復習のしやすい資料の工夫などをすべきと感じた	
2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 教科書的な話だけでなく、現場のリアルさを伝えるような講義を心がけた。また実際の子どものケースをイメージしながら、自分ならどうするかを考える事例の検討や、その場の対処を考えてもらうといった資料を作成し実施したことは、主体的に授業参加することにつながったと思われた。テーマに関して、興味関心が薄い学生は、表面的な回答をしがちであったことは課題であった。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 研究データをまとめ、現場でその知見を伝えて子ども理解に利用していただけたと思われる。学会等での発表に繋げていきたい。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生が講義内容の習熟度をあげられるような資料の作成を行う 2. 具体性のある講義内容を用いて、自ら考え主体的に参加できるように進めていく 3. 研究データをまとめ、学会発表を行うことを目標とする。	

令和5年度 「山中 慶子」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生が保育現場で活かすことができる知識・技術の習得を図る。選択科目を履修する学生には、学生の実態に寄り添い、より実践的な学びが出来るようなカリキュラム構成を目指す。授業評価 4.0 以上。 2. オープンキャンパスや公開講座など学外への広報活動を実践する。また、学生支援委員会による学友自治会の支援体制を整え、スムーズな運営ができるようにする。 3. 博士後期課程において幼児造形についての学びを深め、自身の研究に活かす。幼児期の造形活動における自己決定要因の研究を軸に、研究活動を進める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 昨年度実施した、「子どもと造形表現（応用）」「子どもの絵と製作Ⅰ・Ⅱ」の授業内容を再検討し、より学生の実態に即した内容にする。 2. 8月に造形での公開講座を実施する。学生支援委員会では、教員の会議と学友自治会活動がスムーズにリンクしていく会議計画を立て、年間の活動が効率よく行われるようにする。 3. 幼稚園での観察・分析を基に、学術論文を1本以上執筆する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 今年度は、必修科目と選択科目におけるカリキュラムを区別した。必修科目では造形の基礎的な知識・技術を中心に指導し、選択科目では学生の能力も高いため、少し難しい課題にも挑戦することができた。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 夏のオープンキャンパスでは、近隣の小学校にもチラシを配布したことで、定員を超える応募を頂いた。学友自治会支援については、選挙時期の移行によるアッセンブリ予定が懸念されたが、事前に調整し問題なく進めることが出来た。 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 大学美術教育学会 論文1本（査読有 掲載）／美術科教育学会 論文1本（再査読中）／長崎女子短期大学 紀要 論文1本／であり、目標は達成している。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 子どもと造形表現（必修）が8回授業のため、より保育現場で必要な知識・技術の習得を目指し、内容を精査する。 2. 学生支援委員長の補助的な役割が出来るよう努める。 3. 学術論文2本執筆を目指す。	

令和5年度 「太田 智子」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：助教
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 調理学、調理学実習では専門知識および技術の修得とともに基礎学力（数学、理科）の安定と向上を目指す。 2. 学生主体の卓袱料理試食会の運営を図り、学生の満足度を高める 3. 紀要を1本以上執筆する	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 基礎学力と専門知識を紐づけるため、中学、高校の内容をふまえた資料作りや解説を行う。小テストにより理解度を把握し、早い段階で個別にフォローする。 2. 学生が主体性を持って試食会に取り組めるような資料づくりや運営を行い、達成感や充実感を得られるよう支援する。 3. スポーツ栄養を主軸として研究を進める	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・B・ ☒ ・D」 計画的に進めることができなかった。調理学では配布資料を穴埋め式にしたが、空欄を埋めたことで満足してしまう学生が多かった。小テストでは、特に計算問題の理解度が低いことが感じられたが、個別の対応までは手が回らなかった。	
2. 自己評価「S・ ☐ ・B・C・D」 学生のアンケート結果によると、「自らすすんで取り組むことができた」が95.7%、「主担当以外の内容も把握していた」が87.0%であった。自身の担当部分については積極的に取り組む姿勢はみられたものの、試食会全体の運営に対する意識がやや低い傾向がみられた。一方、「達成感を感じた」学生は100%であった。	
3. 自己評価「S・A・ ☐ ・C・D」 スポーツ栄養を主軸にすることはできなかったが、紀要執筆1本は達成した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生の習熟度を把握する。配布資料を見直し、より要点を絞ったものにする。 2. 主体的に動きたくなるような働きかけを行ない、次年度も達成感100%となるよう支援する。 3. 計画的に取り組み、2本以上執筆する。	

令和5年度 「一瀬 優美」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 実習助手間や教員との情報共有を密に行う（報告・連絡・相談の徹底） 2. レポートや課題等の未提出及び提出遅れがないよう徹底させる。 3. 料理レッスンや公開講座等のイベント開催に際し、より魅力的なイベントになるようサポートをする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業に関することや学生の様子など気になる事柄については報告・連絡・相談する。他助手間、該当教員、コース会議等での情報共有に努める。 2. 提出日時の周知を徹底し、意識付けを行う。 未提出者や遅れがちな学生には声掛けを行い、改善を促す。 3. Instagram の活用やコースの学生への呼びかけを行う他、進路ガイダンス等で高校生へ直接声掛けを行い参加者増加に努める。料理レッスンでは参加者の満足度が向上し学生獲得につながるよう、より細やかなサポートに努める。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 情報共有においては、コース会議が毎週開催されており密にできた。助手間及び担当教員とも密に声掛けを行いながら業務にあたることができた。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 提出期限については授業時のアナウンスや、一斉メール等を活用し行うことが出来た。担当科目の課題提出やその他書類等の提出に関しては概ねの学生が期日を守ることが出来ていた。提出日に休んだ学生に対しても個人的な声掛けやメール等で速やかな提出を促すことができた。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 本年度は直接進路ガイダンスへ行く機会が少なかったため、直接の声掛けがあまり行えなかった。本学でのイベントに参加してくれた生徒に関しては他のイベントへの勧誘を行うことができた。主に担当している料理レッスンには延べ 32 名の参加があり、高校 3 年生女子生徒については参加者 9 名中 5 名の入学が決まっており学生増員へつなげることができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 引き続きコース会議及び助手室内での情報共有に努める。 2. 学生の主体性を尊重することを第一に、全体でのアナウンスをメインにサポートをしていく。難しい学生については個別にメールや声掛け等で促していけるようにサポートする。 3. 高校の進路ガイダンスやオープンキャンパス時の直接の声掛けが参加者増に大きく関わってくる為、その際に少しでも多く声掛けを行い参加を促す。Instagram の活用の機会を増やし少しでも目に触れる機会を増やしていく。	

令和5年度 「石橋 花琳」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教員、助手間での報告・連絡・相談を徹底する。 2. 調理実習が時間内に終了できるようサポートを行う。 3. 課題等が未提出とならないよう、学生のサポート行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ・学生の様子について気になる点は、情報共有をおこなう。 業務中に生じた疑問点は、その都度他助手・教員に相談し解決する。 2. ・授業内容を把握し、事前準備を十分におこなう。必要な器具等を記録しておくなど、次年度を見越した行動をとる。 ・学生の様子をよく観察し、声掛けをおこない素早い行動を促す。 3. ・課題の提出遅れ等が目立つ学生には、個別に声掛けをおこなう。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 報告、連絡・相談を徹底することができ、学生の些細な情報も共有することができた。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 今年度の授業準備に関しての気づき等を記録しておくことで、次年度、スムーズに授業のサポートができるような行動を心掛けた。人数が多いこともあり、毎授業一人一人をよく観察することが難しい場面もあったが、授業中の学生の気づきに関して担当教員と情報共有を行うことができた。個人個人で調理技術は異なるため、差が出てしまうことは不可避である。しかし、全体的にみても授業時間を超過することが多かったため、次年度は時間内に終了できるよう、班内での協力を促す、効率の良い行動の仕方を指導する等、声掛けの内容や方法を模索する必要がある。 3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 課題の提出遅れが目立つ学生に対して個別に声掛けを行うことはできたが、それでも提出が滞る者もいた。学生の特性に合った声掛けや、連絡の方法を検討する必要があった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 次年度も、助手・教員間での報告・連絡・相談を徹底し、情報を共有していく。 2. 引き続き、授業準備についての気づきは記録を行い、次年度を見越した行動を意識する。また、授業がスムーズに実施できるよう、余裕をもった打ち合わせ・準備を行う。授業が時間内に終了できるよう、学生の調理技術の向上はもちろん、効率良く作業ができる学生が増えるよう、指導や声掛け等サポートの方法を検討する。 3. 学生の主体性を尊重しつつ、特性に合わせた声掛けや連絡の方法を模索し、必要に応じて支援していく。	

令和5年度 「有得 結」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教員や他助手との報告・連絡・相談を密に行う。 2. 授業がスムーズに行えるように準備を行う。 3. 「栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者 60%以上および A 認定 50%以上」というコースの目標を達成できるよう、主に資料準備・分析でサポートする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 日頃から目配りを心掛け、授業に関することや学生の様子など気になった点は報告・連絡・相談をする。 2. 昨年の記録を基に、授業日から逆算し計画的に行動する。 担当教員との事前打ち合わせもしっかり行う。 3. 実力認定試験前に開講される栄養士スキルアップ特講において、模擬試験準備等でサポートにあたる。また、各自の得意分野・苦手分野を把握できるようなデータを作成する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 教員や他助手との報告・連絡・相談に関してはコース会議等で意識して行うことができた。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 授業がスムーズに行われるよう、事前に担当教員との打ち合わせや実験試料・試薬の準備を計画的に行った。 1年生の実験において今年度は多人数であったが、TA（ティーチングアシスタント）の学生2名が実験操作等の補助があり、授業をスムーズに進めることができた。 3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 栄養士実力認定試験の結果、短大平均を上回る者は43%（10名／23名）、A認定は43%（10名／23名）と短大平均・A認定を上回る目標は達成できなかった。「栄養士スキルアップ特講」では、問題毎に正答率を算出しまとめた資料を毎試験ごとに作成した。コース教員全員に配布することができたが各自の得意分野・苦手分野を把握できるデータを作成することができなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 報告・連絡・相談は引き続き意識して行い、学生への支援・声掛けは必要であれば行う。 2. 今年度の授業記録を基に、授業の準備を行う。 3. 正答率の分析は引き続き行っていきたい。分析結果や学生の話から「生化学」「食品学」に苦手意識がある学生が多いことがわかった。栄養士実力認定試験において問題数も多く重要な教科である。チャレンジタイム等を利用して知識・理解を深められるよう対策を考える。	

令和5年度 「高井 達司」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務局長兼入試広報室長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 事務局長と入試広報室長との兼務がもたらすリスクを最小限なものとなるよう取り組む。 2. 事務局体制の再構築に取り組む。 3. 学長運営方針を常に意識し、その実行を最優先させる。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 事務処理能力を超える業務量となることが予想される。特に募集活動の停滞は許されないので他者の協力を仰ぐとともに、自身の能力と相談しながら最大限のパフォーマンスを発揮したい。 2. 潜在的能力の高い事務職員にも関わらず、これまでその能力を引き出す機会がなかった。これまで開催されなかった事務局会議を定期的に行うことで、事務局職員一人ひとりが学校改革に向けたその当事者であることを再認識させたい。 3. 本年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標達成には、何れも高い提案力と職場へのロイヤリティが求められる。自身も含めその体現者となる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 業務の兼務は、過去に経験したことのないほどに厳しかったが、募集広報委員長を辞すとともに他の職員の力を借りながら一年間を乗切ることが出来た。いささか綱渡りの日々を送ったことで、余裕を持って業務に向かうことが出来なかった。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 2回とは言え定例の事務局会議を実行することが出来た。これにより事務職員が日頃有している思いを、垣間見る子ことが出来た。予想通り短大改革のための大小様々な意見が出され、幾つかは成案に繋がった。 3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 多忙を理由に時間を掛けこれに取り組む余裕がなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 一年を経験したことで、次年度の業務計画に見通しが立ったが、学長交代に伴い次年度は更に業務量増大の可能性はある。計画的に実行したい。 2. 次年度も継続してこの会を充実したものとしたい。 3. 新学長の運営方針を行動規範とし、これを全ての教職員が共有するよう心掛けていきたい。	

令和5年度 「原田 実輝」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生のニーズに合ったキャリア支援に努め、センター利用の活性化を図る。 2. 兼務担当者や派遣職員との連携を深め、業務の効率化を図る。 3. 積極的に事業主等との情報交換に努める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 限られた時間で的確な情報提供、アドバイスができるよう、できるだけ事前に学生の情報を把握に努める。 2. 引き続き、業務の分類、見直しを行ない基本的なマニュアルを作成する。 3. コロナ禍で断っていた求人関係の訪問を積極的に受け、卒業生の情報や企業の求める人物像、業界の情報等、より多くの情報収集に努め、事業主との良好な関係性を構築する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 学生も忙しく、短い休みの時等に複数名でキャリア支援センターを訪れ、自分の知りたい情報を得ようとする為即答を求められ、なかなか一人一人に時間を取って対応することができなかった。 特に幼児教育学科の学生からは今年度は児童発達支援・放課後等デイサービスや院内保育の情報を求められることが多く、提供できる情報量が少なかった。次年度に向けて情報収集に努め、引き出しを増やしておきたい。	
2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 新しい派遣職員を迎え、一部の業務分担を試みたが、お互いのペースが噛み合わず、うまく機能したとはいえない状況であった。 何をどの程度任せて業務分担を行えば効率良く仕事が進められるのか、再度見直す必要がある。	
3. 自己評価「 S ・A・B・C・D 」 どの業界も人手不足で新卒を求めている、求人依頼の電話や来客訪問は増加傾向にあった。学生対応を第一に時間の都合がつく限り訪問の依頼は受け、その企業や業界に関する情報交換に努めた。顕著な成果が出たものとしては、幼児教育学科における「大村市保育園バスツアー」で、数名の学生の就職につながった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. キャリア支援センター利用の活性化を図ると共に、学生が利用しやすいような環境整備に努める。 2. 効率良く業務をこなしていけるよう、業務内容の見直し、マニュアル化を進める。 3. 引き続き、積極的に事業主との情報交換に努める。	

令和5年度 「宮崎 伸一郎」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務次長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 会計課業務の効率的かつ正確な遂行。 2. 事務局全体において業務分担や連携ができるよう情報共有の体制強化。 3. 修学支援等の学生支援に係る業務の理解、遂行 4. 施設設備の点検、整備、改修	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 計画的かつ早期の対応・処理。補助資料の作成・活用。 2. 連絡・報告、および協力体制の確立。 3. 修学支援制度の的確な運用・各部署との連携。 4. 経年のよる不備個所の確認。照明のLED化。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 会計課1名が8月に退職し、1名新規採用者が9月より勤務始めたが引継ができず、また会計業務の経験がなかったため、引継指導と併せて業務処理をせざるを得なかったが大きな不具合は無く対応できた。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 今年度より事務局長が代わり新体制となったが、事務局会議などを定期的に行い、例年に比べ格段に情報共有ができたと思う。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 大きな不具合なく執り行われたと感じている。申請が遅れて後期直前の採用された学生もいたが、問題なく処理ができた。	
4. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 年度初めの予算確保分についてはもちろんだが、施設設備の改修にも滞りなく対応できた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 新規採用者の会計業務への知識・経験の手助けを行い、会計業務の遂行を行う。 2. 今後も事務局会議（SD 研修）等を行い、更に各自のスキルアップに努める。 3. 事務局職員全員が理解し対応ができるような体制づくりが必要と思われる。 4. 修理、更新が必要な箇所があるので予算の計画的な対応を行う。	

令和5年度 「中山 敬喜」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 会計業務について流れを理解し、滞りなく業務を遂行できるようにする 2. 仕訳や伝票作成、監査資料の作成でのミス減らす 3. 紀要図書委員会での自身の役割を理解し、与えられた任務を遂行する	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 教わったことを詳細にメモし、不明な部分は次長へ確認する 2. 焦らず一つ一つしっかりと確認をしながら確実な資料作成を心がける 3. 不明な点は次長や紀要図書委員長に確認し、細やかな調整を昭和堂と綿密に連絡を取り合いながら行う	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 分からない部分は次長に確認し、教わったことは細かくメモをとりながら業務を行ったが、時々業務が滞ることがあった。	
2. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 作成した伝票、監査資料に不備が多々あり、度々本部より注意を受けた。	
3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 最終的に紀要が仕上がった際に印刷ミスが見つかり、修正作業が必要になった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. まだ業務の流れを全部把握できていないので、一つ一つ確実に流れを理解し業務内容を覚える 2. 確認不足によりミスが目立った為、資料作成後の確認を徹底して行う 3. 次回はミスがないよう徹底した確認と、昭和堂と綿密に打ち合わせを行う。	

令和5年度 「森口 和美」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 事務局内業務の把握及び他の職員への担当業務の共有を図る。（担当者不在時でも他職員が対応可能となるような体制づくり） 2. 次年度より Web 出願が開始することから、事前準備等しっかり行い、滞りなく受験生が出願できるようなシステムの環境づくり（手順ガイド等の整備）に努めたい。 3. 入試広報室の業務分担を再度見直し、業務の効率化を図る。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 事務局会議を通して、他職員の業務内容（今抱えている問題または遂行中の業務等）を把握する。自分の呼び出している学生等については、メールやポップ等で共有し、誰でも対応できる体制をつくる。 2. Web 出願に向けて、対応業者と連絡を密にし、流れの理解に努める。他大学の公式 Web サイトへの掲載方法等参考にし、受験生に丁寧で分かり易く問題なく利用することができるよう、迅速かつ柔軟な対応を心がける。 3. 1年間の業務内容を把握し、業務の平準化を意識しつつ、業務遂行に務める。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・B・C・D」 メール等と呼び出している学生等の共有ができた。他の職員に説明して対応できるものとそうでないものもある為、誰でも対応できるとまではいかなかった。他職員との連携をもう少しやっていく必要があると感じた。 2. 自己評価「S・A・B・C・D」 今年度初めての Web 出願であったが、大きな問題はなかった。次年度は、Web 出願の受験料が紙媒体より安価になる為、利用する受験者が多くなることが予想される。何かあれば迅速に対応していけるようにしたい。 3. 自己評価「S・A・B・C・D」 今年度は、ガイダンスに出向くことが多く、例年通りの計画では業務遂行に至らなかった。次年度は、今年度の反省を活かし、ガイダンスや入試広報の仕事等を視野に入れつつ、教務課の仕事に務めていきたい。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 他の部署の動きを把握し、誰でもどここの部署でも対応できるよう情報共有及び把握に努める。 2. 入試広報の仕事を理解・把握し、教務課の仕事を計画的に業務遂行できるようスケジュールの見直し及び効率化に努める。 3. Web 出願について、受験料が紙媒体で出願するより安価になる事で、利用が増えると予想される。問題なく利用できるよう、迅速かつ柔軟に対応できるようにしたい。	

令和5年度 「林田 翔太郎」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生募集を念頭に置いた取組や制度の提案を行う。 2. 必要に応じて教務に関わる各種業務の効率化及び合理化並びに規程整備等の提案を行う。 3. 本学に存在する不文律の明文化を提案し、業務の合理性を担保する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 事務局会議で学生募集強化や学生の満足度向上に向けた提案を行う。 2. 成績評価に対する異議申立て規程の制定や試験の実施体制（不正行為の未然防止）及び不正行為事案への対応等の見直しを行う。その他必要に応じて Google の活用及び学務システムの改修に取り組む。 3. 実態にそぐわない規程等や規程等が未整備である制度等については、必要に応じて所管する委員会に規程等の改正案や新設を提案する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 本年度開催の事務局会議にて、「学修奨励奨学金制度」の導入を提案し、令和6年度からの導入（同年度入学生から適用）が決定した。学生募集力強化に向けた提案はできなかったが、同制度が学生の満足度向上に寄与することを期待する。 2. 自己評価「 S ・A・B・C・D 」 上記「DO」で掲げた事項（「その他」以下に掲げる事項を除く。）については、2規程 ^{注1} の新設を行った。学務システムの改修については、情報管理センターと共同して学内サーバーへの移管や新機能の搭載を検討した。この点については、令和6年度も引き続き対応を要するものである。 Google Workspace の活用については、会議のペーパーレス化に伴うドライブの活用などに助力した。また、学内の基幹教員を対象に ICT を利活用した学修支援についての調査を行った。その結果、残念ながら Google Classroom を活用した旨の回答は得られなかった。この調査及び前年度行った別の調査の結果を踏まえ、Classroom の学生用利用マニュアルの作成に着手した。同マニュアルは、本年度末に学内の教員に提示することができた。令和6年度以降の ICT を利活用した学修支援体制推進の一助となれば幸いである。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 実態との矛盾を解消するため、2規程 ^{注2} の一部改正を行った。一方、規程等が未整備の制度については、提案を行うには至らなかった。 注1 長崎女子短期大学における成績評価に対する異議申立てに関する規程、長崎女子短期大学試験等における不正行為に関する規程 注2 長崎女子短期大学教職課程委員会規程、長崎女子短期大学科目等履修生に関する規程	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 情報管理センターと共同して学務システムの管理及び改修に取り組み、更なる業務内容の見直し及び効率化並びにペーパーレス化に取り組む。 2. ICT を利活用した学修支援推進体制に向けた学務システム及び Google Workspace の活用を検討する。 3. 必要に応じて学則をはじめとした諸規程の改正に取り組む。	

令和5年度 「櫻井 縁」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 個々の状況に合わせて、きめ細かい奨学金対応をする 2. 入学者増や学生の満足度向上のために、短大の職員として出来ることを考え、行動する。 3. 学友自治会活動の活性化を図り、サークルの数および自治会行事への参加者数を増やす。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 奨学金について相談しやすい環境を作ると同時にヒアリング能力を向上させ、丁寧な状況把握を心がける。また、学生目線でわかりやすい資料を作成し、説明会等に活用する。 2. 他大学の状況などにも目を配り、良いアイディアがないか常にアンテナを張っておく。良いと思ったこと、変えた方が良いと思うことなど、積極的に情報共有する。 3. アッセンブリにはできるだけ参加する。自治会役員と密に連携を取り、学生の自治を妨げない範囲で助言を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 奨学金のシステムがいろいろと変更になったため今までのやり方とは変えた部分が多かったが、都度変更内容を理解して、必要な場合は補足の資料等を作成して学生に落とし込むことが出来た。	
2. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 あまり他大学と交流することが無い1年だったため、なかなか思ったように情報収集ができなかった。また、目的を持って他大学の情報を仕入れようとするまとまった時間も取れなかった。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 前半（弥生祭頃まで）はアッセンブリに参加する機会も多くあったが、後半は他の業務と折り合いがつかずに、時間を取ることができないことが増えてしまった。助言に関しては、必要な場面で出来たと思う。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生と直接奨学金に関する相談をしたりすることがなかったので、必要な学生には相談をする機会を積極的に作るなど、相談しやすい環境を作ってあげたい。 2. 他大学に出向いた時に、同様の部署の方とお話する機会は積極的に設けることが出来たので今後はそういう場面をうまく活用していきたい。 3. 来年度の自治会役員とは今の時点でコミュニケーションが取れているので、「できるだけ学生に任せる」という意識は持ちつつ、うまくサポートができるようにしてあげたい。学友自治会の行事は、学生の意見を尊重し、できるだけ希望通りにできるようにしたい。	

令和5年度 「牧島 愛実」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報・庶務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 1年間を通してのスケジュールを把握し、計画的に業務を行う。 2. 学生との信頼関係を築きたい。 3. スピード感をもって SNS の更新を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 業務引継書を確認しながら、事前準備のスケジュールを立てる。準備に時間を費やす行事や業務が多くあるため、学生や教職員に迷惑が掛からないように事前準備を心がける。 2. 学生に協力してもらうことが多いため、まずは学生アンバサダーや協力してくれる1年生とのコミュニケーションをとれるよう、意識して接する。 3. 行事等があった場合にすぐ発信出来ておらず2～3日後になっているため、当日もしくは翌日に投稿し、スピード感のあるは発信を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 引継書を確認しながら、計画的に取り組んだことが多かった。ただ忙しい時期は、締め切りなどに対してギリギリとなり、計画的に行うなかでも日程調整が課題だと感じた。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 前年度と比較して、学生とのコミュニケーションがよくとれた。引き続き、意識して学生と接するよう努める。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 当日更新できたものもあれば、他に優先する業務があれば、数日後の更新となっていた。次年度はスピード感のある発信を行えるよう、引き続き努める。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 庶務課が忙しくなる2・3月は、入試広報室の仕事がおろそかになりやすかった。特に学校案内の作成については可能な限り、2月上旬に大まかな原稿の作成と変更点の洗い出しを行う。 2. アンバサダーの中でもコミュニケーションが円滑にとれる学生と、こちらから声掛けが必要な学生もいるため、学生の性格を把握しながら接する。 3. 写真の編集や選別に時間がかかるため、更新が遅くなっている。編集については統一化することで、スピード感を重視する。	

令和5年度 「山口 洋」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：情報管理センター職員
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学内PCにおいてウィルス感染ゼロを目指す。 2. 今期リプレースが予定されているサーバ（nt-j-server4）のスムーズな移行を行う。 3. ソフトウェアライセンスやサーバ保守契約の更新を確実に行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学内PCにおいてウィルス検出ソフト（ESET Endpoint Security）の更新を確実にを行い、最新版がインストールされている状態を保つように監視する。古い状態のものがあれば定期的に更新する。 2. 「サーバ入替手順書」を事前に準備してレビューを行い、不明点が無い状態で移行作業を行うようにする。移行作業はPC使用頻度の少ない夏休みを利用し、サーバ停止期間については事前アナウンスを行う。 3. ソフトウェアライセンスの更新については時間のかかるものもあるので、早目に更新手続きを行う。また、料金の改定が行われている場合がある為、業者への見積もりも早めに行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに □ （囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 定期的な注意喚起をメール等で連絡することで、ウィルス感染ゼロが達成できたと思う。本件はウィルス検出ソフトに頼るだけでは実現不可能であり、普段から教職員への意識改善が不可欠であるため、毎年継続していく課題である。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 サーバ入替手順書の書面レビューを数回行い、不明点の抽出を行った。これにより当日のデータ移行作業はスムーズに進行し予定通り切替え作業は完了した。旧サーバのHDは物理的に破壊してもらい情報漏洩が起らないようにした。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ソフトウェアライセンス（ESET, Fortigate, Office）及び年間保守（ActiveDirectory）の契約更新は滞りなく完了した。（Linux サーバ）については現在（3/18）進行中である。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ウィルス感染について、特に今年はランサムウェアの被害が社会的に増加した。身近なところでは（2/15）に発生した「ゆめタウン」のランサムウェア被害はいまだ復旧していない。ランサムウェアのターゲットは病院や教育機関がメインとなっており、データバックアップ等、日頃の作業が重要となる。来年度もこの課題は継続する予定である。 2. 来期は（Linux サーバ）の入替作業が予定されている。今年度と同様に入替手順書を作成して、スムーズなデータ移行ができるようにしたい。 3. 担当初年度ということもあり、ライセンス及び保守盟約の更新を挙げたが、来期は別の目標として「学務システムの環境移行（レガシー環境からの脱却）」を予定している。	

令和5年度 「伊藤 理恵子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：図書館	職名：司書
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭隘化対策に努める。 2. 学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していく。図書館でできる新しい企画を考え、図書館利用の促進・活性化につなげる。 3. 本を通して、地域貢献活動を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 経年劣化蔵書および未利用蔵書の除籍を行う。また、来館者に楽しんでもらうため 幼児教育学科に協力をお願いし、ライブラリーギャラリーとして学生の製作物の展示を行う。 2. 学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントなど例年通り行うとともに、新たに月に1度絵本や紙芝居の読み聞かせを行うえほん会を開催する。図書館閉館時にも返却できるよう返却ボックスを設置する 3. 絵本の読み聞かせボランティアに参加し、絵本を通じて地域貢献活動を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 10年経年した消耗図書30冊と、可動書架内の未利用寄贈本の処分を行った。ライブラリーギャラリーとして、5/M～5/E まで2Yの授業での製作物（粘土の和菓子）の展示を行った。それに伴い、和菓子やお茶・和の関連書籍を展示した。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 図書館前に返却ボックスを設置。閉館時でも図書の返却ができるようにした。蔵書検索及び館内でのd-マガジン購読用としてタブレット端末を2台導入。 図書館前ロッカー使用の際、今までは手書きでの手続きが必要だったが、学生証の提示⇒バーコードスキャンの手続きができるようにして、学生の利便性を図った。 例年通り、学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントに参加したことに加え、今年度から月に1回絵本のおはなし会を開催した（6回開催、延べ20人） 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D 」 6月 上長崎小学校、9月 虹ヶ丘小学校、12月 ひこみのほし保育園、3月 ゆうき保育園 合計4回出張おはなし会ボランティアに参加し、地域貢献活動を行った。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 貸借の動きのない図書（経年劣化の洋書・高齢者福祉に関する図書）の除籍・移動を検討し、図書館内のわかりやすい配架・スペース確保・狭隘化対策を引き続き行う。 2. 学生や教職員の利用者目線になって、図書館の情報提供や利用時の手続き内容を改善していく。メールやグーグルフォーム・動画なども必要に応じて活用し、図書館利用の促進・活性化につなげる。 3. 本を通して、地域貢献活動を行う。	

令和5年度
「研究活動報告書」

基幹教員の研究活動状況表(職位順)								FD・SD研修会 参加状況		
令和1年度(2019)～令和5年度(2023)								令和2年度(2020)～ 令和5年度(2023)		
氏名	職位	過去5年間の 研究業績				国際的活動 の有無	社会的活動 の有無	過去4年間の FD・SD研修会参加実績		報 告 書 ジ 掲 載
		著作数	論文数	学会等 発表数	その他			学内定例会 (8回実施中)	学外主催 (Webを含む)	
森 弘行(L)	教授	0	4	4	0	有	有	8	0	85
織田 芳人(Y)	教授	0	5	2	0	無	有	8	0	86
福井 昭史(Y)	教授	11	4	0	0	無	有	8	0	87
武藤 玲路(L)	教授	0	11	1	0	無	有	8	32	88
中澤 伸元(Y)	教授	0	1	10	3	無	有	0	0	89
松尾 公則(Y)	教授	4	7	6	0	無	有	7	0	90
濱口 なぎさ(L)	准教授	0	5	0	0	無	有	8	1	91
本村 弥寿子(Y)	准教授	0	4	0	0	無	有	7	0	92
中村 浩美(Y)	准教授	0	4	0	0	無	有	7	0	93
太田 美代(S)	准教授	0	3	0	0	無	有	8	1	94
古賀 克彦(S)	講師	0	6	0	0	無	有	8	0	95
荒木 正平(Y)	講師	0	4	3	4	無	有	7	0	96
船勢 肇(Y)	講師	2	5	0	3	無	有	7	0	97
野田 章子(Y)	講師	1	6	1	0	有	有	1	0	98
桑原 真美(S)	講師	0	7	0	0	無	有	8	0	99
江頭 万里子(L)	講師	0	4	0	0	無	有	8	0	100
大徳 朋子(Y)	講師	1	0	4	0	無	無	2	0	101
山中 慶子(Y)	助教	0	8	2	0	無	有	7	0	102
太田 智子(S)	助教	0	1	2	0	無	無	2	0	103

【研究の題目】On pitfalls in statistical analysis for assessing workplace-specific risk of severe Covid-19

Tomomi Yamada, Hiroyuki Mori, Todd Saunders and Tsuyoshi Nakamura

•The 9th International Conference on Risk Analysis (<http://icra9.unipg.it/>)

•Statistical Modelling and Risk Analysis:

Selected contributions from ICRA9, Springer 2023.

DOI: 10.1007/978-3-031-39864-3_17

【研究の概要】

本研究の目的は、疫学的な検証を行う際の誤った統計解析を指摘することである。偏ったデータは、偏った結果を導くのと同様に、誤った分析方法は誤った解釈を生み出す。

本研究では大阪府の COVID-19 感染者データおよびシミュレーションを用い、感染リスク要因の分析を行い、職業との関連を調査した。また、同様に職業との関連を調査した他の論文について、統計手法、結果の解釈の仕方など、様々な角度から誤りの検証を行った。

一部の有力誌には COVID-19 の疫学研究に誤った統計手法が用いられた報告が掲載されており、これらの研究には疫学の専門家が参加することが望まれる。また査読者に疫学統計の専門家が加わることで誤った解釈を予防することを期待する。

【研究の題目】Cause-specific incidence or cause-specific hazard, that is the question.

Tomomi Yamada, Tsuyoshi Nakamura, Hiroyuki Mori, Todd Saunders and Yoshiaki Nose

64th ISI World Statistics Congress – Ottawa, Canada.

<https://www.isi-next.org/abstracts/submission/629/view/>

【研究の概要】

Gray (1988) は、死因別のハザードから累積発生率を推測できない競合リスクのモデルを示している。

ハザードの最も基本的な要件は、打ち切り分布と独立していることである。しかし、Fine-Gray ハザードは独立打ち切りの分布に依存することがシミュレーションにより判明した。

筆者らの知見では、Fine-Gray ハザードが打ち切り分布に依存することは、文献には記載されていない。

Gray の例によれば、累積発生率は治療効果を表すことができない。一方、特定死因のハザードは治療効果を適切に示すことができ、こちらを用いる方が望ましい。

Fine-Gray ハザードは、数学的には明確に定義されていない。従って、より現実的なモデルの下での累積発生率の効果を調査し、Fine-Gray ハザードに対する実際的な修正が必要である。

【研究の題目】SAS OnDemand for Academics による総計シミュレーションプログラムの開発

【研究の概要】

総計シミュレーションでは多量の乱数を用い、様々なパラメータを変化させて計算を実行する。シミュレーションの実行は Excel でも可能であるが、パラメータの違いによる結果のグラフ化や比較には手間がかかる。

SAS (Statistical Analysis System) は統計処理向けのプログラミング言語であるが、パラメータを変化させて繰り返し処理が行えるマクロ機能がある。また 2015 年に開発された更に強力なプロシージャ LUA により、SAS コードをプログラムにより生成でき、シミュレーション結果のグラフ化まで自動化することができた。

上記研究のハザードやインシデンスのシミュレーションは、この成果を活用している。次年度以降も継続予定。

令和5年度(2023年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】織田 芳人

【研究の題目】

- ①保育方法論における ICT 活用に関する情報の収集
- ②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査
- ③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査

【研究の概要】

①保育方法論における ICT 活用に関する情報の収集

教職課程における授業科目「教育の技術・方法」(2単位)にICT活用に関する内容(1単位相当)を含むことが求められているので、令和6年度入学者からは従来の「保育方法論」(2単位)からICT活用に関する内容を切り分けて新たに授業科目「保育とICT活用」(1単位)を1年後期に開講することとした。そこで、従来の内容を検討し充実を図るため、改めて、保育におけるICT活用のこれまでの推移、及び、具体的なICT機器とその実践例を文献、セミナー参加等を通じて収集することができた。ICT機器の一例としてデジタル顕微鏡を購入し実際に操作してみて、保育の表現活動に活用できるかを検討した。収集内容は令和6年度前期に2年対象の授業、及び後期に1年対象の授業に反映させる予定である。

②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査

令和4年度1年前期の授業科目「情報科学」において、Microsoft Wordを学ぶ際、文書に挿入できる幾何学的図形を組み合わせ動物キャラクターを制作するという演習を取り入れ、それがMicrosoft Wordの学修の動機付けとして効果的かどうかをアンケートによって調査した。結果として、そのような演習がMicrosoft Wordを学修する際の動機付けの一つとして有効であると推測された。昨年、日本基礎造形学会福岡大会で口頭発表し、一部修正等を行って、同学会誌に論文「保育者養成におけるMicrosoft Word学修の動機付けとしての幾何学的図形を組み合わせ動物キャラクター制作の有効性」として発表した。

令和5年度では、授業科目「情報科学」におけるMicrosoft PowerPointの学修で、Microsoft Word学修の動機付けと同様、Microsoft PowerPointの学修の動機付けとして幾何学的図形を組み合わせ動物キャラクターを制作するという演習が効果的かどうかをアンケートによって調査することにした。実施したアンケートの結果は次年度に検討して、そのまとめを本学紀要等に発表する予定である。

令和5年8月下旬に開催された日本基礎造形学会札幌大会に参加し、大学・短期大学等における情報教育に関する情報交換・収集を行った。

③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査

保育学生を対象とする知育玩具を活用したヴィジュアル・プログラミング学修に関する研究として、令和元年度・令和2年度に、知育玩具(ロジカルルートパズル)の体験とヴィジュアル・プログラミングの体験(文部科学省提供ツール「プログラミン」を利用)について、ARCSモデルを参照したアンケート調査を行った。令和元年度については本学紀要にまとめたが、令和2年度についてはまとめるまでに至っていない。昨年度からは、国際的に利用されているヴィジュアル・プログラミング・ツール「スクラッチ」を利用したプログラミング学修を実施し、これまでと同様、知育玩具(ロジカルルートパズル)の操作体験が「スクラッチ」の学修体験に影響を与えるか否かを、ARCSモデルを参照したアンケートで調査してきた。令和元年度及び令和2年度における「プログラミン」によるヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査、さらに、令和3年度、令和4年度及び本年度における「スクラッチ」によるヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査を実施してきているが、総括までに至っていないので、次年度以降の課題とする。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】福井 昭史

【研究の題目】

音楽教育の内容と方法の研究及び教材の開発

【研究の概要】

本年度は、担当する授業科目の中で幼児教育学科対象のピアノの実技を担当する「保育と音楽表現」と「子どもの歌と伴奏法」、生活創造学科対象の基礎科目の「生活と音楽」について指導方法の改善と教材の開発に関する研究に取り組んだ。

1 ピアノ授業の指導方法の改善と教材開発

幼児教育学科1年次対象の「保育と音楽表現」では、2022年度から本校独自の初心者用ピアノテキストを用いて指導にあたっている。本年度はテキストにコードネームを加えたり、楽曲を入れ替えたりするなどの改定を施し指導にあたった。入学前にピアノ演奏の経験がない学生の学習状況と年度末の達成度から推測すると、テキストの効果がみられるようである。

1年次の「保育と音楽表現」では1年間の学習を見通したテキストを用いているが、2年次対象の「子どもの歌と伴奏法」では、幼稚園での実習のための楽曲を教材とするなど、学習の深化の過程を見通したメソッド(教育課程)が作成されていなかった。そこで、一年次の学習を基にさらなる技能の向上を目指せる教材の開発にあたった。具体的には、幼稚園などで歌われている歌を教材として、学生個々の、とくに初心者の技能で演奏可能なものとするなど、そのための楽曲の選定とその編曲をおこなった。楽曲の選定にあたっては、実習後の学生アンケートをもとに、幼稚園等で歌われている歌を明らかにした。その中の上位の歌について市販の書籍に掲載されている楽譜を検討し、難易度が高いものについて簡易伴奏を作成した。「あめふりくまの子」「かたつむり」「とけいのうた」「にじ」など25曲程の楽曲であり、これらについては次年度の授業で活用することになる。

なお、アンケートの集計と分析に際しては、ゼミナール学生の課題の一つとし、その方法を学習させた。

2 ピアノ連弾曲の創作

「子どもの歌と伴奏法」では、後期の課題としてピアノ連弾を課しているが、学生のレベルに合った演奏を希望する楽曲の楽譜が少ないため創作が必要である。また、学内コンサートのための楽曲も必要であり、本年度もそれらの創作にあたった。

3 基礎科目の合奏活動の取り組み

生活創造学科対象の「生活と音楽」では、受講生の能力と人数に合わせた演奏が容易な合奏曲の編曲に取り組んだ。

使用する楽器は、ピアノ、デジタルキーボードなどの鍵盤楽器、ハンドチャイム、木琴や鉄琴などである。ハンドチャイムを用いた理由は演奏が容易なだけでなく、音色が美しく、癒しの効果があるといわれ、音楽療法などにも用いられることから、楽器が人に与えるさまざまな効果を理解させる意味も考慮した。また、旋律を奏するだけでなく、音を重ねることによって美しい和音を奏でることができる楽器であるため、合奏の伴奏パートに用いることとした。

ハンドチャイムを用いた合奏の編曲には、この楽器だけによる「荒野のはてに」と、鉄琴を旋律とする「星に願いを」がある。鍵盤打楽器の木琴、鉄琴を用いた合奏では、ピアノの黒鍵にあたる音だけを用いた「わらべうた」の合奏にグループで取組ませた。バス木琴によるオスティナートの伴奏の演奏方法を提示し、それに合わせて「おちゃらか」「あんたがたどころ」など、学生が知っている旋律を演奏させるものである。その他に、旋律、低音パート、和音のリズムの3パートからなり、木琴、鉄琴、キーボードなどで演奏できる「エーデルワイス」の編曲をした。これらの楽曲による合奏の活動には学生が意欲をもって取り組んでいるようであった。

【学科名またはコース名】 ビジネス・医療秘書コース 【職名】 教授 【氏名】 武藤 玲路

【研究の題目】 第4期認証評価に向けた学修成果の可視化グラフの試案

【研究の概要】

1. ブーカ時代と第4期認証評価に向けて

近年、AI(人工知能、Artificial Intelligence)の発達により、ブーカ(VUCA)時代(「将来の予測が困難な時代」、「Volatility:変動性」「Uncertainty:不確実性」「Complexity:複雑性」「Ambiguity:曖昧性」)が到来している。大学等の高等教育機関には、このような予測困難な時代のニーズに応じて、社会に貢献できる人材の育成が強く求められている。

教育機関で行われている教育を企業が販売する商品に例えると、「教育」や「学修成果」という独自の手法で開発した商品を、顧客である「学生」が購入することで、学生は社会のニーズに合った経験や能力を得ることができる。この役割を担っているのが教育機関である。具体的には、学校案内などの学生募集に関する「説明書」「保証書」「契約書」を用いて、教育の内容と成果を説明し・保証し・約束している。

さらに、その成果を可視化して証明することで、その教育機関に対する信頼と期待を与えている。そのためには、学修成果の到達目標を明確に示し、その結果を客観的に評価して、分かりやすく可視化する必要がある。このようにして、教育機関はステークホルダー(利害関係者)と信頼関係を結び、社会的責任を果たすことになると言える。

一方、2025年度(令和7年度)から大学・短期大学基準協会の第4期の認証評価が始まる。第1期から第3期までの評価基準では、学修成果の定義・評価・可視化が重点なポイントとなっていた。特に教育の質保証の仕組みとして、PDCAサイクルを構築し、学修成果に焦点を当て、客観的な評価と結果の可視化に取り組んでいることが高く評価された。

PDCAとは、Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Action(改善)の4つのプロセスを繰り返し、業務効率を改善するフレームワークで、PDCAの最後のステップのActionが終了した後は、最初のPlanに戻ってプロセスを循環させる手法である。第4期の認証評価では、その次の段階として、PDCAサイクルによって、「各種の改善を行った後に、いかに学修成果が向上したか」に焦点を当てて審査されるようである。

また、PDCAサイクルの構築を、教員のみならず学生においても奨励し修得させることで、学習への意欲と主体性が促進される。このことから、認証評価においても学生のPDCAサイクルの構築が審査のポイントとして重視されると考えられる。

以上のような取組を教員と学生にフィードバックするとともに、他のステークホルダーにも情報公開する必要がある。

2. リフレクションとは

一方、前述のPDCAサイクルに自己調整学習を取り入れた教育法・学習法がある。自己調整学習とは、学習者が自分自身の学習活動に能動的に関わり、自らの学習を調整するという学び方を指す。この学び方で学ぶ学習者は、自分自身の立てた目標を達成するために、学習に対する意欲や学習方法を自ら観察、調整し、効果的に学習を進めていくことができる。

また、自己調整学習の1つに「リフレクション」という学習方法がある。リクルートマネジメントソリューションズ(2023)は、リフレクションを次のように定義している。リフレクション(reflection)は「内省」を意味する言葉で、自分の考えや言動、行動などを深く省みることである。ビジネスシーンにおけるリフレクションは、業務から一時的に離れ、自分の経験や考えを振り返ることを意味し、人材育成の手法として定着している。初めてリフレクションに注目したのは、マサチューセッツ工科大学のドナルド・ショーン氏と言われている。彼は研究のなかで専門職に就く人々を観察した結果、多くの人が働きながら状況を振り返り、自分がどうすべきかを考えていることに気付き、この行動を「行動のなかの内省(reflection in action)」と呼んだ。

リフレクションは振り返りの意味を持つが、反省やフィードバックとは異なる。反省とは、自分の言動を振り返り、同じ過ちを繰り返さないよう考えることである。これに対し、リフレクションでは、自分の行動を主観や感情ではなく俯瞰して考え、悪かった点だけでなく良かった点も振り返る。また、フィードバックは上司など他者が主体となり、自分の行動に対して評価をもらうことである。一方、リフレクションでは自分自身が主体となって振り返る。

人材育成には多様な手法があるが、どのような手法も「やらされている感覚」では効果が上がらない。人材育成の効果を高めるためには、自分自身で考え、気付くことが重要である。この「自分で考え、気付く」という部分がリフレクションになる。

3. 目的

本稿は、独自のPDCAサイクルによる教学マネジメント体制とアセスメントプランに、リフレクションの手法を取り入れたモデルケースを構築することを目的とした。これにより、教員の教育と学生の学習を改善・向上させる一助となると考えた。同様の学修支援システムの先進事例は既に存在するが、潤沢な資金を用いて専門の開発業者に委託しているケースが多いようである。そのため、システムの導入と運用に高額な導入費と維持費を要し、膨大なデータの入力と管理に多大な負担が生じるというデメリットがある。さらに、多様な機能と細か過ぎる可視化グラフを使いこなすことが困難で、多くの教職員や学生から利便性と有用性への疑問の声が生じているという話も聞く。

そこで本稿では、必要なIRデータと可視化グラフに限定して、学修成果と4つの方針(DP、CP、AP、CAP)を検証する学修支援システムを開発し、より効率的な教育と学修に寄与することとした。具体的には、リフレクションの手法を導入した新たなPDCAサイクルの構想を策定し、長崎女子短期大学生活創造学科ビジネス・医療秘書コースのアセスメントプランを事例として、ダミーデータによるディプロマサプリメントの可視化モデルを作成することにした。

以上

令和5年度(2023年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】中澤 伸元

【研究の題目】 学生の意識を改革し、無限なる可能性を引き出す指導法について

【研究の概要】

学生の無限なる可能性を引き出す為、昨年から一人一人のレッスン指導法を始めた。結果、個人個人の指摘ができるので、一対一のレッスンで一人一人が変わり始めた。学生には、まず自分の可能性を信じ、他のメンバーから必要とされる自分になることを自覚させていった。保育者として、自分のどんな言葉が人を喜ばせ、どんな言葉で人は傷つき、どんな態度で人は苦しむかを深く追求することをしっかりミュージカルで学んだと思う。

1年間を通して学生に指導した事は、何をするにも、とにかく自分の心をウキウキワクワク状態にするとする事。そのためにはまず自分が何を決意するかを決めなくてはならない。

目標達成のためにまず「決意」する。

- | | | |
|----------------|-------------------|-------------------|
| 1.集中することを決意する。 | 2. 好奇心を持つことを決意する。 | 3. 自信を持つことを決意する。 |
| 4.ゴール設定を決意する。 | 5. 理解することを決意する。 | 6. 分析することを決意する。 |
| 7.共感することを決意する。 | 8. 五感を鍛えることを決意する。 | 9. 感情表現することを決意する。 |

「過去」「現在」「未来」の捉え方

過去が現在を作り、現在が未来を作ると言う考え方は終わり、未来は現在の中にあり、現在は過去に消えていくと言う考えが令和の考え方だ。本当は未来現在過去は同じ場所にあると言う捉え方である。

自覚することは、自分の心が過去に向いているか、未来に向いているかで自分の人生を作っていることに気が付くことだ。

人生は自分の為にあるのだから、自分を好きになるのは、当然、自分を100点からのスタートか、0点からのスタートから始まるのかでは天と地の差がある。そのためには、マイナス思考は成長のエネルギーとし、プラス思考が夢を叶えてくれる。

合言葉は「ウキウキ！ワクワク！」で何事もワクワク状態から始める。

つまり、「快」の状態を保つ。

- 1、笑顔訓練 2 姿勢態度訓練 3、行動訓練

短期記憶と長期記憶の作り方理解

RAS(毛様体不活系)とスコトーマの違いについての実技実験

コンフォートゾーンの移行の理解

学びの段階は5つ

- 1.知る → 脳 2. わかる → 理解 3. やる → 行動 4. できた → 身に付く 5. 使える → 成果

身体の使い方で今の心の状態を知る訓練

- 1.右上を見るとイメージ映像とつながり、思い出すことができる。
- 2.左を見ると、過去とつながる。
- 3.左下を見ると、マイナス思考

五感訓練と感情表現を繰り返しのトレーニングによって育て、ワクワク感を味わえるように繰り返すことが大切。

- 1.視覚訓練 2.聴覚訓練 3.臭覚訓練 4.味覚訓練 5.触覚訓練

時間がなくて今までやってこなかった個人トレーニングを今年は取り入れてみた。メンバーの半分以上が自信ない音痴だと思っていた学生が、自分の弱点を指摘され、緊張し努力し個人レッスンを受けるようになってからどんどん歌えるようになったのだから、自信を持てるようになるのも当たり前だ。これを教訓に、個人レッスンをこれからも続けなくてはと考えている。問題が起きるという事は、学生達が教員に対しての課題を与えてくれたという教訓になった。一人ひとりの学生の思考を読み取り、一人ひとりに合った指導法に取り組むことができた。学生に学び、変わりたい言う決意表明をさせることは指導次第という教訓であった。大切な事は、目標を達成させることではなく、まずは自分がワクワク感を持ち幸せになっている状態から何事もスタートすることだ。学生の人生を邪魔するものは何もないと指導することで、学生のパワーは尽きることなく、いつも溢れ出てくる。少しずつではあるが、今年の学生たちに私は常に感謝の気持ちを忘れない。そして学生達一人一人が使っている日常の言葉が自分の人生を作っていることを自覚して欲しい 以上の訓練はAIにはできない訓練であり、今からノ時代に必要不可欠ものである。

令和5年度(2023年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】松尾 公則

【研究の題目】

- ① 長崎県における両生爬虫類の分布
- ② 新種「ゴウトタゴガエル」の記載について
- ③ 湿地の保全活動

【研究の概要】

① 長崎県における両生爬虫類の分布

長崎県内の両生爬虫類の分布状況を調べ始めて50年になる。5年ほど前までは、離島の調査に重点を置いていたが、すべての有人島と多くの無人島の調査は一段落したので、今年も含め現在は県本土が中心になっている。特に、長崎市内の分布状況とその変化に注目しての調査を継続している。全種調査をしながら、特に、カスミサンショウウオとニホンアカガエルに注目している。両種とも、冬に産卵する貴重な両生類で、個体数の減少が著しい。その理由は、冬季に繁殖する両生類であるため、産卵や幼生が育つための水場がほとんどなくなっているからである。その理由は、農業の衰退により、山際の水田の多くが放棄され藪化したため産卵に適さない場所となったためである。調査結果については、長崎市の方にも報告しているが、あらゆる機会を通じて市民のみなさまにも伝えていきたいと思っている。

② 五島列島産タゴガエルの新種「ゴウトタゴガエル」

2023年8月15日、五島列島産のタゴガエルが、和名「ゴウトタゴガエル」という名前で新種記載された。記載者は、北九州にある「いのちのたび博物館」の学芸員である江頭幸士郎氏である。記載に際しての協力者として、和名はゴウトタゴガエルであるが、学名に*Rana matsuoi* という名前を付けていただいた。学名というのは、世界共通の生物名である。そこに、松尾という名前を付けていただき大変光栄に思っている。五島列島にタゴガエルがいることを発見したのは、1981年のことであるが、県本土のタゴガエルと異なるというのが2003年に分かり、詳しい調査を開始した。2011年に、日本中のタゴガエル類を研究している江頭さんを五島列島に案内し、そこから、五島列島の分布状況、生態、DNA分析など詳しい研究が開始された。五島列島での分布状況や生態などについては私の方が担当し調査を継続してきた。その結果として、今年度の新種記載が発表されたのである。発表後も、数回、五島列島での調査を継続している。新種記載発表後の反響は大きく、長崎県にあるすべてのテレビ局や新聞社からの取材を受け、大々的に放送された。ゴウトタゴガエルは、新種であると同時に長崎県五島列島の固有種であるので、今後も調査を継続していきたい。なお、長崎県に生息するカエル類は今までの13種から14種となった。ちなみに、日本のカエル類が53種である。

③ 湿地の保全活動

長崎市相川町に旧水田跡を湿地化した相川湿地という場所がある。長崎市の所有地ではあるが、自治会の人と協力して保全に取り組んでいる。活動内容は、自治会では、市の補助を受けて年間を通して除草や土手の改築などの作業を行い、私たちニホンアカガエルを守る会では、湿地内に水を行き渡らせる溝掘りや野外観察会を実施している。この場所は、長崎市や長崎県で絶滅危惧種に指定されているニホンアカガエルの大産卵地である。今年も、約700卵塊を観察することができ、保全の効果が出ている。この湿地の保全活動については、今年度の九州両生爬虫類研究会鹿児島大会で発表し、大きな反響を呼んだ。長崎市と地元自治会、それに、私たちニホンアカガエルを守る会の三者が協力することで広大な湿地の維持が成功している。今後とも、この関係を維持し、長崎県でも有数の湿地を維持していきたい。

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース 【職名】准教授 【氏名】濱口 なぎさ

【研究の題目】能動的学修の実践に関する研究

【研究の概要】

(1) 目的

担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法

- ①タッチタイピング習熟度向上のための指導法の研究
- ②日商PC検定合格のための補助教材の開発
- ③実践型教育プログラム充実のための「学習ポートフォリオ」の開発

(3) 結果

- ①1年次前期の「ビジネス文書作成1」で、タッチタイピングの習熟度向上のための指導法に関する研究に取り組んでいる。

初心者クラスの学生に対しては、手元を物理的に見られないような器具を使用して、キーボードの位置を確実に覚えることから始め、アルファベット、単語、短文、長文と段階を追ってタッチタイピングが習熟するように指導している。経験者クラスの学生については、ホームポジションなどキーボードと手の位置を正しく身に付けていない場合もあるため、矯正のために手元を隠すこともある。今年度の1年生は、例年よりもタッチタイピングを正しく身に付けている学生が多かったため、非常にスムーズに習熟度が向上した。

そのため、5月初旬には初心者クラスの学生も手元を見ずに入力できるようなスケジュールで指導を行い、美時にその目標を達成することができた。そのため、ビジネス文書作成に関する知識の習得などは経験者クラスと同じタイミングで指導することができた。全ての学生たちが早い段階でタッチタイピングの習熟度を上げることで、短大在学中はもちろんのこと、就職後においても作業効率の向上や時短につながり、余裕をもって仕事に取り組むことが可能となり、仕事の質の向上も期待できると考えており、次年度以降もこの指導法を継続していきたい。

- ②卒業までに日商PC検定（文書作成）3級に全員合格することをコースの目標と掲げており、今年度は1年生も2年生も受験者全員が合格した。2年生については一度も受験しないまま卒業する学生が1名いたのが残念である。一方で、PC検定2級を実践型教育プログラムの活動目標とした学生が2人いたため、必要に応じて個別指導を行い合格へと導くことができた。どのような職種・業種に就職するとしても、WordやExcelの基本的なスキルを持っていれば必ず役に立つ。毎年一定数の希望者がいる医療事務の求人票には、PCスキルが具体的に明記されることが多くなっている。自分の実力を客観的に示す指標としての検定試験の役割を学生たちに示したいと考えている。

受験をしなかった学生たちの理由はさまざまであるが、知識科目の共通分野に対する苦手意識もあると感じている。昨年度開発した「知識科目」について、自学自習を促すためGoogle Formで作成した補助教材を効果的に使用することができなかった。教材の内容は学生たちが購入している模擬問題集の内容を採用した。次年度、改めて学生に提供し、その効果を確認したい。

- ③2年次後期の実践型教育プログラムの期間、各学生が個別に活動目標を設定し、その目標を実現するための補助教材として「学習ポートフォリオ」を作成した。具体的な記録としては、1年次前期から2年次後期の活動を意識するための「1年次学習活動計画表」「1年次学習活動自己評価表」「2年次学習活動・実践型教育プログラム計画表」「2年次学習活動・実践型教育プログラム自己評価表」の4種類を学生に配布し、定期的に記録するよう指導した。また、同じファイルにはキャリアアップセミナー1・2、プレゼミナール、ライフプランニングの配布資料や資格取得・検定関係の資料も綴じておき、自己分析や就職活動の資料にするよう働きかけた。しかし、チューター面談の折などに学生の目標設定・振り返りが習慣化しているか確認するという意識が学生にも教員にも欠けていた。

次年度は、学生が定期的に「学習ポートフォリオ」に活動状況を記録するように促すためにも、学生の活動状況を教員が把握できるシステム構築が必要であると考えている。

令和5年度(2023年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】准教授 【氏名】本村 弥寿子

【研究の題目】 保育指導案作成の理解を深める取り組みについて

【研究の概要】

1) 目的

保育者を目指す学生にとって学外実習は不安なものである。特に保育指導案作成に対する心配は大きい。筆者は、学生の保育指導案作成に対する不安感を軽減すべく、科目「カリキュラム論」において授業内容及び方法の工夫・改善を7年間試みている。しかし、その試みが、学生保育指導案作成に活かされているのか十分には捉えられていない。そこで、令和5年度学外実習を終了した時点で、「カリキュラム論」での学びが学外実習に役立ったのかについて検証することにした。

2) 方法

すべての学外実習を終えた本学幼児教育学科2年生76名を対象に、保育・教職実践演習の授業においてアンケートを取った。アンケートは集計し、カリキュラム論での学びが学外実習での保育指導案作成に役立ったのか、課題の数は適だったのかの把握を行った。さらに、自由記述にて、学生の満足・不満足な点の具体的に把握を試みた。

3) 内容

アンケートの質問項目は以下のとおりである。

Q1. 「カリキュラム論」で学んだことは、学外実習で役に立ったかを、「役立った・まあまあ役立った・あまり役立たなかった・役立たなかった」より選択し、その理由を自由記述にて述べる項目

Q2. 課題の数(3つ)は適切だったかを「適切だった・まあまあ適切だった・あまり適切ではなかった・適切ではなかった」から選択し、その理由を自由記述に述べる項目

Q3. 「カリキュラム論」でもっと学んでおいた方がよかった、また、もっと教えてほしかったと思う内容を自由に記述する項目

Q4. その他の意見・要望を自由に記述する項目

4) 結果・今後の課題

令和5年度幼児教育学科2年生へのアンケート結果は以下のとおりである。

Q1「カリキュラム論」で学んだことは学外実習で役立ったか

役立った	まあまあ役立った	あまり役立たなかった	役立たなかった
64名	12名	0	0

Q2 課題の数(3つ)は適切だったか

適切だった	まあまあ適切だった	あまり適切ではなかった	適切ではなかった
44名	31名	1名	0

アンケートの結果より、「カリキュラム論」で学んだことは学外実習において役立っており、課題の数も適切であることが分かった。そのように考える理由として、「実習に必要なことが学べた」「書き方や子どもへの接し方について参考になった」など、指導案の書き方に加え、保育全般に役立っている学生もいることが分かった。課題数に関しては、もっと増やしてもよいと考える学生が多数いる中、他の授業の課題もある中で、「カリキュラム論」の3つの課題に取り組むことはきつかったとの意見もあった。

また、Q3、Q4では、「子どもの姿を予想することが難しい」「模擬保育をすると政策のイメージがつかみやすいかも」といった記述が見られ、保育のイメージが具体的に描けないことで困難を感じていることが分かった。さらに、「指導案での言葉の選び方をもっと教えてほしい」「訂正・アドバイスがほしかった」との記述もあり、指導案の文章作りに困難を感じている学生もいることがうかがえた。

以上のようなアンケート結果から、「カリキュラム論」の授業内容に関してはおおむね現状のまま進めていいと考えられる。改善を試みる点として、学生が保育を具体的にイメージできる方法や、文章の丁寧な添削であろう。保育経験がない学生の初めての保育指導案作成であることを考え、課題として提示する保育場面の内容を授業者が一層絞り込み精選する必要があると考える。さらに、添削や振り返りの時間を捻出し、学生一人一人に応じた指導が行われる授業方法について模索すべきであると思われる。模擬保育を実践している他科目とも連携を図り、学生が保育を想像しながらそれを文章で表すことができるような授業改善を進めていきたいと考える。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】准教授 【氏名】中村 浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行のもととした発声法と、それに伴う歌曲やオペラアリアを含むクラシック楽曲の音楽表現、演奏法、と演技法。また、ミュージカルにおけるミックスヴォイス等の発声法と歌唱法、演技法について。
2. 保育者養成校の音楽教育における授業内容、指導法、教材研究について。

【研究の概要】

【研究の概要】

1. 今年度もコロナ感染の不安があり上京してのレッスンを受講できず、技術の習得・表現の習得を達成できず残念であった。昨年度はミックスヴォイスに於いてクラシックやミュージカルとは別の分野で活躍されている男性歌手・アーティストから学ぶべき点が多く、僅かではあるが実践に至るまでの音域や楽曲を身に付けられたように感じた。今までは女性の声・発声・表現から得る事を考え、その考えに沿って研究、演奏活動（アリア等以外）する事が当然と思っていた。理由として、女性はファルセットで統一、メゾソプラノやアルト、音域や楽曲によってはソプラノの低音域では胸声発声、地声も使い、男性は地声で統一していき、カウンターテナーやミュージカルでの役によってはファルセットを使う形が殆どである。女性の声質と発声ばかりに気が向かなかったが、クラシックやミュージカル外の男性歌手から今まで以上にミックスヴォイスや地声を出すための体の使い方を得られたように思う。しかしながら影響を受け学んだ歌い手は、ビブラートをつけず、そのためにかなりの丹田力を用いているように思えた。どのような方法で自分自身にその技術が身につくかを研究した結果、スクワットをしながら頭部を下に向けて下腹・丹田のみを使うほどの意識を試してみた。ビブラートも勿論丹田等の筋肉を使っただけの技法ではあるが、フレーズ最後のビブラートなしと言う歌唱は聴いた事がなかったため、その技術に没頭してしまった。昨年度も記載したがCD、DVD、本、楽譜からある意味新鮮で斬新な出会いとなり、間地かでその歌唱力たる歌唱法と表現力を聴いて、そして観て確認できた自身自身の演奏活動で使う楽曲にどのように使うかのヒントが得られると考えられていた。そして何より言葉の表現力、つまり言葉の伝え方、言葉をどのように重んじどのように自身の言葉として操られるか、声に魅力があっても、発声によどみがなくても、言葉がメロディーにのって人の心に入っていないとそれは音楽ではないと言っても過言ではない事はやはり確信を持てた。昨年より続けているクラシック外のアーティストから、ミックスヴォイスに必要な腹筋の使い方、ビブラートを使わない歌唱法を自らの勝手な解釈ではあるが今年度も迷いながらも研究できたように思う。しかしながら、クラシック畑での活動ばかりをしていた自身にとっては、途中ミックスヴォイスの音域からファルセットの音域に移行する技術が思うようにいかない事も大きな発見であり課題であった。高音域を息の流れにのって声になる事以前に、声帯への負担が大きかったようにも思えた。今後は執着し過ぎないよう自身の歌唱分野のために技術を見直したい。歌唱は美声、技術あつての表現ではあるが、心に届く言葉の表現法や日頃学生にも指導している言葉からのイメージ力の大切さや美しさが素直に心に届き響き、憧れすらも感じた。次年度は、自分らしい音楽を表現できるために、発声・楽曲のもたらす意味、また自分とは違う歌い手の伴奏法を研究していきたい。
- 2.2 班制になっての授業に於いて、残念ながら学生が思うような習得をしていないように感じた。隔週でピアノ・声楽(2年生)、ピアノ・声楽とコード(1年生)の授業をどのように進めていけば学生がピアノならピアノ、声楽なら声楽の授業を毎週受講している事になるか試行錯誤した。学生は隔週であると怠けてしまうためか前回指導した授業内容を忘れており、課題もしていない学生が残念ながら多かった。逆に学生から授業がないと緊迫感がないため、毎週ピアノレッスンも声楽・手遊び・コードもして欲しいとの事だった。1年生はピアノ初心者が多かったが、初心者レッスンや個人的にもレッスンを申し出る学生もいたため各々に上達したと思う。ピアノに抵抗がある事を考え、その緊張度を配慮するために弾き歌いのテスト、またはレッスンも含め少なかつたのは改善したい。しかしながら、1年生は次年度の実習を後期になって教員からの声掛けも関連して、自ら弾き歌いの練習を始めたレッスン希望したりしていた事はとても良かった事であった。声楽はコロナ過で任意ではあるがマスク着用者が多く、声を出すための基本的な指導に限りがあった。マスクを着用していても、着用しているからこそ、口角から表情筋にかけてアップする大切さや、口の開け方、歌詞読みの習得がなされなかったと考える。しかし学生からは歌う事がさらに好きになった、子どもと歌う事が楽しみ、出なかった声(音域)が出るようになった、知らない子どもの曲を知る事ができた、との感想が今年度も殆どであった。楽曲の言葉の意味やイメージに対する意識はかなり足りない面であるため、次年度もイメージ力、楽曲の理解度にも演奏技術同様に指導の在り方を新たに研究した実践したい。

令和5年度(2023年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】准教授 【氏名】太田 美代

【研究の題目】健康づくりのための身体活動・運動ガイドを基にした学生生活活動調査結果の見直し

【研究の概要】

健康日本 21(第三次)における身体活動・運動分野の取組の推進に資するよう「健康づくりのための身体活動基準 2013」が改訂され、「健康づくりのための身体活動・運動ガイド 2023」として厚生労働省から発表された。これは健康づくりのために望ましい「生活活動」並びに「運動」の強さと量を、最新の知見を踏まえてガイドラインとして示したものである。

そこで、令和3年度から本稿において報告している本学栄養士コースの学生を対象にした生活活動調査の結果を、「健康づくりのための身体活動・運動ガイド 2023」を基に見直してみた。

学生の生活活動調査は、栄養士コースの1年生を対象に、個々人の推定消費エネルギー量の算定を行うために実施している。算定の基礎資料として、1日の生活活動の種類と時間を調査し、身体活動レベル別に分類して推定される消費エネルギー量を求め、その総和を1日分の推定消費エネルギーとして求めるものである。

対象となる学生の体格は、2021年度生がやせ5.3%、普通8.9%、肥満度Ⅰ10.5%、肥満度Ⅱ5.3%。2022年度生がやせ4.0%、普通92%、肥満度Ⅰ4%。2023年度生がやせ15.2%、普通78.8%、肥満度Ⅰ6.0%と、肥満・普通の者が減り、やせの者が増えている。生活活動強度については、2021年度生は全ての学生が「低い」に該当した。2022年度生は「低い」88%、「普通」12%、2023年度生は「低い」94%、「普通」3%、「高い」3%であり、ほとんどの学生が、生活活動強度が低いレベルの傾向にある。

生活時間の調査では、2021年度生の平均で睡眠時間が431.05分。炊事や買い物・掃除など家事的生活時間と運動・通学・移動、アルバイトなど比較的体を動かす時間が248.43分。2022年度生は睡眠時間414.6分、家事的生活時間と運動・通学・移動、アルバイトなど比較的体を動かす時間が208.92分。2023年度生は睡眠時間458.94分、家事的生活時間と運動・通学・移動、アルバイトなど比較的体を動かす時間が210.03分だった。余暇の時間は、テレビやスマホ、着席での談話など座位行動に使われることが多かった。ちなみに学業に費やした時間は2021年度生372.53分、2022年度生421.12分、2023年度生377.82分。過去3年で栄養士実力認定試験の成績が最も良かったのは2022年度生だったので、1日の時間の使い方について意識するよう今後指導していきたい。

「健康づくりのための身体活動・運動ガイドライン 2023」では、「強度が3メッツ*以上の身体活動を週23メッツ・時以上行うことを推奨する。具体的には、歩行またはそれと同等以上の身体活動を1日60分以上行うことが推奨されている(1日約8000歩以上に該当)」。2023年度生の生活時間を詳しく見てみると、3メッツ以上の活動時間は平均46分であった。33名の学生のうち、3メッツ以上の活動時間が60分以上の者は9名で27.2%。0分の者が11名で33.3%であり、ほぼ4人に3人で身体活動が不足している状況であった。さらにガイドでは、以下のことが推奨されている。

- ・強度が3メッツ以上の運動を週4メッツ・時以上行うことを推奨する。具体的には、息が弾み汗をかく程度の運動を週60分以上行うことを推奨する。

- ・筋力トレーニングを週2回～3回行うことを推奨する。

- ・座位行動(座りっぱなし)の時間が長くなりすぎないように注意する。

次年度の1年生に生活活動調査を実施する際は、「健康づくりのための身体活動・運動ガイド 2023」の内容を周知し、自らの生活時間を振り返る時間を設けたい。

若い女性のやせ指向は低体重児出征のリスクを高め、胎児が成長してからの生活習慣病の発症にも関与することが知られているが、今年度の調査で対象とした学生に「やせ」の者が増えていることが分かった。また、生活活動強度もほとんどの学生が「低い」という結果であった。栄養・食を通して人々の健康と幸福に貢献することができる栄養士の育成を目指す栄養士コースとしては、学生に自分自身の健康管理も大切にしてはつらつと学業に励む姿勢をもってほしいと考える。

今後、栄養や食に関する学びを自身の健康管理に生かす視点をもつ学生をいかにして育てるかを課題の一つとして授業研究を深めたい。

※メッツ…運動や身体活動の強度の単位で、安静時を1とした時と比較して何倍のエネルギーを消費するかで活動の強度を示したもの。歩く・軽い筋トレをする・掃除機をかける・洗車する・子どもと遊ぶなどは3メッツ程度。メッツ・時は、運動強度の指数であるメッツに運動時間を乗じた活動量の単位。

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】講師 【氏名】古賀 克彦

【研究の題目】二十四節気と長崎の行事食

【研究の概要】

1. 調査の概要

行事食とは、特定の行事や祝祭などの非日常(ハレ)において、その時期や状況に応じて特別に用意される食べ物のことを指す。行事食は様々な暦や季節、宗教行事と関連付けられているものも多いが、暦の一つである二十四節気との関連もみられる。そこで今回、二十四節気と長崎の行事食の関係について調査を行ったので以下に報告する。

2. 二十四節気の成り立ちについて

二十四節気は、太陽が黄道上の分点(春分・秋分)と至点(夏至・冬至)から出て再び各点に戻ってくるまでの周期、つまり太陽暦の1年間を24等分したものである。この二十四節気のなかで、昼の時間が最も長い日を夏至、昼の時間が最も短い日を冬至といい、これを併せて「二至」という。また、冬至の次に昼と夜の時間が等しくなる日を春分、夏至の次に昼と夜の時間が等しくなる日を秋分といい、これらの二つを合わせて「二分」という。また、冬至と春分の中間の節を立春、春分と夏至の中間の節を立夏、夏至と秋分中間の節を立秋、秋分と冬至の中間の節を立冬という。中国から伝来した二十四節気であるが、中国の季節を基に作られており、日本の季節とは違う部分もあったため、二十四節気のほかに、季節の区分けを示す、節分、彼岸、社日、八十八夜、入梅、半夏生、土用、二百十日、二百二十日を雑節として取り入れた。

3. 二十四節気と長崎の行事食

以下に二十四節気に関連する長崎の行事食を示す。

【節分】

長崎の節分では神棚に祀った一升杓の煎り大豆を下げ、「福は内、鬼は外」と唱えながら家の各部屋や台所、便所、家の外に撒いた。その後、撒いた煎り豆を拾って数え年の数だけ食べた。また長崎の節分では大きなものを食べて子供の健康を願った。赤大根の鱈(なます)は赤大根を鬼の腕に見立て「たくましく育つように」との願いを込めた。鯨の百尋は勇魚(いさな)と呼ばれる鯨にあやかって「大きく育つように」との願いを込めた。また、金頭の煮付けは、「お金に不自由しないように」や、「赤ちゃんの首が座るように」との願いを込めた、尺八いか(トッポイカ)の煮付けは、「貯えが出来るように」との願いを込めた。

【彼岸(彼岸会)】

春分の日を中心に、前後3日間ずつを春の彼岸(彼岸会)、秋分の日を中心に前後3日間ずつを秋の彼岸(彼岸会)という。彼岸会は仏事の一つであり、彼岸の際にお墓や仏壇には、春は牡丹餅(ぼたもち)、秋は御萩(おはぎ)を供える。お彼岸に食べる食事としては精進料理があるが、長崎の唐寺では、黄檗宗の精進料理である普茶料理が提供されていた記録がある。

【土用】

土用とは四季の四立の直前の18日間を指すし、春の土用の丑の日には「い」のつく食べ物、夏の土用の丑の日には「う」のつく食べ物、秋の土用の丑の日には「た」のつく食べ物、冬の土用の丑の日には「ひ」のつく食べ物を食べると体に良いとされている。夏の土用の丑の日には「うなぎ」を食べるのはこのためであるが、瓜や梅干し、饅頭等でも構わないとされている。

【冬至】

長崎の旧商家では冬至の日に床の間に関帝の像や掛け軸を飾り、ぜんざい(善財餅)を供えた。関帝は劉備玄德の家臣であった関羽が神格化されたもので、武神であり学業や商売の神様とされている。この習慣は唐人屋敷に居住する唐人から長崎の商人に伝わったとされる。現在でも唐人屋敷の観音堂には観世音菩薩と並んで関帝が祀られている。また、冬至の時期はキリスト教のクリスマスに近い。そのため、江戸時代に幕府によるキリスト教禁教令でクリスマスを祝えなかった長崎の出島在住のオランダ人は、冬至の祝いに見せかけクリスマスを祝った。これを阿蘭陀冬至という。

4. 考察

二十四節気は中国や日本の暦の一つで、太陽の動きや季節の変化に基づいており、一年を通して農作業や行事等を行う際の基準とされている。この二十四節気には多くの行事食が関連付けられていた。この二十四節気の行事食は伝統や文化の一部となっており、後世に伝えることにより、その土地の文化や歴史だけではなく、先人が伝えたい想いも継承することができると思われた。二十四節気とその行事食を後世に伝えることは、単なる食文化や風習の伝承を超えて、地域社会の継続的な発展や文化の豊かさに寄与している。今後も多くの人達に二十四節気や長崎の行事食を伝えていきたい。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】荒木 正平

【研究の題目】

対人ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

(1) 紀要論文

「対人支援の現場における「能力」評価に関する言説をめぐる一考察」

本研究は、筆者がこれまで進めてきた、認知症高齢者ケアの実践現場で「介護する - される」関係に置かれる各主体の感受する違和感に関するいくつかの考察を出発点としている。詳細は省き概要を述べると、そこでは、「介護する - される当事者（支援者と被支援者）」が共同で構築する「物語」の実践的意義と困難性についての検証を行った。さらに、被支援者を「より正しく（可能であれば完全に）理解する」というベクトルで試みられる各種支援の必然性を確認してきた。一方で、「完全な理解」を目指して試みられる実践については、支援者／被支援者双方に付きまとうある種の息苦しさ、端的な不可能性についても確認することができた。このことから、「完全な理解」志向とは別様の支援関係のかたちも併せて模索してきた結果、「遊び」や「ゆらぎ」といったキーワードに象徴されるようなケア実践の意義と可能性についても確認することができた。

また筆者は上記と並行して、広義の障害児教育・保育（特別支援教育も含む）の実践場面における支援者・被支援者それぞれが抱く多様な困難感についても研究対象とし、インクルーシブ教育・保育や合理的配慮に関する先行研究の成果も踏まえつつ、考察を行ってきた。支援に関わる各主体の悩みや戸惑いの発生に関する場面をミクロに分析するなかで得られたのは、「能力（できること）への強すぎる指向性」に対する懐疑と、「遊び」概念の有する意義に対する確信であった。

これらを踏まえ本研究では、認知症高齢者、障害児・者のみならず、児童養護施設などにおいて社会的養護の対象とされる子どもたち、そのほか広くケアを必要とする人々の「理解」をめぐり、より具体的にその前提となる「能力」評価のあり方について検討を進めた。さらに、昨今複数の学問領域を横断するかたちで注目を集めている「ネガティブ・ケイパビリティ」概念をとりあげ、ケア実践の文脈においてはいかに位置づけられうるかについて考察をくわえた。

本研究は、社会一般で対人支援を評価する際の暗黙の前提とされ、また、しばしば支援の目標・指標ともなる「能力」をめぐる考察を行ったものである。「能力」とその評価をめぐる言説が、いかにケア実践の現場において用いられ、支援の方向づけに関与し、場合によってはそれを決定づけてきたのか。また、そのような「能力」評価がなされ（ていることを前提として実施されるミクロな支援実践のあり方について、対人支援者／被支援者を含む当事者たちはいかに関与して（させられて）きたのか。能力主義あるいはメリトクラシーとケアの対象となる人々（ここでは研究の端緒として障害（児・者）を対象とした論考を主に検討しているが、前述の通り筆者がこれまで研究対象とさせていただいてきた認知症高齢者を含む、広義の対人支援の受け手であれば、いずれもその対象となりうる）との関わりを検討した先行研究から論点を整理したうえで、支援者の語りを中心に検討を進めた。

(2) 雑誌論文

「認知症の重症度に応じたコミュニケーションのポイント」

対人ケアをめぐる研究として、今年度も認知症高齢者ケアをテーマとした論文を執筆し、雑誌論文として報告した。テーマは「認知症の重症度に応じたコミュニケーションのポイント」と設定されている。内容について概要を示すと、「中核症状とBPSDについて」「認知症の進行によるコミュニケーション能力の変化（「1. 軽度認知障害(MCI)」「2. 初期の認知症」「3. 中等度の認知症」「4. 重度の認知症）」「まとめ(ケア場面における“理解”と“遊び”について)」となっている。

上記いずれの論文においても、(また本稿では触れていないが今年度実施した学会発表においても、)筆者はケア場面におけるコミュニケーションの在り方について、とりわけ「遊び」の意義に着目しながら論じている。今後もこのテーマについての考察を進めていきたいと考えている。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】船勢 肇

【研究の題目】

- ①、子ども観の変遷
- ②、大学自治論の思想史研究

【研究の概要】

- ①、株式会社みらいより、教育原理の教科書(阿部孝編『教育原理 教育・保育をひらく』)の執筆をおこなった。第2章「子ども観の変遷」を担当した。3月末に刊行予定である。みらい社の教科書はこれまでに使用したことがあるが、章ごとのまとまりが特に分かりやすく、本学の学生にも手に取って取り組みやすい工夫がされていると感じていたところである。

テキスト全体については次のような特徴がある。幼稚園や小学校教員、保育者を目指す人が、教育・保育の本質を学ぶためのテキストとして作成されている。教育・保育を身近なものにとらえ、初学者向けにわかりやすく解説した。歴史・思想から現代の制度や課題まで、全体を通して子どもや教育・保育者をイメージできるよう努めた。コラムや注では、関心や理解を深めるための興味を引く豆知識や情報も紹介することを心がけた。

刊行直前の書籍のため、詳細な内容は差し控えるが、アリエスやルソー、近現代日本などを例に取りながら、子ども観が政治に容易に規定されてしまう危険性にふれた。

- ②、戦前日本において、もっとも辛辣に大学自治を批判した蓑田胸喜を研究対象とした。

資料として全集が刊行されているものの、購入は困難であり、他大の図書館を利用しつつ、膨大な資料を収集・分析している。昨年度から継続している作業を続けることとなった。とはいえ、研究時間が少ない中で研究を進めることはかなり困難である。大学教員として社会から付託されている責任を思えば、良心の呵責に苦しむ。蓑田は、極端な観念右翼といわれたため、研究対象として正面からあつかわれにくかった。そのため著名でありながら研究する余地を多分に残している。

蓑田胸喜(1894年1月26日 - 1946年1月30日)は、日本の右翼思想家、反共主義者である。熊本県出身、東京帝国大学文科大学宗教学科を卒業した。慶應義塾大学予科、国土館専門学校教授、原理日本社主宰、国際反共連盟評議員を歴任した。マスメディア上で、大学の権威性や硬直性を執拗にバッシングした人物である。こうした点では非常に現代的な言論関係者ともいえるが、わかりやすい敵を見つけてバッシングを与えるスタイルととったが、その際に分かりやすい表現を用いたとはいえずポピュリストのような大衆の支持を集める向きとしては不徹底ともいえる。

さらに、これまでの研究(著名な滝川事件のきっかけとなった瀧川幸辰・同じく京都大学法学部に在籍し戦後は立命館大学学長となった末川博・教育基本法を起草した田中耕太郎・戦後大学行政の象徴的な存在である南原繁など)を大きな視点からまとめ、単著出版の道筋を具体的なものにしていく。

展望としては新自由主義と学問の関係について議論をつなげていくことを志向している。大学行政については、単に大衆の支持を集めやすい思いつき程度の提案が、現実として強力な力となって動かしているようにおもわれる。現代の大学行政の動向をみやりつつ、ささやかながら専門的な知見を社会に発信し、社会への責任の一端を担いたい。

投稿予定の論文につき、詳細な内容をここで公表することは出来ないが、より広い背景として20世紀の行政国家化を念頭におきながら、大学の意義づけとの関連について考察する。

今年度は筆者の研究が引用される機会をわずかに得た。しかし、そもそも研究水準から注目されるような研究を進めるには、常に研究課題が頭をついて離れないような状態にしておくことが必須の条件となる。よって、他の業務との合わせた時間管理を見直すことや、体調管理といった点にも強い意識を払いながら取り組んでいく必要がある。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】野田 章子

【研究の題目】

幼児期の開発教育
“アフリカのお友達と遊ぼう！”の保育実践から

【研究の概要】

1. 問題の所在

開発教育は1960年代に欧米諸国の国際協力に関するNGOから提唱された言葉であるが、近年では学校教育におけるSDGsの学びにその内容が活用されている。そのような現状で注目されているのが、幼児期の開発教育の普及と促進である。しかしながら日本においては、幼児期の開発教育の実践は未だ少ない状況である。よって本研究では、実践を通して幼児期に適した開発教育の内容や方法を検討し、幼児期の開発教育の在り方を提案する。

2. 研究方法

2023年12月6日に、S市Hこども園にて約60分の保育実践をおこない、その振り返りをおこなった。対象は、年長児のS組(男児9名、女児14名の計23名)である。またその実践から指摘できた改善点を踏まえ、2024年2月26日にN市N幼稚園で約60分の保育実践をおこない、再度振り返りをおこなった。対象は、年長児のB組とM組(男児18名、女児12名の計30名)である。振り返りでは、実践で使ったワークシート(図1)を分析した。

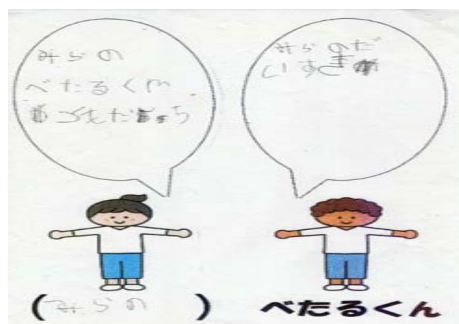


図1 ワークシート 参考:秋山宏次郎(監)『保育で取り組むSDGs』(2022)新星出版社

3. 考察

幼児期の子どもがアフリカの鬼ごっこを知り、遊びを通してアフリカの子どもを友達と思えたことが本実践の成果である。活動の終わりには、ペープサートのアフリカの男の子べたる君に「バイバイ、また遊ぼうね！」と声をかけ手を振る姿があり、ワークシートには、「いっしょにあそんでくれてありがとう」、「またあそぼう」という言葉が書かれていた。さらに、その遊びの共有からべたる君に対し「ともだち」という言葉を使っていた。これらの振り返りから、子どもがアフリカの鬼ごっこを通してアフリカの子どもとつながることができていたと分かり、日常的な遊びの体験は疑似的社会体験を可能にすると考察できた。また、アフリカの子どもの日常的なあそびを教材として開発することで、ESDやアンチバイアス教育の求める、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解教育へとつながられることが分かった。さらに、文化の違い、多様性を示すために、アフリカの多くの国のあそびをとりあげ実践することが必要であることが明らかになった。「違い」のなかに同質のものをみつけるために、世界の子どもに共通するあそびの楽しさがどのように有効なのか引き続き検証をおこなう。

4. まとめ

今回教材化したコルキーは、伝承遊びではないが、アフリカの子どもを知ることができる。捨てられているコーラの蓋を集めコルキーをつくり出す逞しさ、積み上げた蓋をボールで倒すとボール当て鬼が始まるというコルキーのアレンジもあり遊びを考え出す創造力、ボールがない時は古い靴下に草をつめて丸くしたものを使って遊ぶなどの発想力などである。日本の子ども達にもぜひ見習ってほしいアフリカの子ども達の生きる力である。

研修で教職員にエチオピアの映像を見せると、「不衛生な感じ」「トイレが無理」「水が汚い」「虫が多い」などネガティブな意見が聞こえてくる。しかし、SDGsでは先進国の豊かさが地球破壊の要因であると指摘されており、先進国は途上国の生活を学ばなければならない現状がある。多くの人が日本にあってアフリカにないものはすぐ指摘できるが、アフリカにあって日本にないものには気づかないのである。

初めて世界の扉を開く幼児期の開発教育では、アフリカのポジティブな部分に焦点をあてたい。そして、アフリカに生きる子どもの逞しさや明るさを日本の子どもが知り、互いを友達と感じられるような実践を積み重ねることが必要だと感じる。幼児期・児童期に培った友達という意識が、今後互いを尊重し、心配しあえるような関係をつくるための原動力になると提案したい。

※本研究の実践報告は、長崎女子短期大学紀要第49号:27-35に掲載、成果報告は日本スポーツ人類学会第25回記念大会(2024年3月17日)にておこなった。

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】講師 【氏名】桑原 真美

【研究の題目】栄養士養成のためのeラーニングシステム導入とその効果

【研究の概要】

令和4年度より、栄養士養成課程の学修補助ツールとして開発されたWebアプリケーション Knowledge Enhancement of Nutrition Student(略称: KENS 以下 KENS と呼ぶ)の導入に向けて学生へ対するユーザビリティテストを実施し、その結果をもとにアプリ内の機能の改善をしてきた。令和5年8月より本学生生活創造学科栄養士コース2年生(24名)が KENS の利用を開始した。導入後、KENS に搭載されている小テスト機能を2年次後期開講の公衆栄養学にて利用しているものの、学生の自主学習支援を目的として搭載されているトレーニング機能の利用が主であった。本年度は学生のトレーニング機能の利用状況とトレーニング機能についてのアンケート調査を実施した。

栄養士実力認定試験未受験者を除く KENS アカウント登録者23名中、学生がアカウント登録をした8月3日の翌日である8月4日から栄養士実力認定試験の試験日当日である12月10日までにトレーニング機能を1回以上利用した学生は20名、問題解答総数は32,286問であった。最も多く解かれた問題の科目は生化学であり、次いで調理学、解剖生理学、栄養学総論と続いた。また、8月4日を初日として12月10日までの期間、7日間を1週として週毎の利用者実数および利用者1人あたりの問題解答数の平均を算出した。栄養士実力認定試験が12月10日に実施されたことから、最終週の第19週は3日間の集計結果である。夏季休業期間から後期始業直後の第1週～第10週は利用者が1～5名を推移していたが、第11週～第12週に利用者がやや増加した。その後利用者が減少しているのは学外実習や学園祭が影響したものと考えられる。第17週には利用者が13名と再び増加したが、その要因として栄養士実力認定試験対策として開講している栄養士スキルアップ特講の最終試験が実施されたことがあげられる。第18週は利用者が9名と減少し、最終週にあたる第19週の3日間に利用者数が最大の16名となった。利用者1人あたりの問題解答数の平均については、夏季休業中から後期始業直後の第1週～第9週は100問以下であったが、その後増加し第17週および第18週は500問を超えた。最終週の第19週に関しては、集計期間が3日間であったものの問題解答数の平均は462問となった。また、1人当たりの問題解答数の最大値は第17週および第18週が約4500問、第19週が約2300問となり、非常に多くの問題を解答した学生が存在したことがわかる。

KENS のトレーニング機能について、利用目的や使用感を調査するため、KENS アカウント登録者24名中、栄養士実力認定試験未受験者とアンケート実施日の欠席者1名を除く22名を対象とした自記式アンケート調査を実施した。トレーニング機能を利用したかの問いには95%が「はい」、5%が「いいえ」と答えた。トレーニング機能は使いやすかったと思うかの問いには「とてもそう思う」が68.4%、「ややそう思う」が26.3%、「どちらともいえない」が5.3%という結果が得られた。トレーニング機能利用者のうち94.7%の者が使用感について肯定的な意見を持っていることが明らかとなった。マイデータ機能にてトレーニング機能の成績や利用履歴を確認したかの問いには「頻繁に確認した」が15.8%、「たまに確認した」が57.9%、「確認しなかった」が26.3%という回答結果が得られた。トレーニング機能の利用目的で最も多かったのは「栄養士実力認定試験対策」で80%、次いで「小テスト対策」40%、「栄養士スキルアップ特講の模擬試験対策」35%、「日頃の学びの確認」15%であった。トレーニング機能利用者の中には栄養士スキルアップ特講の模擬試験対策としてのみ利用していた学生もあり、栄養士実力認定試験対策としては利用していない学生が存在することが明らかとなった。トレーニング機能を栄養士実力認定試験対策として利用した16名のうちトレーニング機能が栄養士実力認定試験対策に役立ったかの問いへの回答は、「とてもそう思う」が68.8%、「ややそう思う」が18.8%、「どちらともいえない」が12.5%であった。KENS に追加してほしい機能は「5択問題機能」が3名、「問題のお気に入り登録機能」が3名、「問題のレベル分け」が1名、「問題数の増加」が1名、「トレーニング機能の問題出題数設定の際に初期設定問題数を10問程度に減らしてほしい」が1名であった。

本年度は、KENS の利用が栄養士実力認定試験の成績へ与える影響についての検証はサンプル数が少なく、データのばらつきがあったためできなかった。次年度は利用者アンケートを参考にしたシステムの改修と KENS 利用が成績に与える影響について検証したい。

令和5年度(2023年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース 【職名】特別基幹講師 【氏名】江頭 万里子

【研究の題目】秘書実務1、2における反転授業の試みについて

【研究の概要】

令和3年度入学生(以後21L、24人)に対して、秘書実務1で1回、秘書実務2で1回反転授業を行い、授業法についてのアンケート調査を行ったところ、学生がこの授業法に好感を持ったことが分かった(本学紀要第48号に記載)。令和4年度入学生(以後22L、17人)に対しては、反転授業の回数を増やすことで、学生の学習意欲を高め、授業内容の定着に効果があると仮定し、授業を行った。結果検証は、本学が授業終了後に無記名で行っている学生による授業評価の結果を指標として行ったところ、一定の効果が見られた。

1. 目的

秘書実務(演習科目)に有効な授業法を検討する基礎資料とする。

2. 方法

22Lに対して「秘書実務1」「秘書実務2」で反転授業の単元数を前年度より増やして行い、反転授業を全く行わなかった令和2年度入学生(以後20L、23人)と、「秘書実務1、2」でそれぞれ1単元反転授業を行った21Lと、本学が無記名で実施している学生による授業評価アンケートの結果を比較して授業法の有効性を検証する。22Lには、秘書実務1で3単元、秘書実務2で6単元反転授業を実施した。

3. 結果と考察

授業評価アンケートにおける5段階評価の評価5の割合を20L～22Lの3年間で比較した。秘書実務1の22Lの評価5の割合は、「授業の総合評価」82.4%、「教員の教え方」88.2%、「学生の取り組み」76.5%で、全ての項目において3年間で一番多かった。「授業内容の理解」は、76.5%で20Lの77.3%より0.8%少なかった。秘書実務2の22Lの評価5の割合は、「授業の総合評価」81%、「教員の教え方」88.2%、「授業内容の理解」76.5%、「学生の取り組み」82.4%で全ての項目において評価5の割合が年々増加した。「授業外学修時間」は、秘書実務1では、1時間未満が20Lは18.2%、21Lは、41.7%、22Lは、5.9%で、22Lが1時間以上授業外学修を行った割合が一番多かった。秘書実務2では、1時間未満が20Lは26.1%、21Lは45.9%、22Lは0%で全員が1時間以上授業外学修を行っており、授業外学修時間が年々増加した。

以上から、反転授業の単元数が3年間で0→1→3と微増した秘書実務1の授業評価は、比較的良好な結果ではあったが、3年間で大きな変化は見られなかった。反転授業の単元数が3年間で0→1→6と増加した秘書実務2では、4項目すべてにおいて評価5の割合が年々増加した。以上より、反転授業を行う単元を増やしたことで、学生の学習意欲が向上し、それに伴い授業内容の理解、満足度も向上したのではないかと考える。事前学習の動画は必ず1回は見るように指導したが、多くの学生がアンケートに複数回視聴したと回答した。反転授業が学生の自主的な学びに繋がったのではないかと考える。

今回の取り組みは、対象の学生数が少なく、結果は学生の特性による違いも否定できない。今後も内容を改善しながら、反転授業を行い、その結果を検証していきたい。

変化が顕著に現れた秘書実務2の3年間(20L～22L)の授業評価の結果(図1～5)を下に示す。

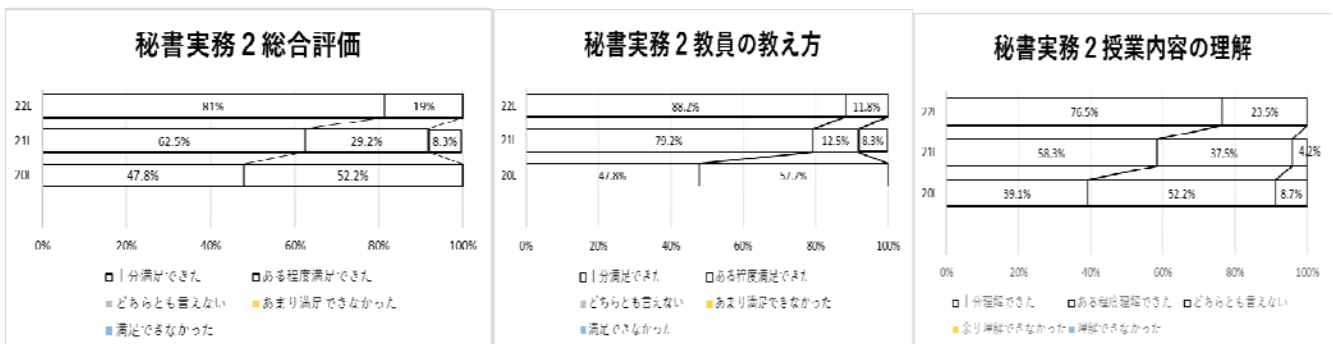


図1. 授業の総合評価

図2. 教員の教え方

図3. 授業内容の理解

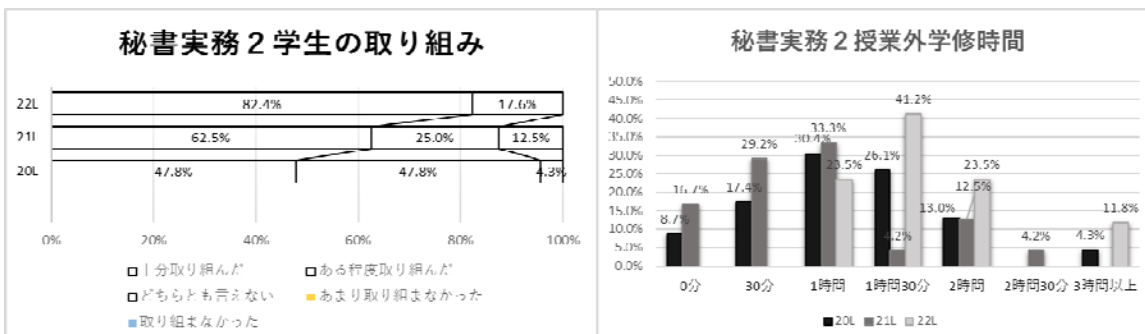


図4. 学生の取り組み

図5. 授業外学修時間

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】大徳 朋子

【研究の題目】 描画(ぬり絵とぐるぐる描き)における心理的内界の発達と理解について

【研究の概要】

1.目的

保育場面において、子どもの心的内界を理解することは大変重要なことだと思われる。現在は早期より集団生活に入る子ども達が多く、家庭でも親子で過ごす時間が少ない傾向にあり、子どもは自らの要求や心の変化に細やかに対応してもらう機会が減っていると考えられる。そのような中、子ども達が遊びの一貫として描く描画を深く知ること、子どもの心理面の変化や発達を把握し、関わりにつなげることができることは、子どもの心の成長に反映させられると思い、子どもの描画の研究を進めている。今年度は、データを増やすことができたが、まとめて発表の形に至らなかった。今後は、結果をまとめ、保育士が抱えている子どもの印象とのすり合わせなどを行いながら、さらに描画を理解していければと考えている。

2.方法

筆者が保育所等を訪問し、保育者へ説明し、協力してもらい実施した。保護者への了解は事前に保育者をお願いし、研究以外には利用しないことを伝えてもらい、研究への参加は自由とした。参加したくないと思われる方への実施はしない予定だったが、該当者はいなかった。実施は少人数で行ない、子どもの様子が把握できる環境を整えた。終了後は、描画時の様子や、完成後の気持ち等を聞き取り、記入した。

また、ぬり絵については、単純な形を塗り、その色や筆圧、線からはみ出しといった点からも発達や心的内界の理解ができると考えた。ぬり絵は2種類の形(丸と半円)から好きなものを選び、塗りたいように塗ってもらった。

3.内容

A4の画用紙とクレパスを子ども一人一人に1セット準備し、「今、一番好きな色を選んでね」と声をかけ、画用紙に15～20秒ほどぐるぐる描きをしてもらう。その後、他の色を選び、同様に描いてもらう。全5回繰り返して描画を完成させる。完成後、皆で作品を鑑賞し、楽しかったことや綺麗に描けたことを共有して終了する。上手、下手といった評価につながるような声かけはしないように注意する。実施中、指示に従いにくい子どもには細かく声をかけるなど配慮しながら実施する。

4. 結果

現在、まだ分析中であるが、描かれた丸の大きさや形状、使用したクレパスの色などを計測してデータ化した。描かれた丸の大きさ、筆圧などからは、心的内界のエネルギーの強さや弱さがわかると思われる。丸を複数描く、1つの丸にして描く、画用紙全体を塗りこめるように描く、などといった形状の違いからは、自己への没頭性または、周囲へ意識を向けているのかといった特徴が現れていると考えられる。さらにクレパスの色からは、先行研究から男性が好む色、女性が好む色の違いが述べられている。大きく分けると、男性は青、黒、緑、といったいわゆる寒色を、女性は赤、オレンジ、黄色といった暖色を選ぶという結果があり、そこからは、色と子どもの性役割について子どもがどのように感じているのかがみえると思われる。このようにみていくと、寒色で大きな丸を筆圧強く描いた作品からは、心理的内面のエネルギーの強さ、自己への没頭性、男の子らしさなどが印象としてあがってくる。反対に、暖色でいくつかの丸を描き、筆圧はさほど強くないという作品からは、心理的内面のエネルギーの弱さ、周囲への意識が高い、女の子らしさ、などがあげられる。実際の現場の保育士からの印象と照らしてみると、8割程度が作品からの印象と合っているようである。よって、子どもが描いた描画作品から子どもの内面の理解をすることができるということはある程度立証できるとと思われる。

また、ぬり絵については、枠線からはみ出し状況から、対象の認識度合いを図り、発達のアセスメントにつながると考えられた。また、ぐるぐる描きと同様、筆圧や色合いなどから同様の分析を行い、内面の強弱、性役割の認識などに繋がれると考えている。

また、このような描画の実施は、子どもにとっては楽しい活動になり、さらに感情の発散、運動発散にもつながることが考えられることから、ぜひ現場の保育士の先生方には利用法や得られる結果を理解し、利用していただけるように、結果を十分に伝えていけるよう、結果をまとめ、学会等での発表へ繋げていきたいと考えている。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】助教 【氏名】山中 慶子

【研究の題目】幼稚園の年少、年中、年長児における表現行為の傾向に関する研究—牛乳パックピースを使った実践での他者との相互行為の違いを中心に—

【要旨】本稿は、幼児の自発的な遊びや表現行為を、特定の材料との関わりから観察することで、各年齢における行為の傾向を考察することを目的とする。そのため、年少児(3・4歳)、年中児(4・5歳)、年長児(5・6歳)の各クラスで、これまでに幼児が遊んだ経験のない「牛乳パックピース」との関りを約30分間観察した。結果、年少児では「空間遊び」が継続して出現し、年中児では半数以上が「材料遊び」から「操作遊び」、「造形表現」へ移行した。「模倣遊び」、「構成遊び」は、年長児でのみ顕著に出現した。幼児の行為は、年齢に伴う成熟と経験による学習を基盤に、全身で材料と関わる行為から、自己のイメージを表現する造形表現へ向かう傾向があることが確認された。本調査から、年齢が上がるにつれ、社会的な意味をもった他者との相互的な行為を通して、遊びや表現行為を決定していることが考えられた。

【研究の概要】

目的・方法

保育者にとって、身体、言葉、社会性など、変化がある程度明確な発達のだ道筋は、年齢に即した援助のために必要な知識である。しかし、発達の側面からだけでは子どもの「経験による学習」を予測することは難しい。なぜならば、幼児の自発的な活動を支えるのは、個によって異なる多様な知的好奇心や興味だと考えられるからである。本稿では、様々な遊び方のできる牛乳パックピースを用いて、幼稚園の3・4歳児、4・5歳児、5・6歳児の各クラスで、室内での自由遊び時間に幼児が材料と関わる様子を観察した。実践時間は約30分間とした。

結果

年少児の実践における出現行為の推移と事例

全体として、年少児の行為は「材料に身体全体で関わる空間遊び」と、「道具を使って材料と関わる操作遊び、造形表現」に二極化した(図1)。

年中児の実践における出現行為の推移と事例

全体では、半数以上の幼児が「形状の確かめ、形を模索する材料遊び」から、「操作遊び」、「造形表現」に移行した(図2)。

年長児の実践における出現行為の推移と事例

年長児では、開始直後、自分のイメージしたものを作ることに集中する幼児が半数を占め、それぞれの造形表現を行っていたが、行為の区切りがつくと友達の行為を観察し真似る姿が見られた。また、時間と共に「造形表現」を行う幼児の数は減り、「構成遊び」、「操作遊び」、「材料遊び」と、各々の興味のある遊びへと移行していった(図3)。

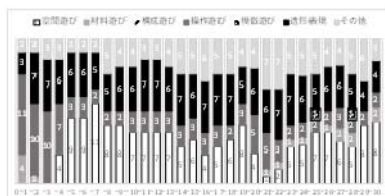


図1. 年少児の出現行為の推移 (1分毎)

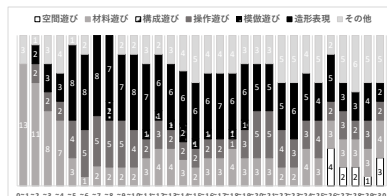


図2. 年中児の出現行為の推移 (1分毎) 年

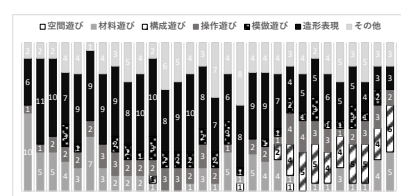


図3. 年長児の出現行為の推移 (1分毎)

考察・今後の課題

考察されたことの一つ目は、幼児は年齢に伴う成熟と経験による学習によって、全身で材料と関わる行為から、「内的なもの」を表現する造形表現へ向かう傾向があることである。また、集団での経験値が上がるにつれ「形に残る造形表現が好ましい」という認識が成されていることが推察された。二つ目に、幼児は年齢による成熟と経験を重ねるにつれ、社会的な意味をもった他者との相互行為を通して、遊びや表現行為を決定していることが考えられた。年長児の他者を真似る行為は、仲間の証や、共同遊びへの誘いでもあり、社会的な意味を持った行為だと捉えられた。

しかし、幼児の行為が、年齢に伴う心身の成熟に因るものか、経験による学習に因るものかの区別は難しい。今後、他の保育施設との比較より、さらなる分析が必要だと考える。幼児の行為の変化は、個にとって新しい興味喚起の結果であり、その興味は後の主体的な学びに繋がる可能性がある。岡田涼は、学校段階ごとの動機づけ概念を調査し、「小学生の段階では、興味や価値によって学習に取り組む自律的な動機づけと親や教師などからの指示で取り組む統制的な動機づけが弁別されており(略)いずれか一方のみが強い児童が比較的多く存在している」と述べている。年長児の遊び場面では、他者を意識した行為から、自身の興味による行為へ移行することが確認されたが、小学校での学習への動機づけにも「統制」、「自律」が関係しているという。今後は、「遊び」と「学習」の関係性に焦点をあて、縦断的な研究を進めていきたいと考えている。

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】助教 【氏名】太田 智子

【研究の題目】 市販長崎カステラの特性について

【研究の概要】

1. 背景

カステラは長崎を代表する銘菓で全国的にも広く知られている。長崎にカステラが伝えられたのは、ポルトガル船が交易のため長崎に入港した安土桃山時代だといわれている。栗生野語、カステラは日本人の手によって改良が重ねられ、現在のように四角形の甘くやわらかなものとなった。カステラはスポンジケーキに分類され、鶏卵、砂糖、小麦粉を主要な材料としている。これらの配合割合や製法は専門店ごとに職人から職人へ独自の方法が引き継がれ、さらに門外不出とされていることが多い。また、2006 年には「長崎カステラ」が長崎県菓子工業組合によって地域団体商標登録(登録第 5003044 号)され、他の商品との差別化を図り、伝統の製法や味を守っている。そこで、市販長崎カステラ 5 種類の比重、硬さ、色調を測定し、その違いについて検討した。

2. 方法

長崎県内の専門店で製造され、カットされた状態で販売されているカステラ 5 種を試料 A～E とした。原材料は、卵、砂糖、薄力粉、ザラメが全ての試料で共通しており、水あめの種類およびはちみつの有無、製造方法が異なっていた。比重は試料の重量を測定し(sartorius, 電子天秤 CP4235)、体積で除して算出した。硬さの測定にはレオメーター(島津製作所, 小型卓上試験機 EZ-Test CE 型)を用い、咀嚼試験モードにて測定した。測定条件は、プランジャー:ステンレス製で直径 20mm の円柱型、貫入速:50mm/min、貫入距離:10mm、繰り返し:2 回とした。試料の色調は、色彩色素計(コニカミノルタ, CR-400)を用いて測定した。L*値、a*値、b*値を測定し、色差 ΔE^*ab を算出した。なお、色調についてはカステラ内相に加えて表皮の焼き色についても測定を行った。なお、試験結果は平均値 $\pm$ 標準偏差で示した。試料間の差は一元配置分散分析を行ったあと、Bonferroni 法による有意差検定を行った。有意水準は 5%とし、統計解析には Microsoft Excel 2019 を用いた。

3. 結果および考察

比重は試料 B が他の試料と比べやや低い値であったが、有意な差は認められなかった。平均は $0.42 \pm 0.01 \text{g/cm}^3$ 、最小値は B の 0.37 ± 0.01 、最大値は 0.45 ± 0.02 であった。カステラやパンなどの多孔質食品は、膨化率が大きく、比重と密度が小さいことが特徴とされる。長崎カステラの製法等は 400 余年の間、改良を重ねながら職人から職人へと伝えられてきた。特に、仕上がりの状態については具体的な数値ではなく、いわゆる熟練の技や経験として伝えられてきたものと推察される。今回用いた試料の配合割合や製法の詳細はわかりかねるが、比重に明らかな違いはみられなかったことから、長崎カステラは異なるバターであっても比重 4.0g/cm^3 前後を基準に仕上げられていることが示唆された。

硬さは、E、C、D、B、A の順に高い数値を示したが、有意な違いは認められなかった。平均 1.484 ± 0.053 、最小値は 1.296 ± 0.029 、最大値は 1.634 ± 0.097 であった。製造後 2 日目の市販カステラの硬さを測定した研究(n=10)では、平均 1.45 ± 0.046 と報告されており、今回の測定値と近い値を示していた。また、比重と硬さの関係について関連性はみられなかった。カステラは焼成後に一昼夜置くことで生地を落ち着かせ、甘さをなじませる。その後、包装され製品となるが、その間に硬さがある程度の範囲に落ち着くものと考えられる。

カステラ内相の色調について、試料 A、B、D のカステラ内相は緑みの黄色、C、E は赤みの黄色を呈していた。また、総合的には A が最も明るい黄色、E が最も暗くやや黄色味が少ないという特徴がみられた。色の違いを表す色差 ΔE^*ab は、全ての試料が感知できるほど異なる色調を示していた。カステラ表皮の色調について、a*は B-D 間、b*は A-B、A-E、D-E 間で有意な違いがみられ、特に試料 E は緑みのある濃い茶褐色を呈していた。 ΔE^*ab は、C-D 間を除き、「感知し得る」以上の色差を示した。卵黄の主な色素成分はカロテノイド色素のルテインやゼアキサンチンであるが、これらは餌料に由来している。カステラ内相および表皮における色の違いは、使用する卵黄の色素成分と含量の影響を受けたものと考えられる。また、卵黄の配合割合が高いほど濃い黄色を呈とする研究もあり、鶏卵の使用量も色差の要因のひとつであると考えられる。

